楠・荒田町遺跡Ⅲ

1990

神戸市教育委員会

楠・荒田町遺跡Ⅲ　正誤表

P 7　表 2　周辺の青銅器出土地	
森北町 ……	内　花
	↓
	重圏銘帯鏡

楠・荒田町遺跡Ⅲ

1990

神戸市教育委員会

序

かつて，神戸の旧市街地は，遺跡の空白地帯でした。しかし，今から10年前，高速鉄道（地下鉄）建設で，幾つかの遺跡が発見されました。また，それを契機に，市街地における遺跡の存在が注目され，今日では数多くの遺跡が知られるようになりました。

当遺跡も高速鉄道建設によって発見された遺跡で，弥生時代の集落遺跡としては，畿内では稀有な貯蔵穴群を有し，当時注目され，また西摂地域西端部の弥生時代文物を明らかにすることができました。

今回，第３次調査を実施し，弥生時代中期の様相とともに，縄文時代後期の遺構の存在も明らかになり，小規模な発掘ながら成果を上げることができました。

ここに，その概要を報告し，多くの方々に御活用，御批判いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが，発掘調査にご協力いただきました，多くの方々に御礼申し上げます。

平成２年３月

神戸市教育委員会

教育長　福　尾　重　信

例　　言

1　本書は，楠・荒田町遺跡第３次発掘調査の報告書である。

2　楠・荒田町遺跡は，神戸市中央区楠町・橘通，兵庫区荒田町・西上橘通等に分布する遺跡であるが，今回の調査地は，兵庫区西上橘通２丁目に所在する。

3　発掘調査は，共同住宅建設に伴うもので，神戸市教育委員会が，株式会社朝日住建から委託を受けて，昭和61年10月21日から同年12月13日までの間に実施したものである。発掘調査面積は，260㎡である。

4　発掘調査組織

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

小林行雄	京都大学名誉教授
宮本長二郎	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
檀上重光	神戸市立博物館副館長

教育委員会事務局

教育長	山本治郎
社会教育部長	金治勉
文化財課長	増川修三
埋蔵文化財係長	奥田哲通
事務担当学芸員	口野博史，井治康明
調査担当学芸員	丸山潔

5　出土遺物については，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長　佐原眞氏，同研究所平城宮跡発掘調査部考古第一調査室　岩永省三氏，奈良大学助教授　泉拓良氏に御教示をいただいた。

6　縄文時代後期土坑出土の種子類については，名古屋大学教授　渡辺誠氏に鑑定および原稿執筆をお願いした。

7　石器および礫については，八尾市立刑部小学校教諭　奥田尚氏に鑑定および原稿執筆をお願いした。

8　遺構実測は，丸山，古屋浩，遺物実測は，丸山，谷川京子，原稿執筆は丸山が担当した。

9　調査参加者

補助員　古屋浩

整理員　谷川京子，西川紀子，大前厚美，辻本京子，小川真由美

本文目次

序
例言
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　周辺の弥生遺跡 …… 3
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 9
　Ⅰ概要 …… 9
　Ⅱ包含層出土土器 …… 9
　Ⅲ縄紋時代 …… 13
　Ⅳ弥生時代 …… 17
　Ⅴ土製円板 …… 46
　Ⅵ土錘 …… 46
　Ⅶ石器 …… 49
第Ⅳ章　出土石種について（奥田尚） …… 63
第Ⅴ章　自然遺物（渡辺誠） …… 67
第Ⅵ章　まとめ …… 73

挿図目次

図1　第1～3次調査位置図 …… 1
図2　第2次調査遺構平面図 …… 2
図3　周辺の弥生遺跡分布図 …… 8
図4　出土遺構配置平面図 …… 11・12
図5　包含層出土土器 …… 13
図6　SK09平面・断面図 …… 14
図7　SK09出土土器（1～4） …… 16
図8　SK01出土土器（1・2） …… 18
図9　SK02平面・断面図 …… 20
図10　SK02出土土器（1～11） …… 21
図11　SK05出土土器 …… 22
図12　SD03出土土器（1～11） …… 25
図13　方形周溝墓SD02・04・05
　平面・断面図 …… 29
図14　SD02出土土器（1～4） …… 30
図15　SD04出土土器（1～3） …… 32
図16　SD05出土土器（1～3） …… 33
図17　SX01A平面・断面図 …… 35
図18　SX01A出土壺形土器（1） …… 37
図19　SX01A出土壺形土器（2～11） …… 40
図20　SX01A出土土器 …… 43
図21　SX03出土土器 …… 46
図22　土製円板（1～28） …… 47
図23　土製円板（29～41） …… 48
図24　土錘 …… 48
図25　石鏃 …… 50
図26　石錐 …… 51
図27　楔形石器 …… 52
図28　刃器 …… 53
図29　石庖丁（1～8） …… 54
図30　石庖丁未製品 …… 55
図31　石斧 …… 56
図32　礫石器（1～5） …… 59
図33　礫石器（6～8） …… 60
図34　砥石（1・2） …… 61
図35　石錘（1・2） …… 62
図36　管玉 …… 62
図37　トチの分布とその実を食した地域 …… 70

写真目次

写真1　包含層出土土器 …… 10
写真2　SK09遺物出土状況及び出土土器 …… 15
写真3　SK09出土土器（凹線紋） …… 16
写真4　SK02平面 …… 19
写真5　SK02断面 …… 19
写真6　SK02出土土器紋様 …… 20
写真7　方形周溝墓SD02・04・05（西から） …… 27
写真8　方形周溝墓SD02・04・05（南から） …… 27
写真9　方形周溝墓SD02・04コーナー部 …… 28
写真10　方形周溝墓SD04・05コーナー部 …… 28
写真11　SD02花崗岩出土状況 …… 30
写真12　SD02出土縄紋土器 …… 31
写真13　SD04土器出土状況 …… 31
写真14　SD05土器出土状況 …… 33
写真15　SD04・05出土土器 …… 34
写真16　SX01A出土壺形土器（1） …… 36
写真17　SX01A出土壺形土器（2・3） …… 38
写真18　SX01A遺物出土状況 …… 41
写真19　SX01出土壺・高杯・台付鉢形土器（11～16） … 42
写真20　SX01全景 …… 44
写真21　SX02出土土器 …… 44
写真22　SX03出土土器（3） …… 45
写真23　土錘 …… 48
写真24　土製円板 …… 49
写真25　石鏃 …… 51
写真26　石錐 …… 51
写真27　楔形石器 …… 52
写真28　刃器 …… 53
写真29　石庖丁 …… 55
写真30　石庖丁未製品 …… 55
写真31　礫石器（1） …… 57
写真32　礫石器（2） …… 57
写真33　礫石器（3） …… 57
写真34　礫石器（4） …… 58
写真35　礫石器（5） …… 58
写真36　礫石器（7） …… 58
写真37　礫石器（8） …… 58
写真38　砥石（2） …… 61
写真39　石錘（1・2） …… 61
写真40　自然遺物 …… 72

拓本目次

拓本1　包含層出土土器 …… 10
拓本2　SK09出土土器（凹線紋） …… 17
拓本3　SK01出土簾状紋 …… 18
拓本4　SK02出土土器紋様 …… 21

表目次

表1　周辺の弥生遺跡 …… 6
表2　周辺の青銅器出土地 …… 7
表3　遺構出土の礫種 …… 66
表4　植物遺体の種・部位別数量表 …… 71
表5　ドリグリ類計測値一覧表 …… 71
表6　ドングリ類の分類 …… 71
表7　土製円板計測値 …… 80
表8　土製円板法量表 …… 80

第Ⅰ章　調査の経過

第１次調査

当遺跡は，昭和53年度神戸市営高速鉄道（地下鉄）建設に伴い，最初の発掘調査を実施した（第１次調査）[注1]。この調査では，弥生時代前期末から中期初頭にかけての貯蔵穴30基，中期中葉の竪穴住居址，中期後葉の小口穴を有する木棺墓などが出土し，神戸市街地において初めて弥生時代集落を具体的に把握することができた。また，市街化された地域でも遺構の残存は良好であることが判明し，後の市街地での調査を積極的に押し進める契機ともなった。

第２次調査

その後小規模な立会などもあったが，昭和60年度には第２次調査を実施した。この調査は，ホテル建設に伴うもので，約500㎡の調査対象地区内から，第１次調査と同時期，同形態の貯蔵穴が，多くの攪乱を免れて16基検出された[注2]。

第１・２次調査の成果

両次の発掘調査で出土した土器類は，量的には少ないものの，西摂津地方の西端部での弥生土器の実態を明らかにするには十分であった。詳細は第Ⅲ章に譲るが，西接する播磨地域からの影響，畿内各地域および紀伊との交流などが明らかになり，それとともに当地域の土器の特徴なども明らかになった。

図１　第１～３次調査位置図（S＝１：5000）

第３次調査　　今回の調査は第３次にあたり，マンション建設に伴い実施したもので，第１・２次調査とは至近距離にある。当然貯蔵穴の存在が予想されたが，意外にもそれは１基のみで，中期末の方形周溝墓が出土し，当遺跡の時期による土地利用の変遷が明らかになった。

また，神戸市域ではあまり知られていない縄紋時代後期の遺構も明らかになった。

当遺跡周辺は，再開発の只中にある。今後もそれらに伴う発掘調査は続けられ，またそれにより，より詳細な集落の景観が復元されていくであろう。

註１　丸山潔，丹治康明　「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」　神戸市教育委員会　1980
註２　神戸市教育委員会　「楠・荒田町遺跡現地説明会資料」　1985
　　神戸市教育委員会　「楠・荒田町遺跡」　『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』1988

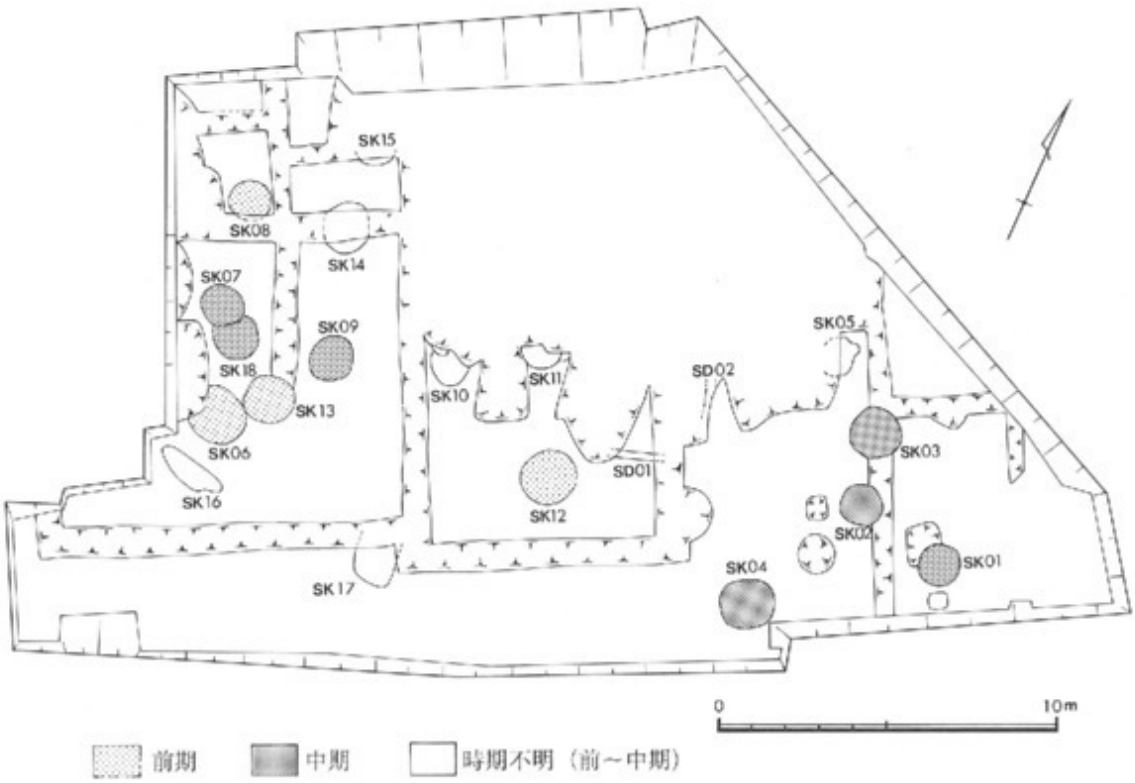


図２　第２次調査遺構平面図（註２より）

第Ⅱ章　周辺の弥生遺跡

第１次調査報告時に周辺の遺跡の詳細について触れることができなかったが，その後市街地の弥生遺跡が数多く発見され，徐々にではあるが当地域の遺跡の動向は明らかにされつつある。

地　勢

当地域は，西摂平野の西端部に当り，急峻な六甲山系の斜面から海岸線に至るまでの幅狭い沖積平野で，幾筋もの中小河川が流れている。これらの河川の流れは，時には荒れくるったであろうことが，住居址や古墳を覆う土石流・洪水砂から推測できる。しかし，その河川の周辺の低湿地を利用することによって当地域の弥生時代は開始されたのである。

前　期

武庫川流域の上ノ島遺跡と明石川流域の吉田遺跡に挟まれ，断片的に本山（井戸田遺跡も含む）遺跡などが知られているだけであったが，楠・荒田町遺跡第１次調査以後多くの前期遺跡が発見されている。

前期に開始する遺跡は，現在11ヶ所知られている。これらの大部分は前期末に属するが，北青木遺跡，本山遺跡，大開遺跡，上沢遺跡は前期前半に属し，松野遺跡もその可能性を有する。また，戎町遺跡では後半段階の遺構面下70cmで水田址が検出されており，前半段階の開始も考えられるが，土器の出土がなく断定はできない。

これらの前期遺跡は，海岸線からさほど遠くないところに立地し，現在３～５km間隔で知られている。また，各中小河川に対応するように存在しており，今後もその空間を埋めるものが発見されるであろう。

縄紋晩期

縄紋時代晩期土器との関連については，楠・荒田町，宇治川南，雲井，本山，北青木，本庄町の各遺跡で出土遺物はあるものの，直接の関連を明確にし，共伴と言い得るものはなかった。しかし，大開遺跡の竪穴住居址で，段，沈線のみで構成される前半の土器と長原併行期の土器が伴出することが明らかになり，上沢遺跡でも流路中からではあるが，前半期の土器と長原併行期の土器が同層位から出土している。

西に接する東播磨明石川流域では，今日まで縄紋時代晩期の遺物との接触は，全く知られていない。また，分村は前期のうちに，吉田・片山遺跡から一元的に進み，下流から上流へと可耕地の大部分を開発している。

これに対し，六甲山南麓では，北青木→本山，本庄町，森北町→保久良神社，金鳥山，森奥（本山東山）の各遺跡のようにたどることのできる地域や，大開，上沢→三川口，楠・荒田町→河原，熊野→祇園神社裏山の各遺跡のようにたどれる地域がある。したがって，明石川流域とは異なり，

中小河川毎にその広がりが認められるといえよう。今後前期後半の遺跡が存在する地域（流域）のより海岸部で前期前半の遺跡が発見される可能性が高い。

土　器　前期の土器の中で特徴的なのは，生駒西麓の胎土をもつ壺・鉢や紀伊の胎土をもつ甕の搬入が見られることである。また，播磨型甕の範疇に入れられる逆Ｌ字形口縁部を有する甕（瀬戸内型甕）の比率が，東するにしたがい減少し，地理的状況が遺物に反映されているといえよう。なお，生駒西麓の胎土をもつ土器は，前期前半段階から北青木・大開の各遺跡で確認されており，縄紋時代晩期末の土器とともに搬入されている。

前期に開始する遺跡で継続的に営まれていたのは，戎町，楠・荒田町，雲井，本山の各遺跡で，母集落と考えられる。北青木，大開遺跡は，吉山や上ノ島遺跡同様，一時期で廃絶しているようである。

中　期　第Ⅱ様式に開始する集落は住吉宮町遺跡のみであるが，第Ⅲ，Ⅳ様式になると多くの新集落が誕生する。これらは前期の集落よりもはるかに標高を上げ，伯母野山，保久良神社，金鳥山，坂下山等の遺跡のように高地性集落に属するものが大部分を占める。低地での新集落はわずかである。

高地性集落　高地性集落の大部分は，第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式の遺物を出土するが，それぞれの時期の一時期のみ存在したのか，継続して営まれたのか不明である。

高地性集落が第Ⅴ様式にまで存続する一方，母集落と考えられる遺跡では，その時期の遺物を急速に減じている。また一方，郡家遺跡に代表されるように，後期に初出する大集落もある。

高地性集落の廃絶と低地の集落の開始は，相互に関連する可能性は充分考えられるが，土器の検討をなし得ていない現在，それについては断定できない。

東播磨明石川流域においては，前期末～中期初頭の遺物を出土する高地性集落も見られるが，大部分は第Ⅳ様式に開始し，第Ⅳ様式のうちに廃絶する。この時期，西摂地域とは異なった変遷をたどっているようである。

土　器　中期の出土土器の特徴は，紀伊の胎土をもつ甕の搬入は第Ⅱ様式を持って終わるようで，生駒西麓の胎土をもつ壺・鉢は引き続き搬入されているようである。また，中期前半には播磨色の濃かった六甲山南麓の西域は，後半になると摂津色を強めている。東播磨明石川流域では，第Ⅳ様式の高地性集落出土土器に摂津的色彩が出現し，石器石材であるサヌカイトの分析結果からも同様の状況が認められる。この時期，畿内摂津勢力の西進があったと考えられる。

後　期

後期になると，前期以来継続してきた集落が衰退し，郡家，長田神社境内両遺跡のように，出土遺物から見ると，新出の集落が大集落といえそうである。新出の集落は後期初頭にはないが，その後に成立している。これらの集落は，庄内式併行期までは間断なく存在するようである。郡家，長田神社境内の両遺跡は，当地域の東西の遺跡密集地の代表的位置を占めており，後の前期古墳築造に深く関わる集落の母体になったと考えられる。すなわち長田神社境内遺跡の周辺には，得能山古墳，会下山二本松古墳・夢野丸山古墳，郡家遺跡周辺には西求女塚古墳，処女塚古墳，福保曽塚古墳など古式古墳といわれるものが分布する。ただ，これらの古墳と併行する時期の集落は未だ明確ではない。

青銅器

当地域の東部は，先の高地性集落と桜ヶ丘・渦ヶ森・生駒・森・保久良神社など青銅製祭器出土地の集中する地域として著名である。このことについては，多くの研究者の様々な論稿が見られる。そして，それらの論議の中心は，桜ヶ丘銅鐸・銅戈にあるが，近年桜ヶ丘以西で銅鐸の出土した可能性の高いことが注意されている。これは伝大月山出土鐸といわれるもので，大月山とは伯母野山周辺に存在するようである。

先に中期のところで述べたように，最も高地性集落が頻発する第Ⅳ様式期に，土器・石器石材から摂津勢力の西進が認められる。明石川流域の高地性集落からの出土遺物が摂津的であるのは，第Ⅳ様式期に摂津勢力の支配下に置かれていたと考えられ，後期に高地性集落は継続しない。

今，明石川流域で銅鐸は知られていない。明石川流域の銅鐸は，畿内摂津勢力によって奪い去られたと考えられる。そして今見られるように，西摂津に集中的に埋納されたと考えられる。

明石川流域の東，山田川流域に投ヶ上銅鐸が存在する。この流域には舞子東石ヶ谷遺跡など後期にまで継続する高地性集落が存在する。この高地性集落は，畿内摂津勢力の最西端の砦的位置を占め，銅鐸を保持し続けていたのであろう。

小林行雄氏は，桜ヶ丘銅鐸出土地から投ヶ上銅鐸出土地までの間の集落に保持されていた銅鐸が，桜ヶ丘に集中的に埋納されたと考えられたが，畿内摂津勢によって席捲された明石川流域までの集落の銅鐸が含まれていると考えられる。

表1　周辺の弥生遺跡

	遺跡名	所在地	時期							備考
			晩	I	II	III	IV	V	庄	
1	鉢伏山	須磨区西須磨					—	—		
2	戎町	須磨区戎町	—	—	—	—	—	—		前期水田址
3	松野	長田区松野通		—				—		
4	神楽	長田区神楽町						—		
5	長田南	長田区三・四・五番町	—					—		
6	長田神社境内	長田区長田町	—					—		
7	会下山	兵庫区会下山町					—			
8	東山	兵庫区東山町				—				
9	河原	兵庫区熊野町					—			
10	熊野	兵庫区熊野町								土器中に貝輪
11	上沢	兵庫区上沢通	—	—						
12	二川口	兵庫区二川口町		—	—	—				
13	大開	兵庫区大開通	—							環壕集落
14	楠・荒田町	兵庫区荒田町他	—	—	—		—		—	貯蔵穴群
15	宇治川南	中央区楠町	—				—			
16	布引丸山	中央区葺合町布引山					—			
17	雲井	中央区雲井通		—		—				方形周溝墓群
18	伯母野山	灘区篠原伯母野山				—	—	—		磨製石剣
19	篠原	灘区篠原北町・中町	—				—	—	—	
20	桜ケ丘B地点	灘区桜ケ丘町							—	
21	赤塚山	東灘区住吉山手				—				
22	荒神山	東灘区住吉台					—	—		
23	郡家	東灘区御影町						—	—	

24	処女塚	東灘区御影塚町								
25	住吉宮町	東灘区住吉宮町			—	—		—		
26	東求女塚	東灘区住吉宮町					—	—	—	
27	本山	東灘区田中町・本山中町	—	—	—	—	—	—	—	井戸山・出口を含む
28	北青木	東灘区北青木								
29	森北町	東灘区森北町				—	—	—	—	
30	深江北	東灘区深江北町							—	円形周溝墓群
31	本庄町	東灘区本庄町	—	—						前期水田址
32	金鳥山	東灘区本山町北畑				—	—	—		
33	保久良神社	東灘区本山町北畑						—		銅戈
34	神戸女子薬大	東灘区本山北町						—		
35	森奥（東山）	東灘区本山北町						—		
36	坂下山	東灘区森北町				—				

表2　周辺の青銅器出土地

	遺跡名	所在地	種類				立地
			銅鐸	銅剣	銅戈	銅鏡	
A	伝大月山		外1				
B	桜ケ丘	灘区高羽	外1 外2 扁		湾b		山腹　246m
C	渦ケ森	東灘区渦森台	扁				山腹　240m
D	生駒	東灘区本山北町	扁				山腹　110m
E	森	東灘区森北町	外2				山腹　50m
F	保久良神社	東灘区本山町北畑			湾c		尾根上　180m
G	森北町	東灘区森北町				内花	集落包含層

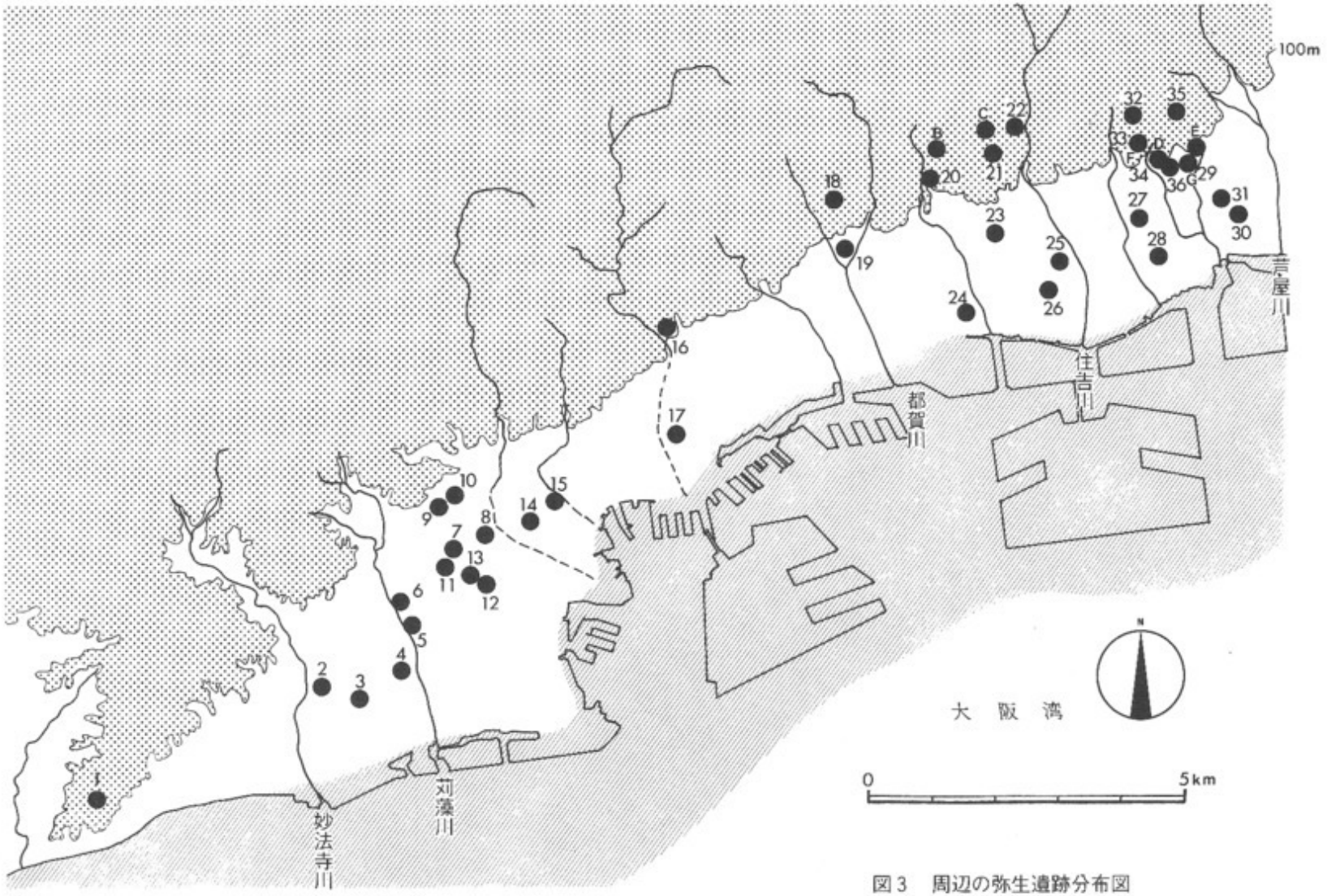


図3　周辺の弥生遺跡分布図

第Ⅲ章　遺構と遺物

Ⅰ概　要

調査地区内には木造家屋が建築されていたが，盛土が１～1.5mと厚く，それらによる遺構面の攪乱は全くといってよいほど無かった。ただ，近世以降に造成されたと考えられる水田により，わずかではあるが遺構面が削平された部分が存在した。全般的には，遺物包含層も保存され，平均20cm厚い部分では40cm程度存在した。

遺物包含層は２層に分層でき，上層は弥生土器，古墳時代の土師器・須恵器，平安～鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・磁器などを含んでいた。下層は，弥生土器のみを包含していた。包含層上層に伴う遺構は全く確認できず，古墳時代以降の遺物は調査区北方からの流れ堆積と考えられる。第１次調査区内では，古墳・平安・鎌倉時代の遺構を確認している。

包含層下層に伴う遺構は，調査区内に密に分布していた。方形周溝墓２基，墓坑１基，貯蔵穴１基，土坑10基，溝１条，ピット50余個などである。

今日までの発掘調査で主体を占めた遺構は，弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴であったが，今回の調査地区内では１基のみの出土であった。また，縄紋時代後期の土坑（貯蔵穴か）が１基出土し，注目される。

Ⅱ包含層出土土器（図５）

包含層は，上下２層に分けられるが，上層は遺物量が少なく，弥生土器の他に６世紀代の須恵器片，12～13世紀の瓦器・須恵器片が含まれるが，いずれも小片で，図化し得るものはない。

下層の遺物量は多いが，その大部分は小片で，図化し得たものはわずかである。

壺形土器

（１）は，口縁部端面に微細な動きの櫛描波状紋を，下端には大きな刻み目を施す壺形土器である。その施紋，胎土から第Ⅱ様式と考えられる。

（２）は，口縁部の上下を拡張し，その部分に綾杉状に刻み目を施す。第Ⅲ様式（古）に属するものであろう。

（３）は，上下に拡張した口縁部端面に２条の凹線紋を施し，その上に棒状浮紋を貼付する。第Ⅲ～Ⅳ様式に属するものであろう。

（４）は，口縁部内面がその端面より高く，刻み目を有する断面三角形突帯を２条貼付する。口縁部端面には，篦描の縦線を施し，頸部には断面三角形突帯を３条以上巡らす。搬入品かどうかは不明であるが，播磨地方特有の壺型土器の形態を示す。第Ⅲ様式（古）に属するものであろう。

（５）は，頸部および体部最大径部分に篦描沈線紋を施す壺型土器で外面は細かい刷毛目調整を密に施し，内面上半は，指圧痕が絞り目様に明瞭

に残る。第Ⅰ様式後半に属するものであろう。

（6）は，頸部に2条の断面三角形突帯を巡らし，その下に縦方向の短い断面三角形突帯を貼付し，その間に爪先で施したと考えられる刻み目（圧痕）を有する長い突帯を貼付する。長い突帯の両側には，突帯貼付後に施された斜格子紋が存在する。第Ⅲ様式（古）に属するものであろう。

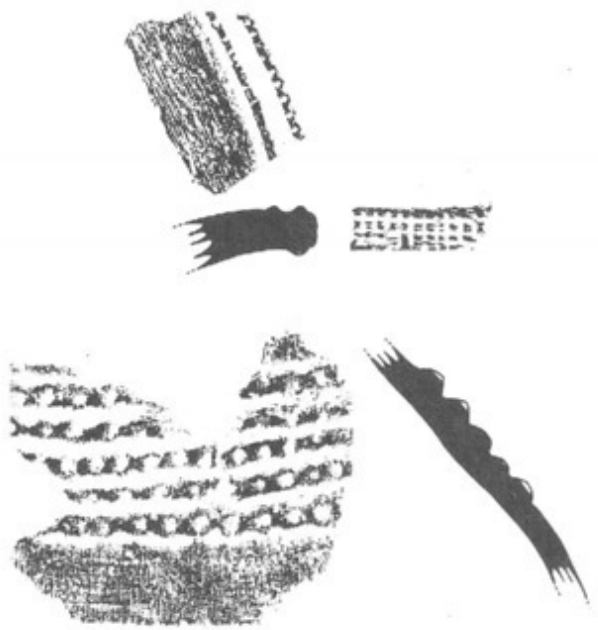
以上の他に，壺型土器の中で特徴的なものを挙げると，第Ⅰ様式のものとして，体部に刻み目（圧痕）を有する貼付突帯を巡らすもの（写真1上）や，口縁部端面に3条の篦描沈線紋を巡らし，その上に篦描の縦線を入れ格子状にし，口縁部内外面に刻み目を施した細い突帯を貼り付けるもの（写真1下）などがある。

甕形土器　出土土器中，甕形土器と認定できるものは少なく，また，図化し得るものはなかった。第Ⅰ様式～第Ⅱ様式のものとして，如意形の口縁部で，頸部以下に篦描沈線紋を施すもの1点，逆L字形の口縁部を有するもの2点が確認できるのみである。

その他　壺・甕形土器の他に器種を確定できる土器片は少ない。紋様には篦描紋，櫛描紋，断面三角形の突帯，指頭圧痕紋突帯などがみられる。また，竹管様の工具をひきずりながら連続して刺突を施すものもある。

搬入品　生駒西麓産の胎土のものは13点，紀伊産の胎土のものは42点出土している。紀伊産は，甕形土器であろう。

写真1　包含層出土土器



拓本1　包含層出土土器

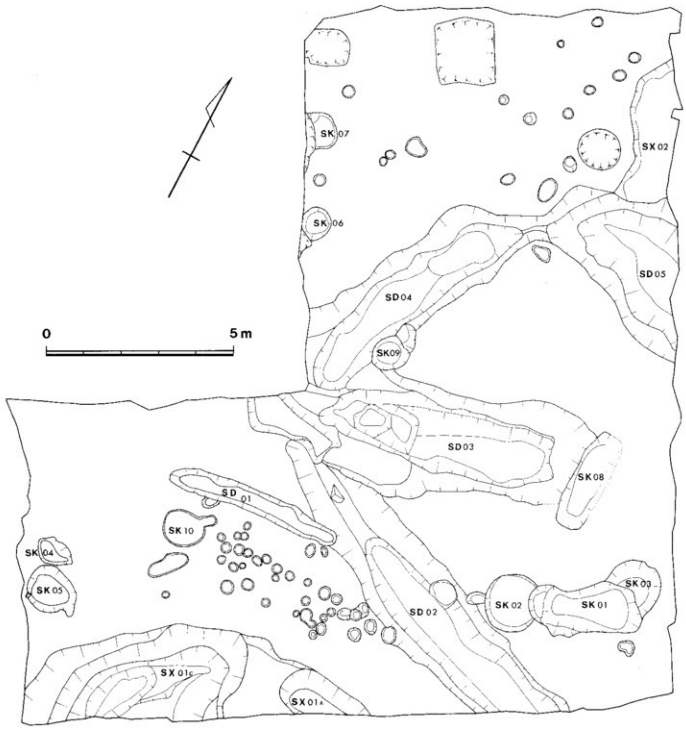


図4　出土遺構配置平面図

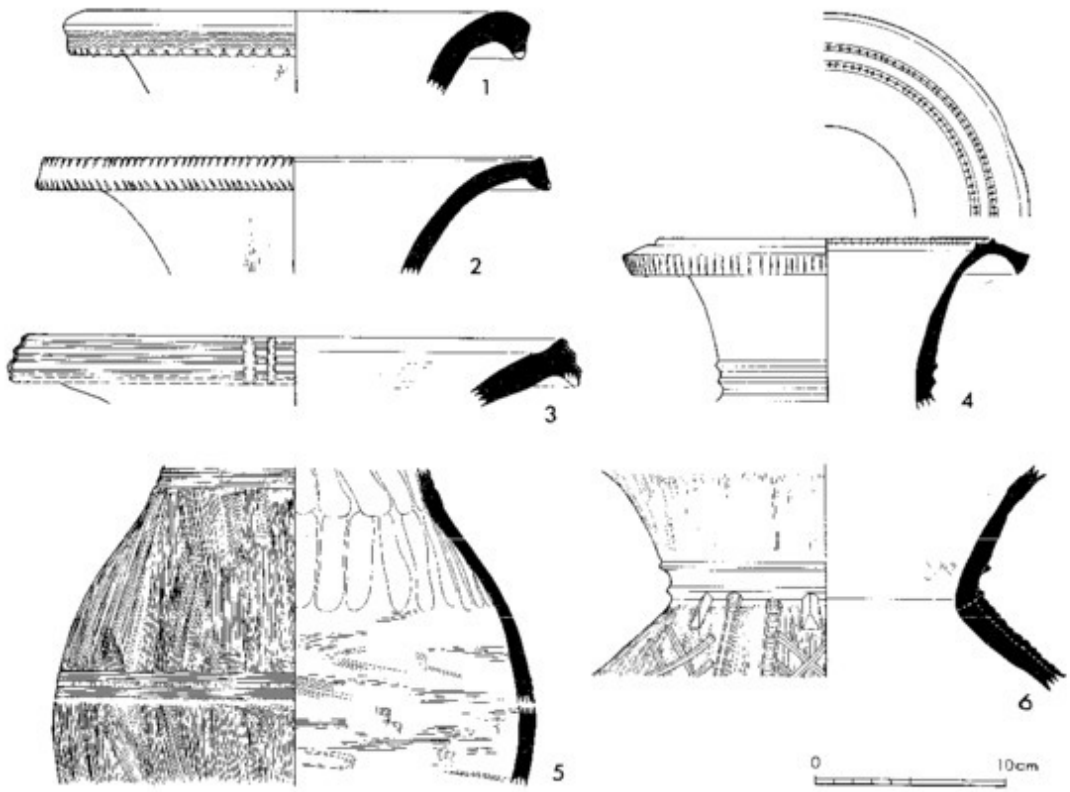


図5　包含層出土土器

Ⅲ縄紋時代　SK 09

円形プランの土坑で，SD 04に約半分を切られている。径0.8～0.9m，深さ0.5m，壁面はほぼ垂直で，断面は円筒形である。底面はほぼ水平で，中央には花崗岩が密着し，その上に土器，ドングリ類と考えられる木の実の皮やより小さな実がのって出土した。

土器は，注口土器になるであろうものと小型および一般的な深鉢が出土している（図7）。

注口土器

（1・2）は，接合できる部分がなく別図としたが，胎土や調整からみて同一個体と考えられる。口縁部は波状をなし，その直下から2～4条で一帯とする凹線紋を巡らす。凹線紋帯上には，貝殻による扇状圧痕を配している。注口部は，先端を欠損しているが，基部および中程の下面に凹線を配している。これは，おそらく体部の凹線と見かけで連続したものと考えられる。注口部の中空部分は，指が抜けたような形態であることから，その成形は，指に粘土を巻きつけ，外形を造り，指を抜くことによってなされたと考えられる。

深　鉢

（3）は，口径32.2cmで深鉢と考えられる。内外面とも磨き調整が施されているが原体は不明である。

（4）は，口径19.0cm，器高12.1cmの小型の深鉢である。底部は凹状で外面周囲には指圧痕を残す。

いずれの土器も内・外面の調整は，丁寧な磨きであるが，その原体が篦状のものか貝殻によるものか不明である。

これらの土器は，縄紋時代後期宮滝式に属するものであろう。

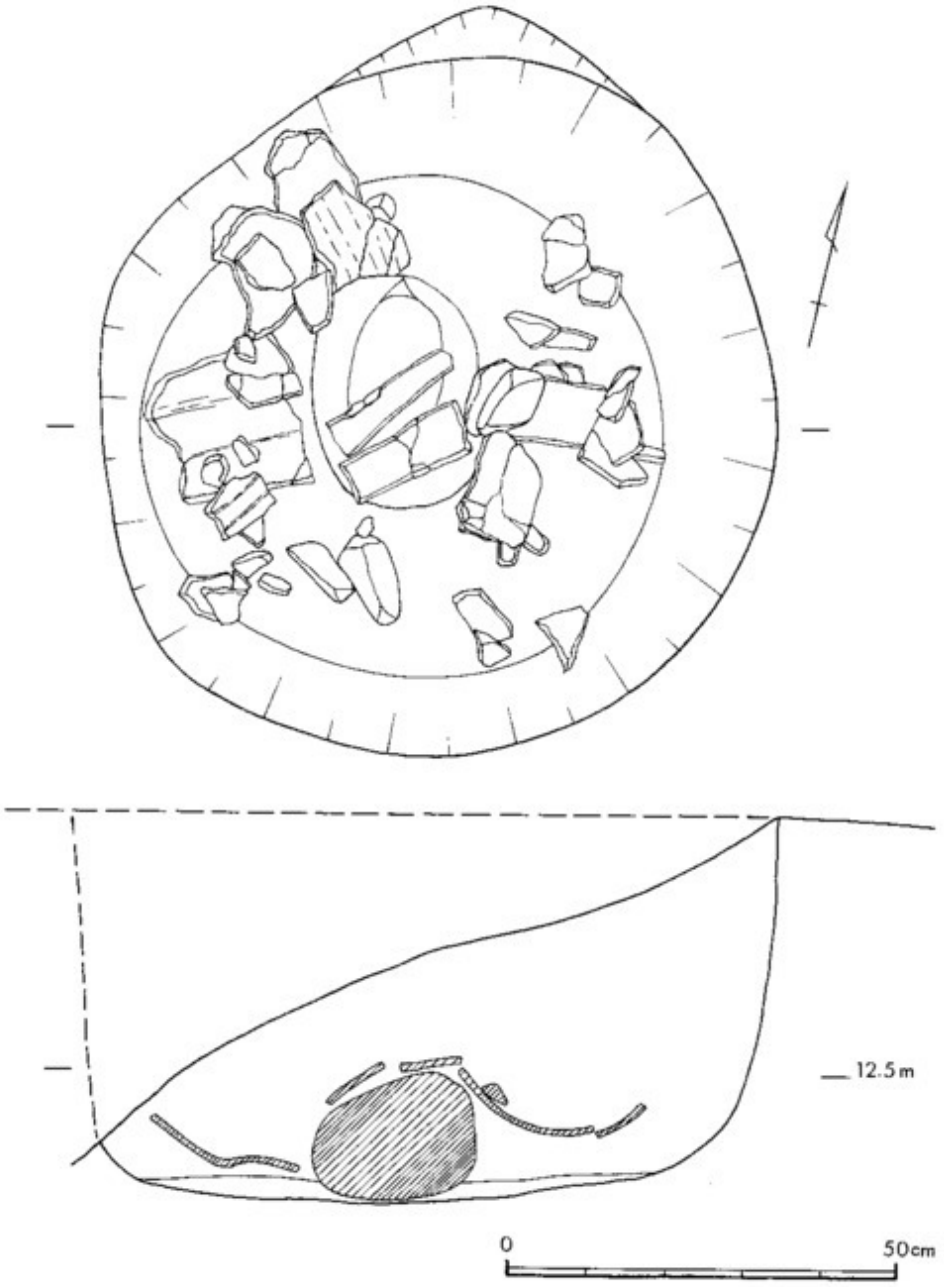


図6　SK09平面・断面図

写真２　SK09遺物出土状況及び出土土器（１～４）

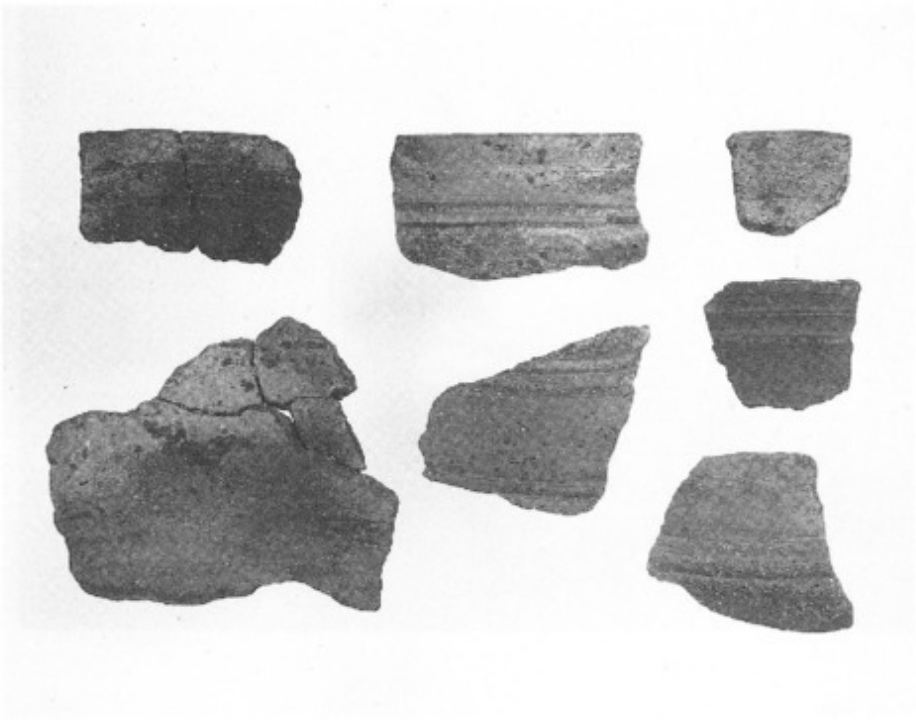


写真３　SK09出土土器（凹線紋）

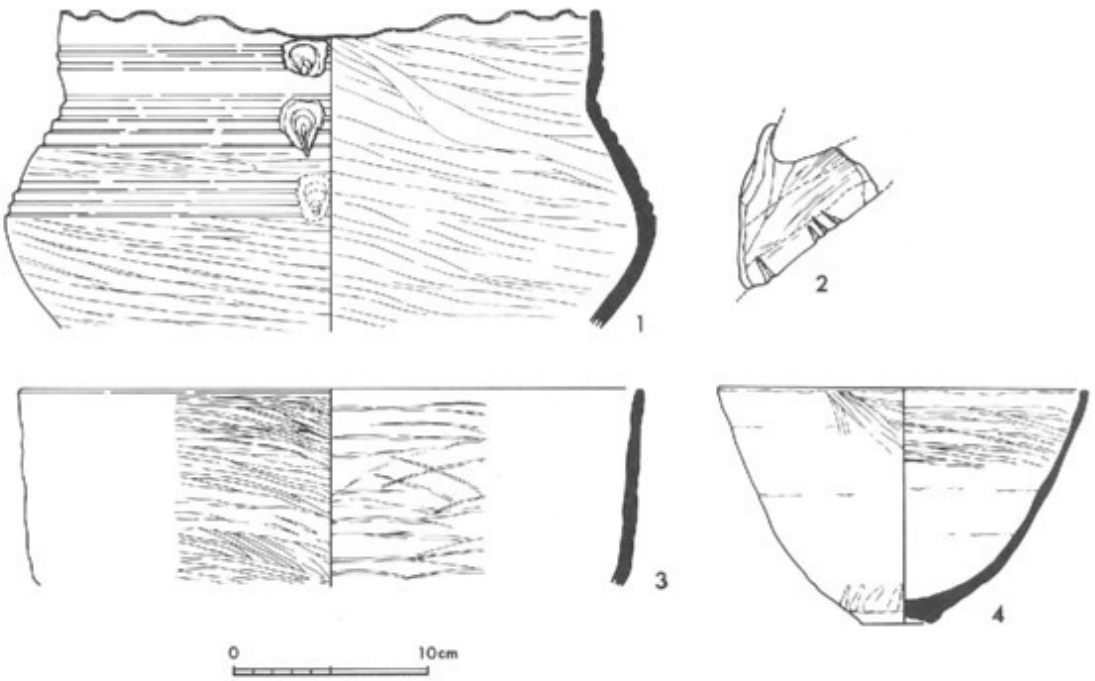
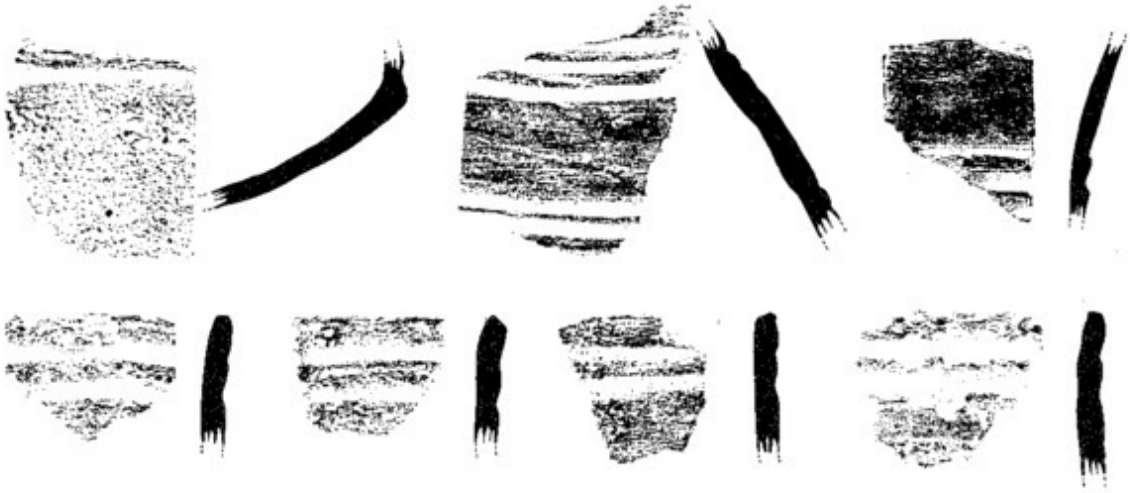


図７　SK09出土土器（１～４）



拓本２　SK09出土土器（凹線紋）

Ⅳ弥生時代　　長方形プランの土坑で，長さ3.1m，幅１～1.3m，深さ0.4mである。

SK 01　　埋土下層には土器片や炭化材，焼土が多く含まれており，墓壙である可能性は土層断面の観察からも考えられない。

甕形土器　　出土土器片は，ほとんどが小片で図化し得たのは２点のみである（図８）。（１）は口径14.6cmの甕形土器で，外面は縦方向の刷毛目調整，内面は明瞭に指なで痕跡を残している。体部外面には煤が付着している。

（２）は甕形土器底部で，底面は凹状である。穿孔は，焼成後に外面から内面に向って錐状の工具でなされたらしく，その径は，外面で13㎜，内面で６㎜である。

紋　様　　以上の他に壺・鉢・甕形土器片が出土している。体部の紋様は，箆描沈線紋が９点，櫛描紋が25点，貼付突帯紋が１点存在する。櫛描紋には，直線・波状紋の他に扇形紋，簾状紋（拓本３）がそれぞれ１点ずつある。壺形土器の口縁部では，残存状態が悪く図示できないが，口縁部内面に貼付突帯（布巻棒圧痕か），端面に刻み目のある３条の貼付突帯，そして裏面にも刻み目のある太い貼付突帯を配すものがあり，胎土から在地産ではないと考えられる。櫛描紋で飾られる口縁部は，内面に扇形紋，端面に波状紋を配し，端面上部には刻み目を施す。これもまた残存状態が悪く図示できない。

当土坑の時期は，第Ⅰ・Ⅱ様式の特徴を有する土器が上・中・下層とも混在する。なお，紀伊型甕の破片が20点出土している。

SK 02　　今回の調査区内で出土した唯一の貯蔵穴で，口径1.5～1.6m，深さ0.7m，底径1.4mである。壁面は，ほぼ垂直な部分が多く，断面は円筒形

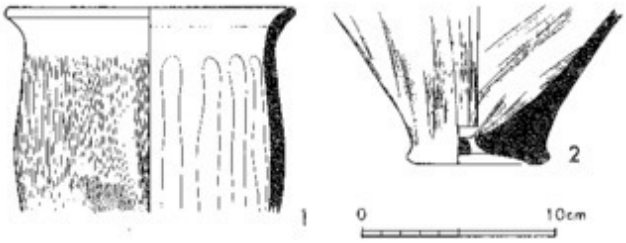


図8　SK01出土土器（1・2）

拓本3
SK01出土簾状紋

である。埋土の下半は，土器片とともに炭・焼土塊が多量に含まれていた。最下層には，周辺の地山の土がブロックで含まれており，貯蔵穴としての機能が失なわれた後，一定期間放置され，その後短期間に下半部が埋められたと考えられる。

壺形土器　出土土器は多いが，ほとんどが細片で全形を知り得るものは無い（図10）。（1）の壺形土器は，口縁部端面に1条の篦描沈線紋を巡らし，その上から刻み目を施す，また，頸部以下に7条以上の篦描沈線紋を巡らす。（2）は，壺形土器の頸部から体部にかけての破片で2，4，5条で一帯とする篦描沈線紋を巡らす。（3）は，無紋の広口壺形土器であるが，残存状態が悪く調整は不明である。

以上の他に，壺形土器の破片と考えられるものに，太細併用の篦描沈線紋や貼付突帯紋，円形浮紋，列点紋で飾るものがある。太細併用紋（写真6，拓本4－1）は，太い沈線が幅4㎜とかなり広く，数条で一帯とし，それに接して細い沈線を数条で一帯としている，なお，太い沈線の断面形は半円形で，竹管様の工具で施紋しているようだ。

貼付突帯紋には，無紋のもの，一般的に見られる篦状の工具で刻み目を施すもの，指頭で圧痕を施すもの（写真6，拓本4－2）がある。

円形浮紋（写真6，拓本4－3）は，篦描沈線紋とセットで使用され，比較的直径の小さなものを連続して配置する。

列点紋（写真6，拓本4－4）は，篦描沈線紋帯間に施されている。

甕形土器　（4～6）は，如意形の口縁部を有する。口縁部の外反は，いずれも短く，端部に刻目を施すもの（4・6），無紋のもの（5），頸部以下に10条の篦描沈線紋を巡すもの（6），無紋のものなど様々である。体部外面は，縦方向の刷毛目調整，内面は撫でないしは刷毛目の後に撫で調整を施している。

（7）は，逆L字形の口縁部を有する。無紋であるが，拓本4－5に示すものは，口縁端部に刻目，頸部以下に8条以上の篦描沈線紋を施す。また，口縁部上面に2孔一対の穿孔を有するものがあり，紐孔と推定される。

なお，紀伊型甕の破片は，１点のみで，SK 01と対照的である。

その他　以上の他に，瘤状把手付の鉢形土器がみられる。

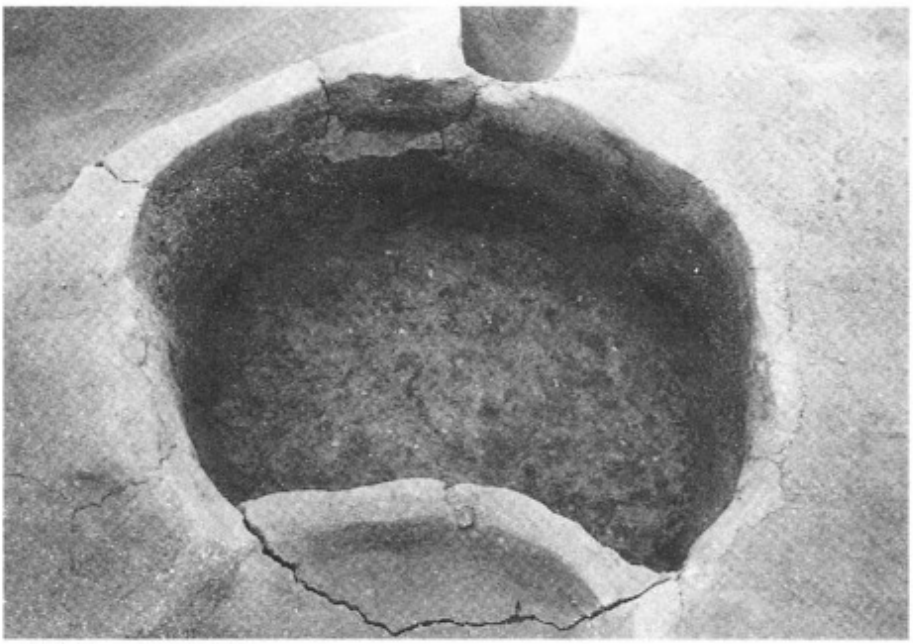


写真４　SK 02平面

写真５　SK 02断面

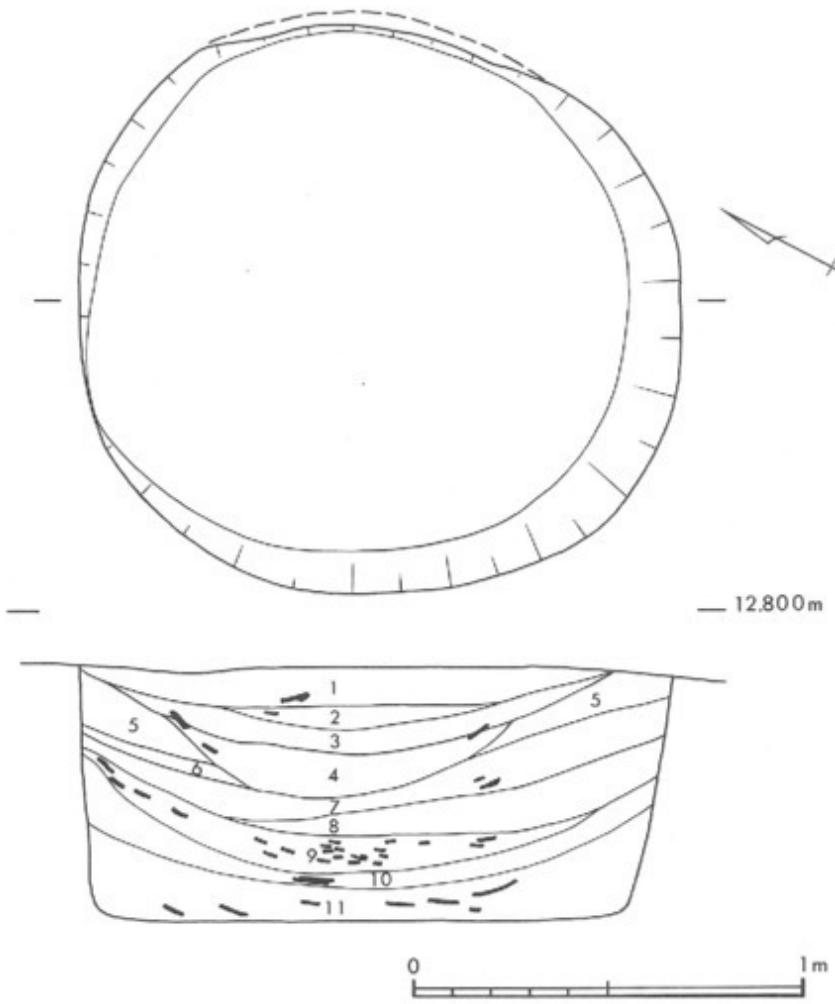


図9　SK02平面・断面図

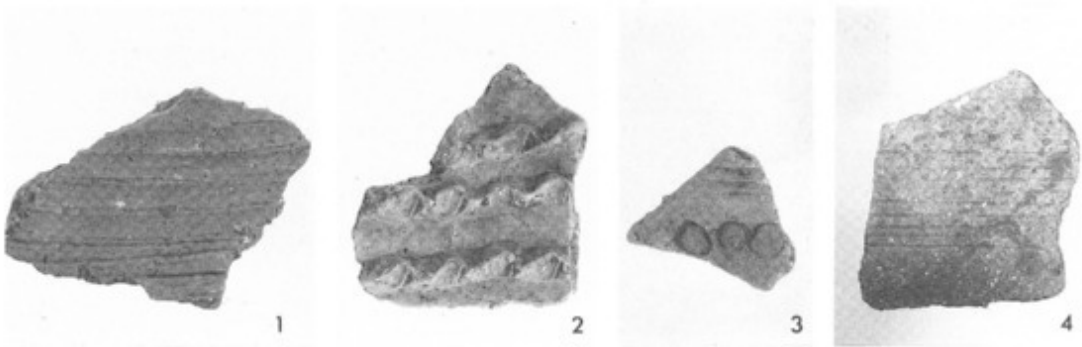


写真6　SK02出土土器紋様

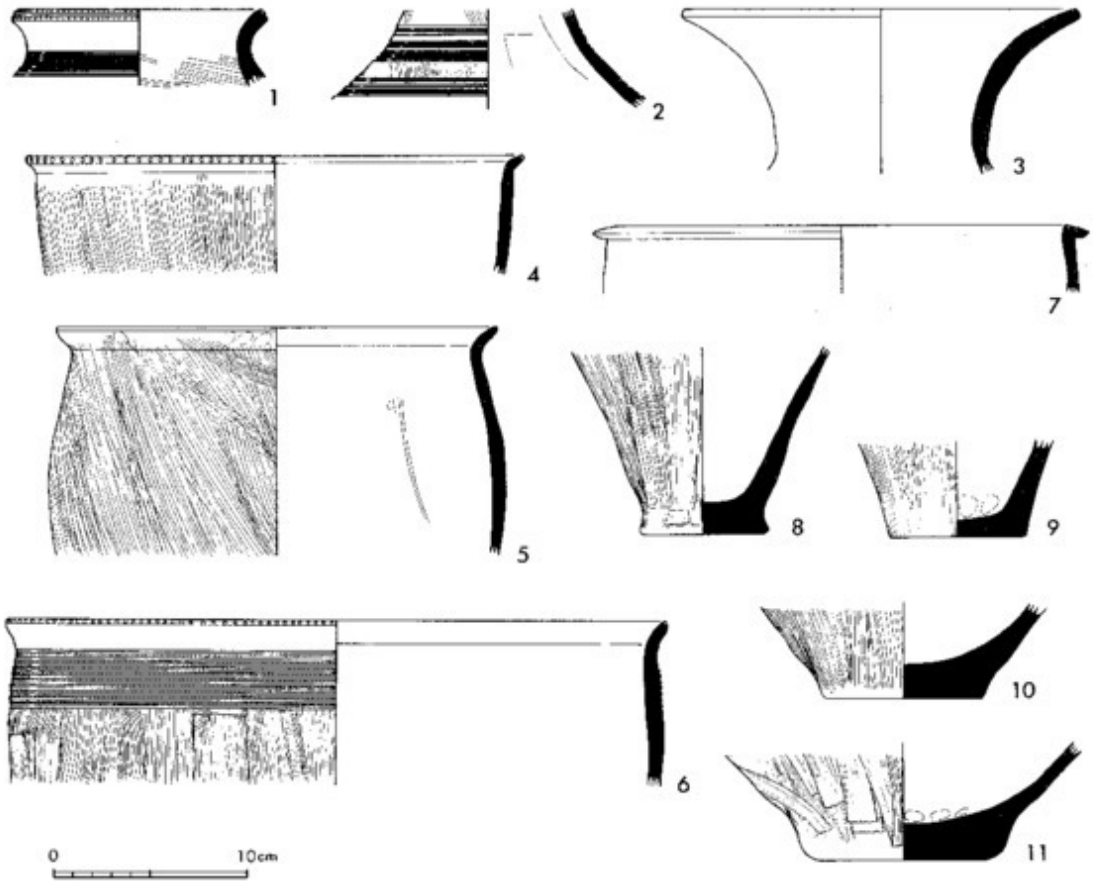


図10　SK02出土土器（1～11）

拓本4　SK02出土土器紋様

SK03　　円形プランをなしていたと推定されるが，SK01に切られ，約半分を失なっている。推定径1.4m，深さ0.2mで，壁面は緩い傾斜を有する。

出土遺物は，土器が少量で，櫛描紋を施した壺形土器体部片が存在する。

胎土および施紋状態から第Ⅱ様式と推定される。なお，紀伊型甕の破片は3点出土している。

SK 04　不定形の土坑で，長径0.85m，短径0.65mである。深さは，約0.4mであるが，壁面は中位で段状をなす。埋土中の遺物の包含は，多量な層位と僅少な層位に明確に分かれる。

出土遺物は，篦描沈線紋を施すものが出土しており，第Ⅰ様式末葉と推定される。

SK 05　楕円形に近い平面形を呈するが，不定形で，長径1.4m，短径1.25mである。深さは，約0.4mで，断面形は擂鉢状である。埋土中の遺物は，SK 04と同様，多量に含む層位と僅少な層位が明確に分かれる。

出土土器は，(図11) の壺用蓋形土器が図示できるのみである。これは，摘み部分が二つの扁平な突起からなり，その周囲に同心円状に櫛描紋を三帯巡らす。紐孔として確認できるのは1孔のみであるが，2孔一対，2ヶ所に穿孔されていたと推定できる。第Ⅱ様式に属するものであろう。

この他に，篦描沈線紋を施す壺あるいは甕形土器片が4点，口縁部端面に刻み目を施す甕形土器片が1点，瘤状把手を有する鉢形土器片が2点出土している。

生駒西麓産の胎土の壺形土器片と推定されるもの2点，紀伊型甕の破片10点も出土している。

図11　SK 05出土土器

SK 06　直径0.8m前後の平面形円形の土坑であるが，一部攪乱により切られている。深さは，0.9mと深いが，埋土等から貯蔵穴とは考えられない。

出土遺物は少なく，時期の判明するものとして，篦描沈線紋を施す壺あるいは甕形土器片が4点出土している。第Ⅰ様式末葉に属するものであろう。

SK 07　隅丸の方形あるいは長方形の平面形を有した土坑と考えられるが，攪乱によって切られていることと，調査地区外にのびることから，全形は不明である。確認し得る一辺の長さは約1.0mで，深さは30cm前後である。

出土遺物は少なく，時期判定し得るものの出土もない。

SK 08　長方形プランの土坑で，SD 03の一部を切り込み構築されている。しかし，調査時にSD 03の一部と考え，検出したことから，部分的にその壁面を破壊した。短辺は0.7～0.8m，長辺は2.8mで，深さは0.5m前後である。

埋土中には，遺構構築基盤層である花崗岩の雲爛土がブロックで多量に入っていた。このことは，この土坑が掘削後時間を経ずして人為的に埋め

戻されたことを表わすものであろう。

この土坑は，後述する方形周溝墓（SD02・04・05）の埋葬施設と考えられ，主軸に平行ではないが，残した断面観察用セクション・ベルトでは，木棺の存在を推定し得る層位が存在する。

出土遺物は，ごくわずかで，時期の判明するものは，第Ⅲあるいは第Ⅳ様式に属すると推定される。

SK10　径1.0m前後，深さ0.2m前後の浅い土坑で，出土遺物は少ない。

篦描沈線紋を施す壺あるいは甕形土器片が7点，貼付突帯紋が1点出土しているが，櫛描直線紋と考えられるものも1点存在する。また，生駒西麓産の土器片3点，紀伊型甕の破片1点も出土している。

SD01　幅0.3m，長さ2.2m以上，深さ0.2m前後の溝状遺構で，一部SD02によって切られている。埋土は，他の大部分の遺構が粘性を帯びた土壌であるのに比し，当遺構のそれは，砂粒を多量に含んだもので，埋没過程が異なるようである。

出土遺物は，篦描沈線紋7点，櫛描直線紋1点，如意形口縁部の甕形土器3点，逆L字形口縁部の甕形土器1点，生駒西麓産の土器片1点，紀伊産土器片1点などである。

SD03　SD02・04と連続しているかのように見える溝状の遺構である。プラン検出の段階では，それらとの切り合い関係については明確ではなかったが，遺構検出段階で，SD02・04に切られ，また，SK08にも切られていることが明らかになった。最大幅2.6m，長さ9.5mで，壁面は二段に落ち，検出面から底面までの深さ約0.7m，西端の最も深い部分では0.9mを測る。

埋土は，最下層では周囲の地山の崩壊したものをブロックで多く含むが，それ以上，中程までは粘土であり徐々に埋没したと考えられる。中位以上は，周辺の花崗岩・風化土が多量に流入した状況で，遺物も少なく，下位の層位とは対照的である。

出土遺物は，調査区内の遺構ではSK02，SX01に次ぐ多さであるが，完形品に復元し得るものはなく，小片が大部分を占める（図12）。ただ，底部の数は著しく多い。

壺形土器　（1）は，口縁部の開きの少ない壺形土器で，口縁部下端に刻み目を施す。外面は細かい刷毛目調整を施すが，内面は不明である。

（2）は，大型の広口壺で，口縁部内面に指頭圧痕紋突帯を2条巡らし，口縁端部に開口させる。また，この突帯をはさんで，内側には大きめの，外側には小さめの紐孔を2孔一対であけている。口縁部端面には，拡張はあまり認められないが，篦描による斜格子紋が施されている。

胎土の色調は，乳白色で当遺跡では見受けられないもので，施紋も当地域のものではなく，播磨的である。搬入品である可能性が高い。

（3）は，口縁部端面を下方に拡張し，径3㎜前後の竹管で列点紋を施す。内外面の調整は，器壁の剥離が著しく不明である。

（4）は，口縁部端面に拡張が見られず，無紋である。胎土中の混和材として，赤色酸化土粒が多量に含まれており，搬入品と考えられる。

（5）は，口縁部端面を下方に拡張する広口壺形土器で，頸部には櫛描直線紋を施す。

（6）は，口縁部を欠くが，（5）と同形態の壺形土器である。頸部には，3帯以上の櫛描直線紋を施す。

（7）は，「く」の字形の短い頸部に指頭圧痕紋突帯を巡らし，口縁部端面は無紋である。

（8）は，細頸の壺形土器である。外面には，縦方向の刷毛目調整が見られる。内面の調整は不明である。

（9）は，壺形土器の底部であるが，一般的に刷毛目調整が施される部分に横方向の丁寧な篦磨き調整が施されている。特殊な用途の壺形土器であった可能性もあるが，胎土や混和材に特異さはない。

紋　様　以上の他に壺形土器の紋様では，口縁部端面では無紋のものが最も多く，波状紋，刻み目紋がそれにつぎ，斜格子紋，扇形紋，直線紋が若干存在する。口縁部内面の施紋は，非常に少なく直線紋，扇形紋がわずかにあるのみである。

頸部の紋様では，直線紋，指頭圧痕紋突帯がみられるが，断面三角形突帯はみあたらない。

体部紋様では，櫛描直線紋が圧倒的で，波状紋を含むものもわずかである。流水紋，斜格子紋もわずかに存在する。

壺形土器の中で，器形からいえば直口壺形土器が全くみられないのも特殊である。

他器種　壺形土器の量に比し，他の器種はきわめて貧弱で，（10）の台付鉢形土器，（11）の甕形土器がみられる程度である。

SD02・03の境界付近の埋土上層から出土したものに蓋形土器がある。大きさおよび内面周縁の煤付着痕から甕形土器用と考えられるが，外面に櫛描の直線・波状紋を施す。

以上の土器は，第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけてのものと考えられるが，第Ⅰ様式に属するものも多数出土している。なお，紀伊産の土器片22点，生駒西麓産の土器片4点が出土しているが，所属時期は不明である。

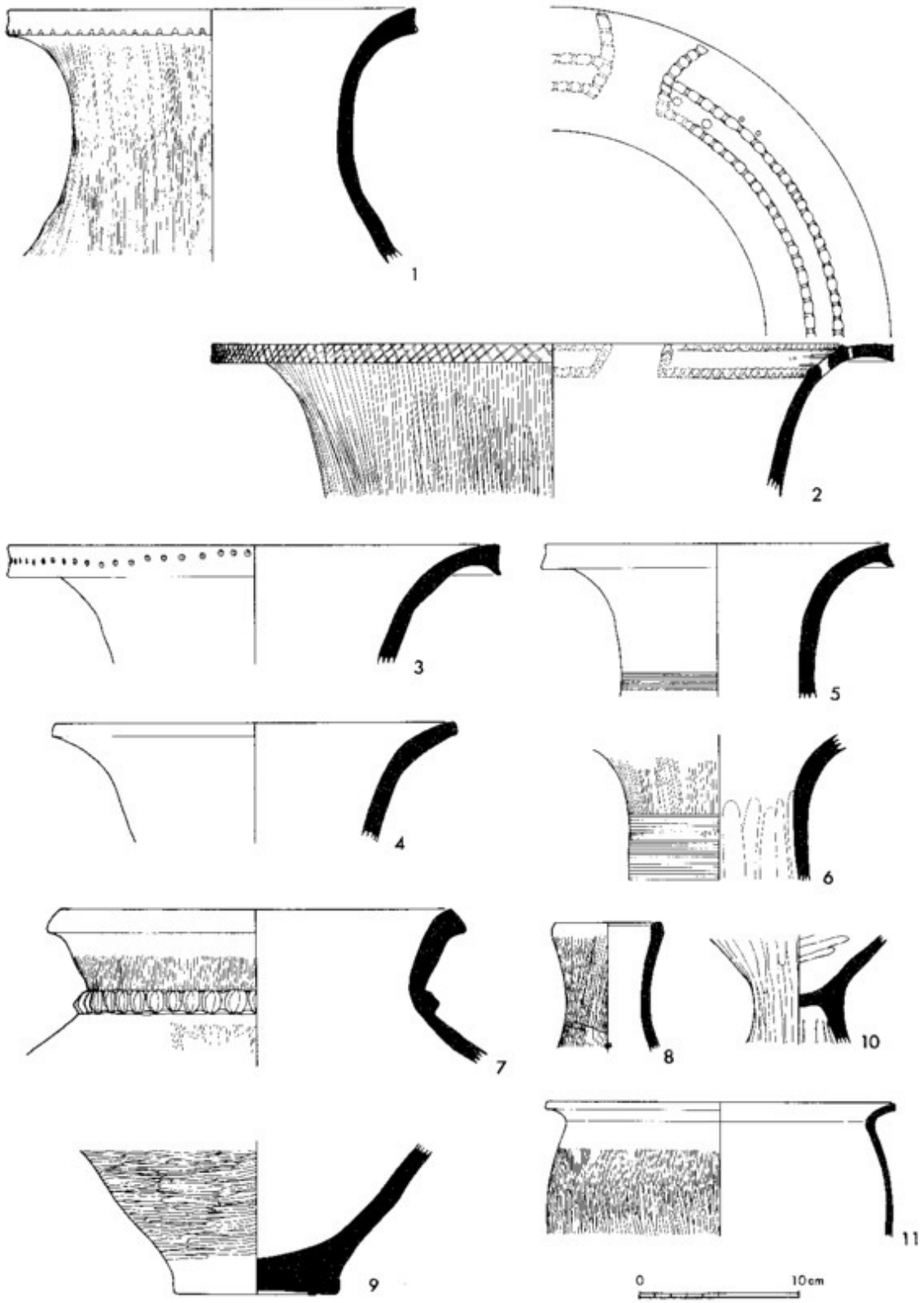


図12　SD03出土土器（1～11）

方形周溝墓

SD02・04・05からなるもので，あと一辺は調査地区外になる。いずれの溝も中央で深く，両端で浅くなる。隣り合う溝とは，細く浅くなってはいるものの連続している。それぞれの溝の最大幅は，2.0mから3.0mで，深い部分は，検出面から0.5～0.8mで，断面形は緩やかなU字形である。

溝は，周囲から徐々に埋没したようで，特に内側あるいは外側から急速に流入したような形跡は認められない。盛土については検出できなかったが，存在の否定はできず，第Ⅵ章で再述する。

また，溝内の埋土堆積状況からは，SD02・04・05いずれにおいても埋没後，再度掘削を受けたような層序が認められる。しかし，これは土層観察用セクション・ベルトにおいて確認できるのみで，全域にわたってなされたものかどうかは全く不明である。可能性のあることだけを指摘しておきたい。

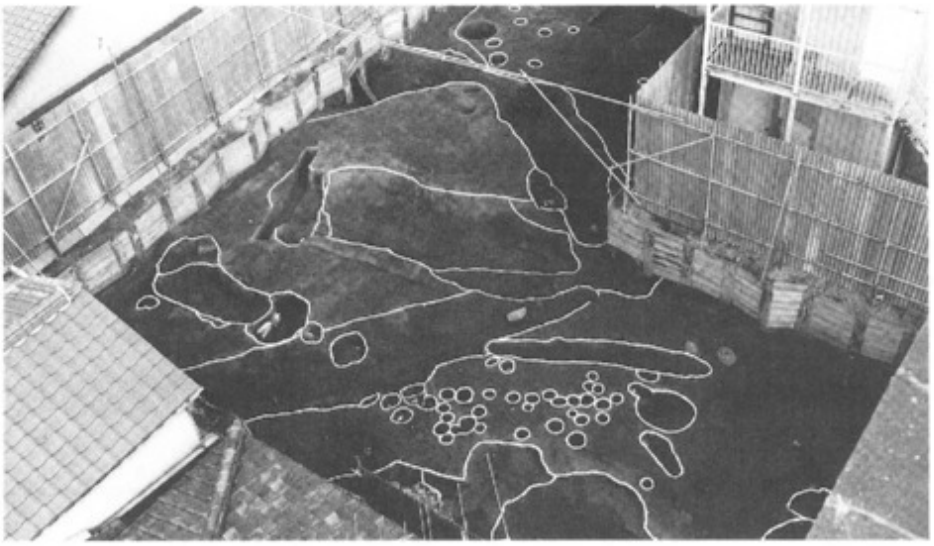
全形の約二分の一程度が調査地区内に存在するのみで，その規模については，推定であるが，溝の内側で8m×12m前後，外側で13m×17m前後の長方形であろう。

なお，当周溝墓に伴う埋葬施設は，前記のようにSK08と考えられ，他には認められない。

出土遺物は，いずれの溝においても少なく，またそれらは，周辺からの流入による小片が大部分を占める。当周溝墓に伴う土器は，いずれも完形品で，溝の浅くなる両端にのみ底面に接して置かれていた。以下，各溝ごとに，流入によるものも含めて記す（図14・15・16）。

SD02壺形土器

（1）は，特異な形態の壺形土器である。直角に立ち上った口縁部外面には，3条の凹線紋を巡らす。この土器は，当周溝墓に併行する時期と考



調査区全景

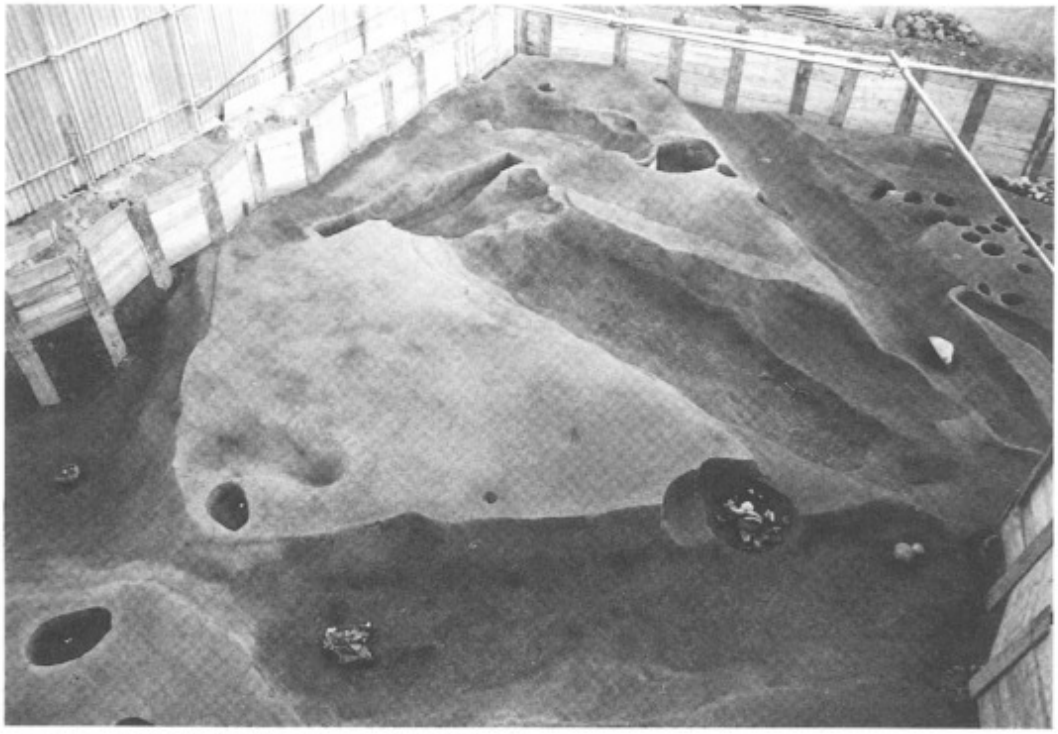


写真7　方形周溝墓 SD 02・04・05（西から）

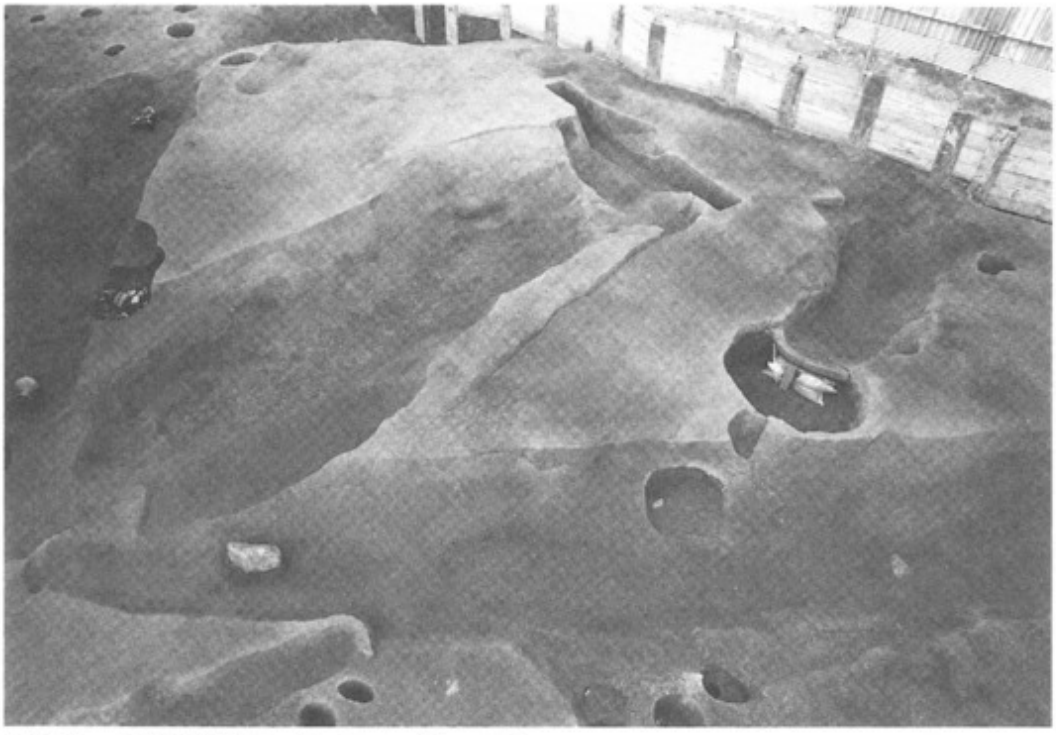


写真8　方形周溝墓 SD 02・04・05（南から）

写真９　方形周溝墓 SD 02・04コーナー部

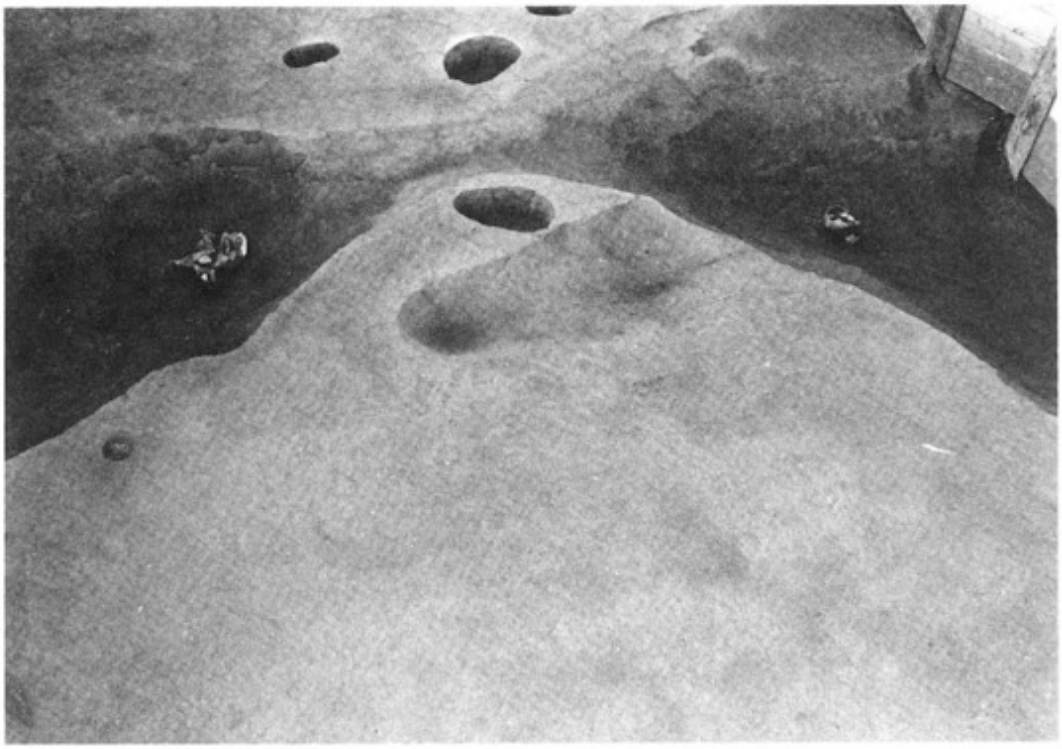


写真10　方形周溝墓SD 04・05コーナー部

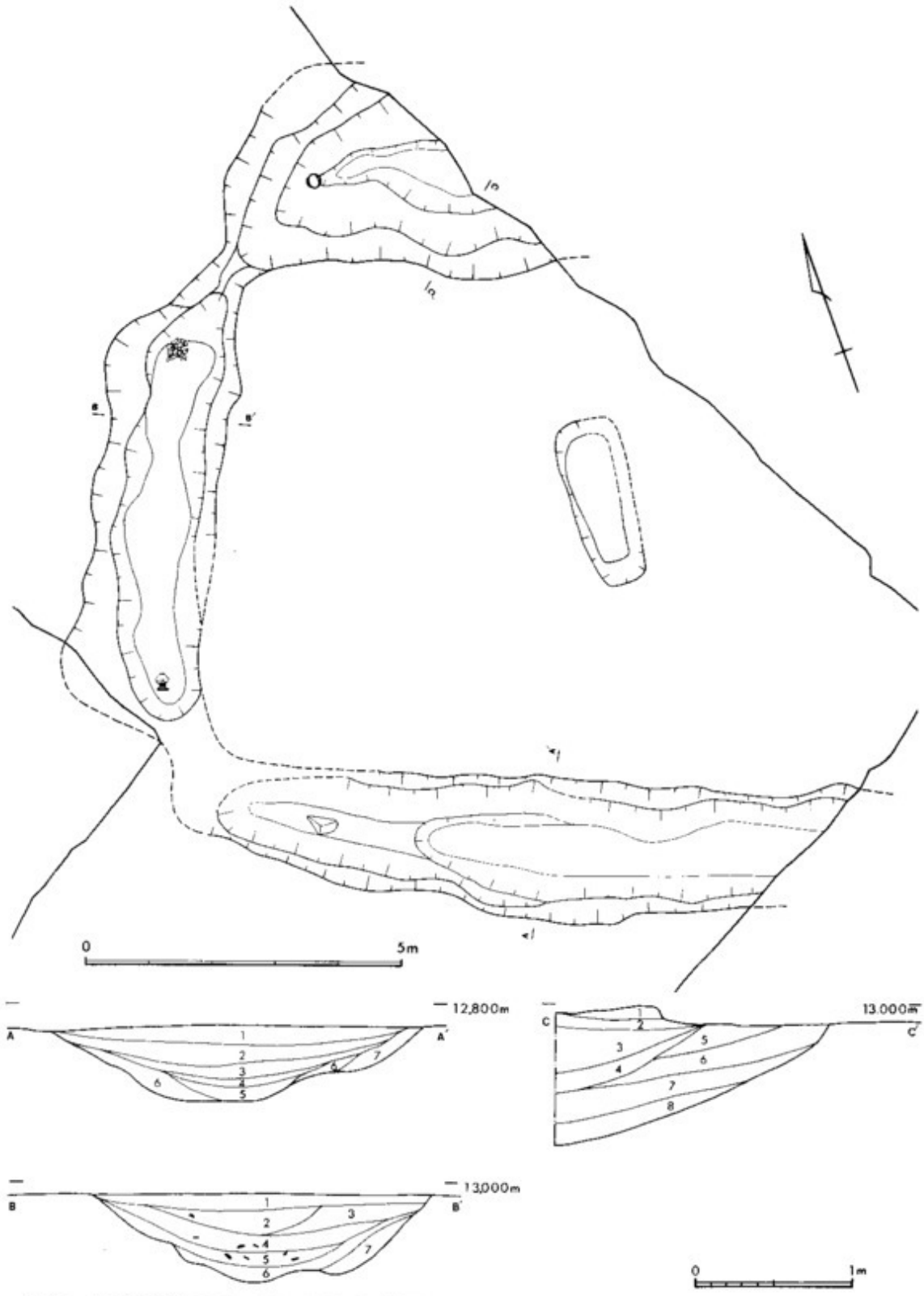


図13　方形周溝墓SD 02・04・05平面・断面図

えられる。

（2）は，口縁部外面に刻み目を施した突帯を貼付する壺形土器である。第Ⅰあるいは第Ⅱ様式に属するものである。

鉢形土器　（3）は，体部に櫛描直線紋を施した鉢形土器で，第Ⅱ様式に属すると考えられる。

蓋形土器　（4）は，壺用の蓋形土器であるが，器壁の剥離が著しく，紋様については，部分的に見えるものをもとに復元した。

縄紋土器　以上の他に，縄紋土器２点が出土している。１点は，口縁部直下に凹線紋を施したもので（写真12左），SK 09出土土器と同時期であろう。もう１点は，沈線を縦横に配した磨り消し縄紋で，末端刺突紋が見られる（写真12右）。一乗寺KI式に併行する時期と考えられる。

花崗岩　なお，他の溝では壺形土器が据え置かれる位置に，この溝では底辺50cm，他辺30cm，厚さ15cmの二等辺三角形の花崗岩が置かれていた。

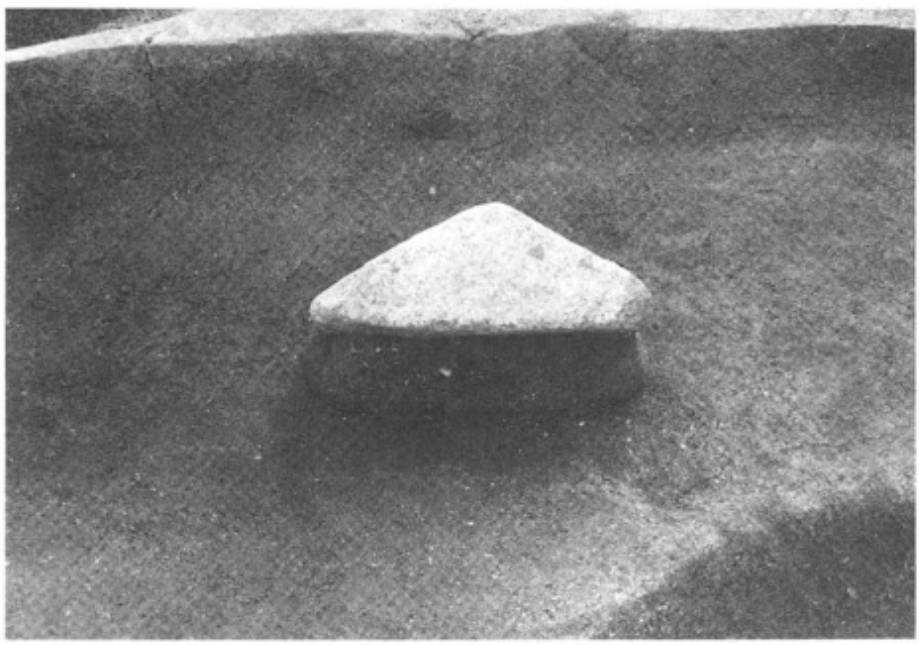


写真11　SD 02花崗岩出土状況

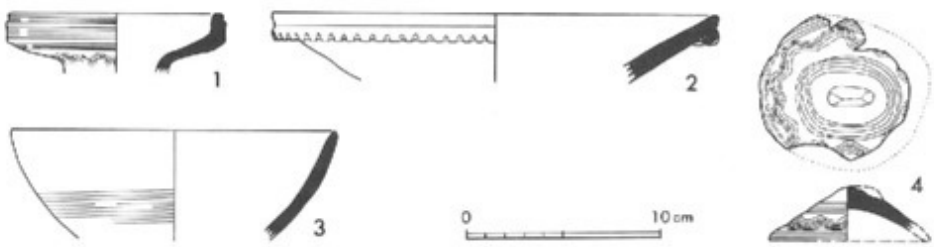


図14　SD 02出土土器（１～４）

写真12　SD02出土縄文土器

SD04壺形土器

（1）は，溝の南端の底面に横たわった状態で完形で出土した。口縁部内面には，退化した扇形紋を巡らし，上下に拡張した端面には，4条の凹線紋を巡らす。頸部には太い4条の凹線紋を巡らし，それ以下に体部最大径部分まで，櫛描直線紋，波状紋を交互に施す。体部下半には，横あるいは縦方向の丁寧な篦磨き調整を施す。なお，底部に近い部分に，焼成後の穿孔1ヶ所が見られる。

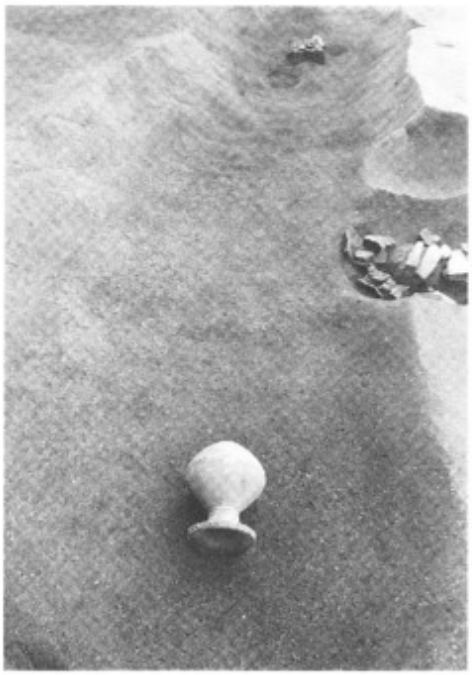


写真13　SD04土器出土状況

（2）は，溝の北端で上から押し潰された状態で出土した。口縁部端面には，櫛描波状紋が施されているが，内面は無紋である。太い頸部以下に，櫛描直線紋，波状紋が交互に施されている。体部下半は，横あるいは縦方向の篦磨きが施されている。体部下半の焼成後の穿孔については，破片の足りない部分があり不明である。

（3）は，口縁部下端に刻み目を施し，頸部以下に櫛描直線紋を5帯以上巡らす。内外面ともに粗い刷毛目調整が施されている。

（1・2）は，その出土状況から当周溝墓の築造時期を表わすもので，第Ⅳ様式に属する。（3）は，溝内埋土の上層からの出土で，周辺からの流入によるものと考えられる。時期は，第Ⅲ様式の中に納まると考えられる。

その他

以上の他に，口縁部端面には刻み目を，内面には横方向の粗い刷毛目調

整を施した大和型甕や，頸部の断面三角形突帯上に棒状浮紋を貼付し，その直下に流水紋を施した畿内，播磨折衷型ともいえる壺形土器（写真15－4），篦描沈線紋帯間に半截竹管による山形紋を施したもの（写真15－5）などがある。いずれも周辺からの流入による小片である。

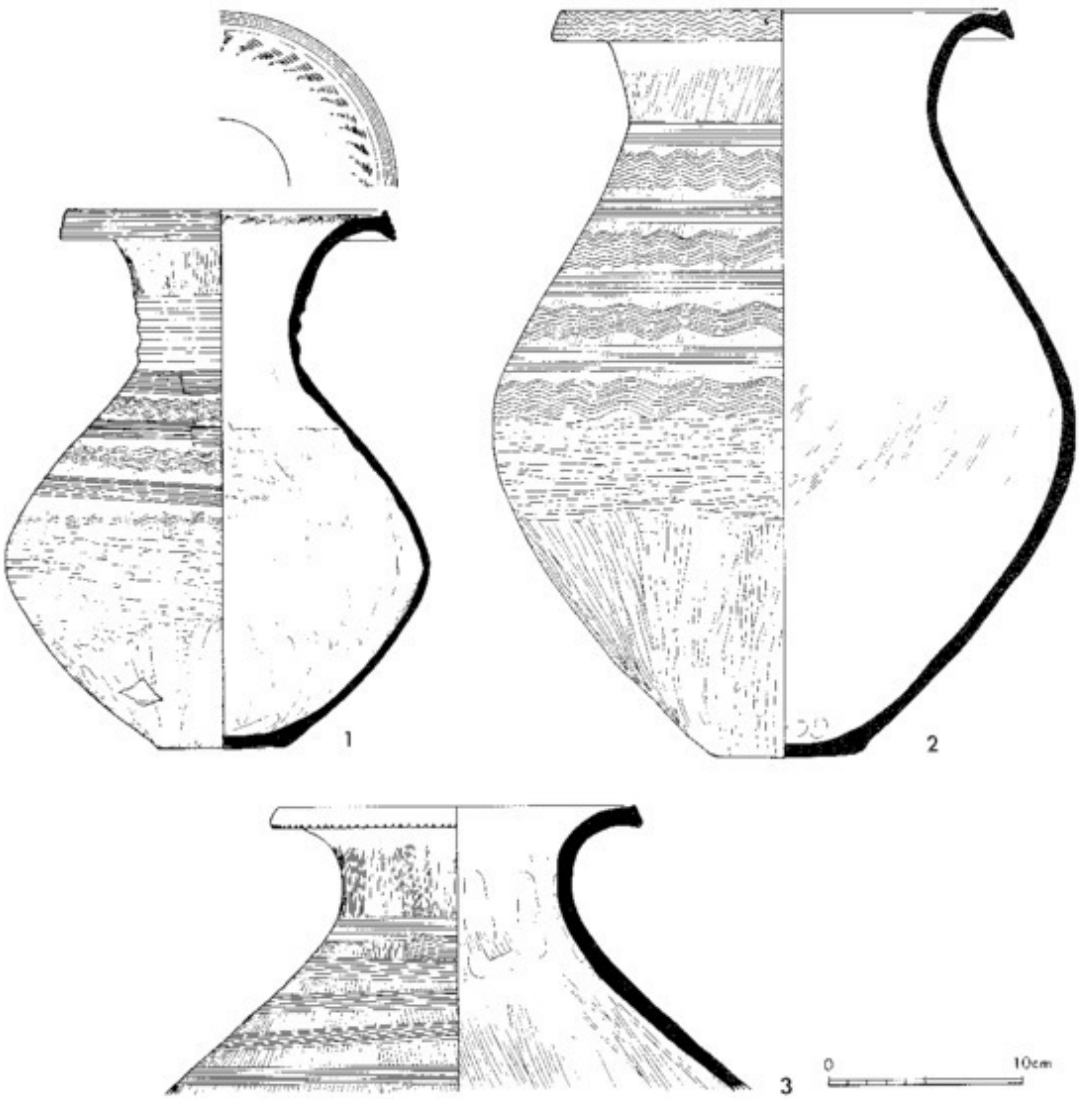


図15　SD04出土土器（1～3）

SD05壺形土器　　（1）は，溝の西端から倒立した状態で出土したもので，体部下半の破片は，すべて内部に落ち込んでいた。

口縁部内面には退化した扇状紋を、下方へ垂下させた端面には4条の凹線紋を施す。頸部以下，体部最大径まで櫛描直線紋，波状紋を交互に施し，体部下半は，縦あるいは横方向の篦磨き調整を施す。底面の中央に，焼成

後の穿孔がみられるが，体部にはそれは認められない。胎土中には，多量の赤色酸化土粒が含まれ，搬入品と考えられる。

（2）は，口頸部，体部下半を欠くが，紋様構成・器形は（1）と同様のものである。ただ，胎土中に多量の赤色酸化土粒を含み，当遺跡あるいは周辺の生産にかかるものではなく，搬入品であろう。

写真14　SD05土器出土状況

（3）は，溝内埋土上層出土のもので，口縁部端面に櫛描波状紋，頸部に直線紋を施す。

（1）は，その出土状況から当周溝墓に伴うもので，（2）は，時期的には（1）と同様であるが，6分の1程度の破片であり，当周溝墓と直接関連するものかどうか不明である。(3)は第Ⅱ様式に属するものであろう。

その他　周辺から流入したもので，櫛描流水紋（写真15－6）や高杯形土器脚部裾に半截竹管様の原体で列点紋を施したもの（写真15－7）などがある。

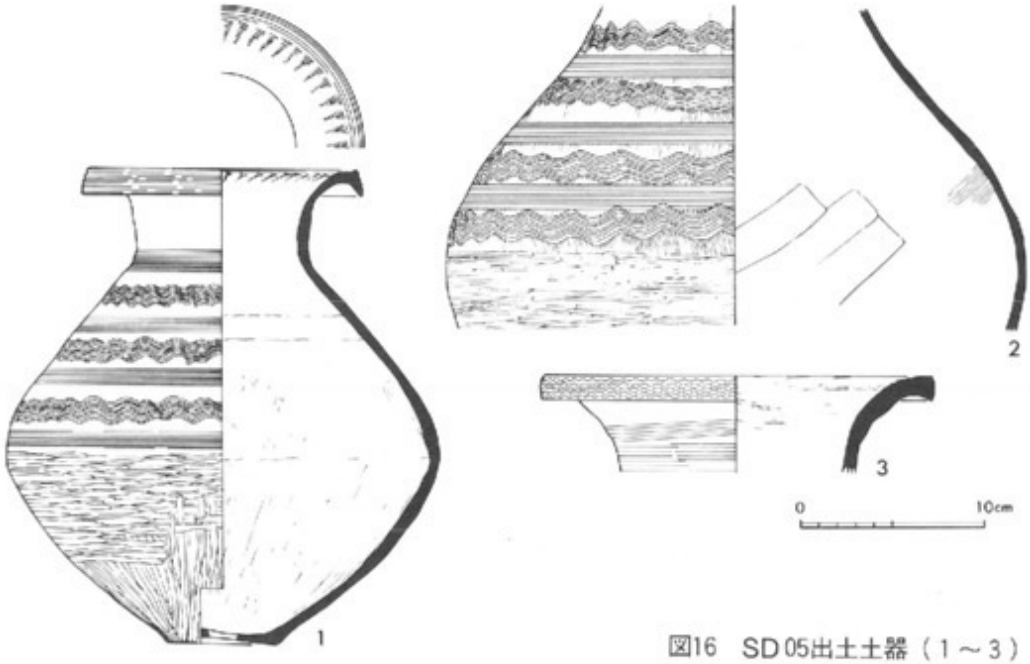


図16　SD05出土土器（1～3）

写真15　SD04・05出土土器（1・2・4・5 SD04，3・6・7 SD05）

SX01　調査区南端で一部を検出した遺構で，溝状の落ち込みがほぼ直角に連接する形態である。東側の落ち込みをSX01A，西側の落ち込みをSX01C，その間の高まりをSX01Bとする。

SX01A　SX01Aは，遺構の平面形を確認した段階で，花崗岩が数多く頭を見せていた。調査の結果，この花崗岩は，ほぼ平面円形で，落ち込みの底面まで幾重にも重なっていた。石の大部分は当遺跡の下層から出土する風化の進んだ花崗岩礫で，小さいものは数cm，大きいものは30数cmの径を有し，総数134個であった。花崗岩以外にも様々な石種が含まれていたが，詳細は第Ⅳ章に記載している。砂岩は砥石等に使用される目的で搬入されたものと考えられ，図34－2は玉磨きに使用された筋砥であろう。

検出面から底面までの深さは，約90cmであるが，一度埋没した遺構が再び掘削され，その中に多量の石や破砕された土器が入れられたようである。土器は，上層から下層まで含まれているが，大型の破片は，上層位に特に多い。

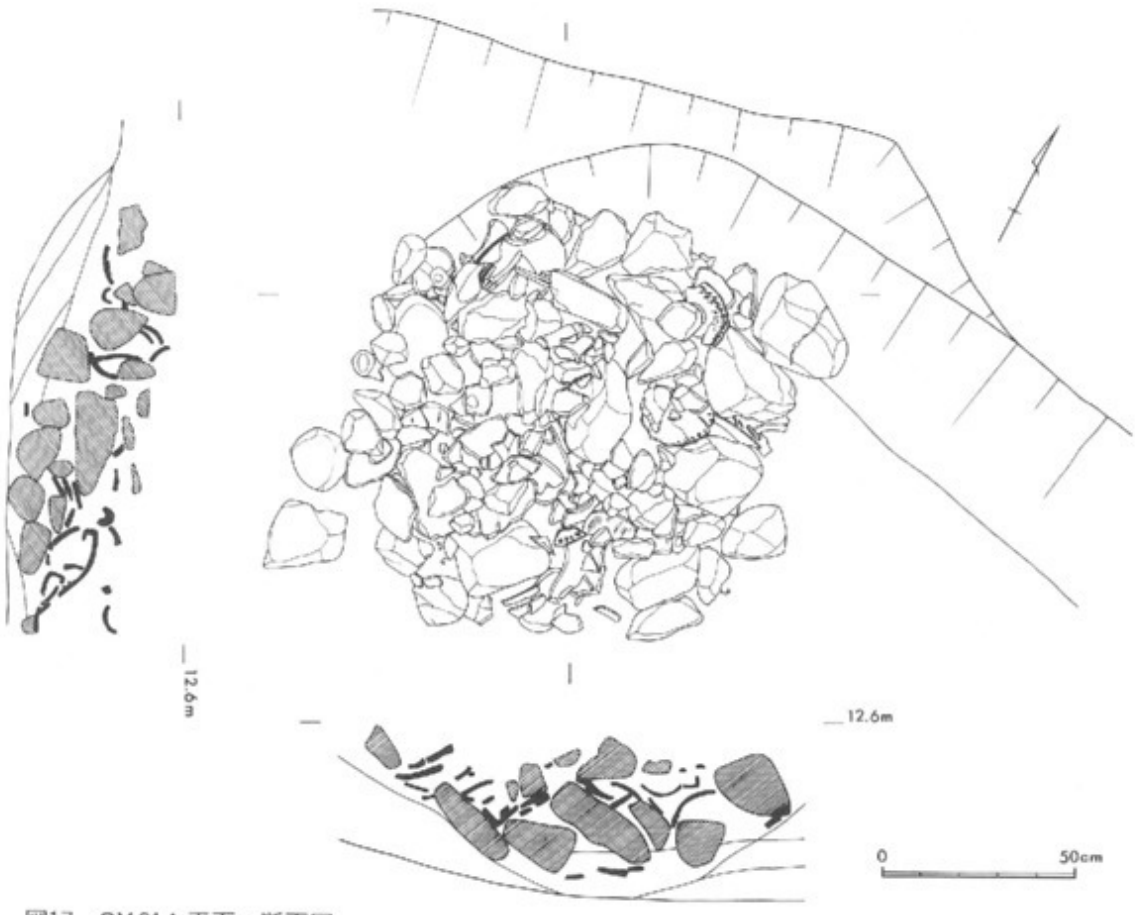


図17　SX01A平面・断面図

壺型土器
(図18・19)

（1）は，大型の美しく飾られた広口壺型土器である。口縁部内面は，二重に凹線紋を巡らし，外側の凹線上には密接して円形浮紋を貼付し，内側の凹線をはさみ退化した扇形紋を配している。また，大きく垂下させた口縁部端面には，5条の凹線紋を巡らし，その上には，径2㎝前後の大きな円形浮紋を9方向に貼付する。

頸部には，9条の凹線紋を巡らし，その下端になる頸体部境には，指頭圧痕紋突帯と勾玉状の浮紋を貼付する。

体部は，先の勾玉状浮紋の下に描かれた櫛描波状紋にはじまり，直線紋と交互に繰り返えし，中位の直線紋帯間に斜格子紋，最下帯の波状紋，直線紋上には，2個一対の円形浮紋を10方向に貼付する。

体部外面上半は刷毛目調整を，下半は横方向の篦磨き調整を施すが，底部に近い部分は，器表の剝離が著しく不明である。内面は，頸部上半以上には刷毛目調整を，頸体部境付近は横方向の撫で調整を，体部については不定方向に板状工具による撫で調整を施している。

体部上位および底部中央に各1ヶ所焼成後の穿孔が見られる。

写真16　SX01A出土壺形土器（1）

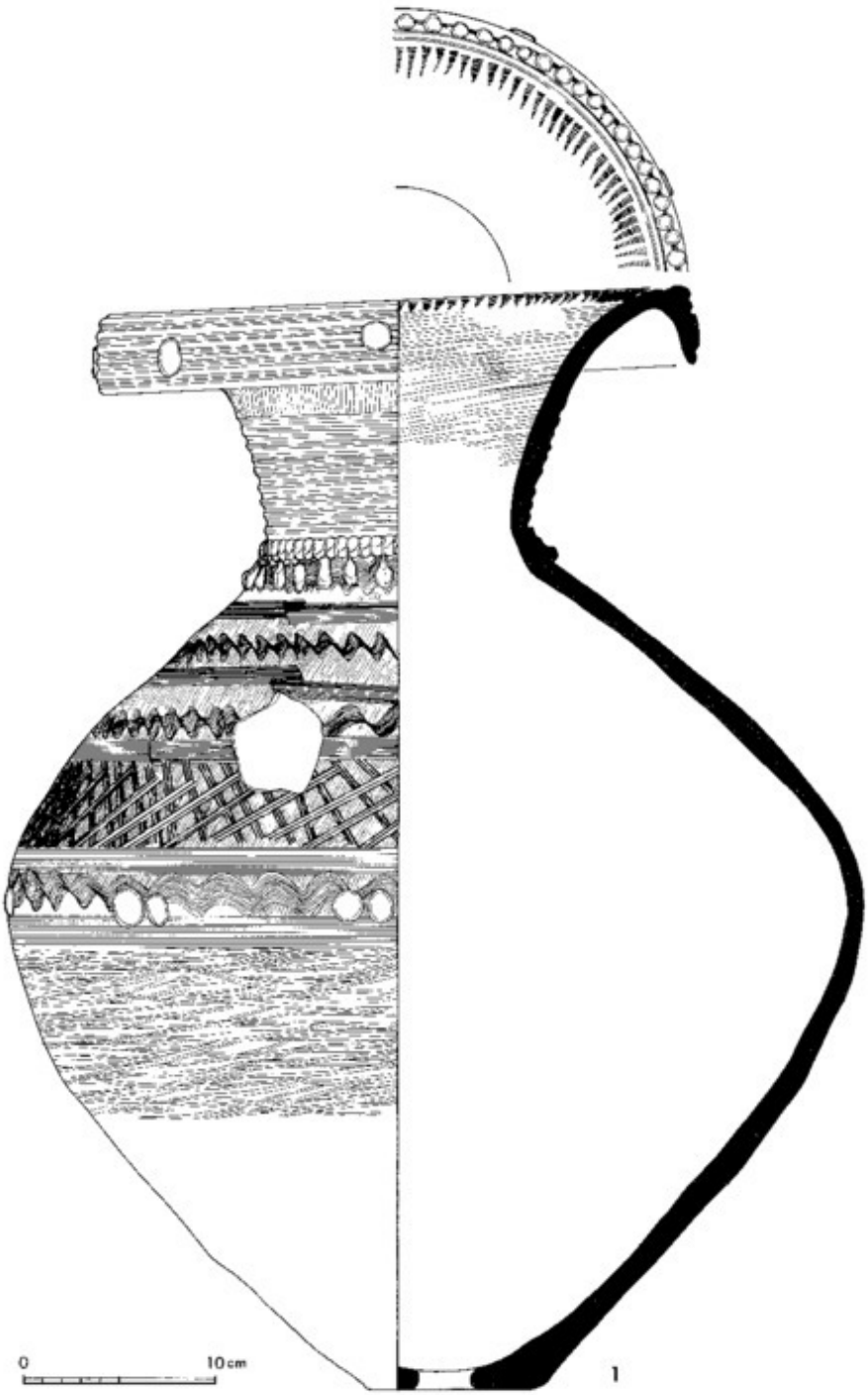


図18　SX01A出土壺形土器（1）

（2）もまた（1）に匹敵する大きな広口壺型土器であるが，体部下半が失なわれている。

口縁部内面は無紋で，大きく垂下させた端面には5条の凹線紋を巡らし，その上に4本一組の棒状浮紋を6方向に，また，その間に円形浮紋を各1個貼付する。

頸部には2条の断面三角形突帯を巡らし，その直下から櫛描波状紋と直線紋を交互に施し，最下帯のみ波状紋を重ねる。

器壁は，内外面とも粗い刷毛目調整を施すが，頸体部境付近のみ撫で調整を施している。

（3）は，口縁部内面の外側に櫛描波状紋，内側に退化した扇形紋を重列に施し，その紋様帯間に4個一組の円孔を4方向にあける。上下に拡張した端面には，櫛描波状紋を施し，その上に5個一組の円形浮紋を6方向に貼付する。

細く引きしまった頸部には3条の断面三角形突帯を巡らす。その直下に櫛描直線紋の一部らしきものが見えるが，断定はできない。

胎土には，赤色酸化土粒が多量に見られることから，搬入品と考えられる。

写真17　SX01A出土壺形土器（2・3）

（4・5・6）は，口縁部のみの破片であるが，それぞれ異なった施紋が見られる。（4）は，内面に退化した扇形紋を，端面には凹線紋を3条巡らす。（5）は，拡張のない端面に櫛描波状紋を施し，（6）は，下方に拡張した端面に篦描の綾杉紋を施し，その上に2個一対の円形浮紋を貼付し，内面に円孔を穿っている。

（7）は，無紋の壺形土器で，（8）は，口縁部端面に細い凹線紋を巡らすだけの壺形土器である。いずれも体部を飾らぬ器形である。

（9）は，口縁部および体部下半を欠くが，頸部は無紋で，体部には櫛描直線紋，波状紋を交互に施す。

(10) は，口頸部を欠くが，無紋の壺形土器である。胎土は精良で，調整も丁寧である。体部下半は，篦削りによって器壁を薄く仕上げている。胎土中には赤色酸化土粒を含んでおり，搬入品であろう。

(11) は，細頸壺形土器で，口縁部直下に1条，口頸間に3条の凹線紋を巡らす。

高杯形土器（図20）

(12) は，水平な口縁部内面に断面四角形の突帯を巡らし，大きく垂下させた端面には，6条の凹線紋を施し，その上に10本一組の棒状浮紋を8方向（推定）に貼付する。杯部内外面および脚柱部には，丁寧な篦磨き調整が施されている。杯部底面は欠くが，円板充塡法によるものであろう。

胎土中には多量の赤色酸化土粒が含まれ，搬入品と考えられる。

(13) は，口縁部を屈折して立ち上がらせる形態で，その外面には，4条の凹線紋を巡らしている。杯部内外面および脚柱部外面には，丁寧な篦磨き調整が施されている。杯部底面は欠くが，円板充塡法によるものであろう。

(14) は，大型で浅い杯部を有する。口縁部端面には凹線状の強い横なでが施されているため，端部は内傾しながら突出する。緩やかに立ち上った外面には2条の凹線紋を巡らせる。杯部上半は，細かく丁寧な横方向の篦磨調整が施されており，それは凹線紋の内にまでおよんでいる。杯部内外面および脚柱部にももちろん丁寧な篦磨調整が施されている。この土器もまた杯部底面を欠くが円板充塡法によるものであろう。

(15) は，杯部底面以下を欠くが，異形の高杯形土器と考えられる。平面形は楕円形で，長径方向に把手状の突起を削り出して作っている。杯部内外面とも丁寧な篦磨き調整を施し，特に内面は，時計回りの方向に6回に分けて，横方向に施している。また，胎土は精良で，水簸されたかのようである。

台付鉢形土器

(16) は，口縁部外面に2条，脚部裾に1条の凹線紋を巡らす。鉢部お

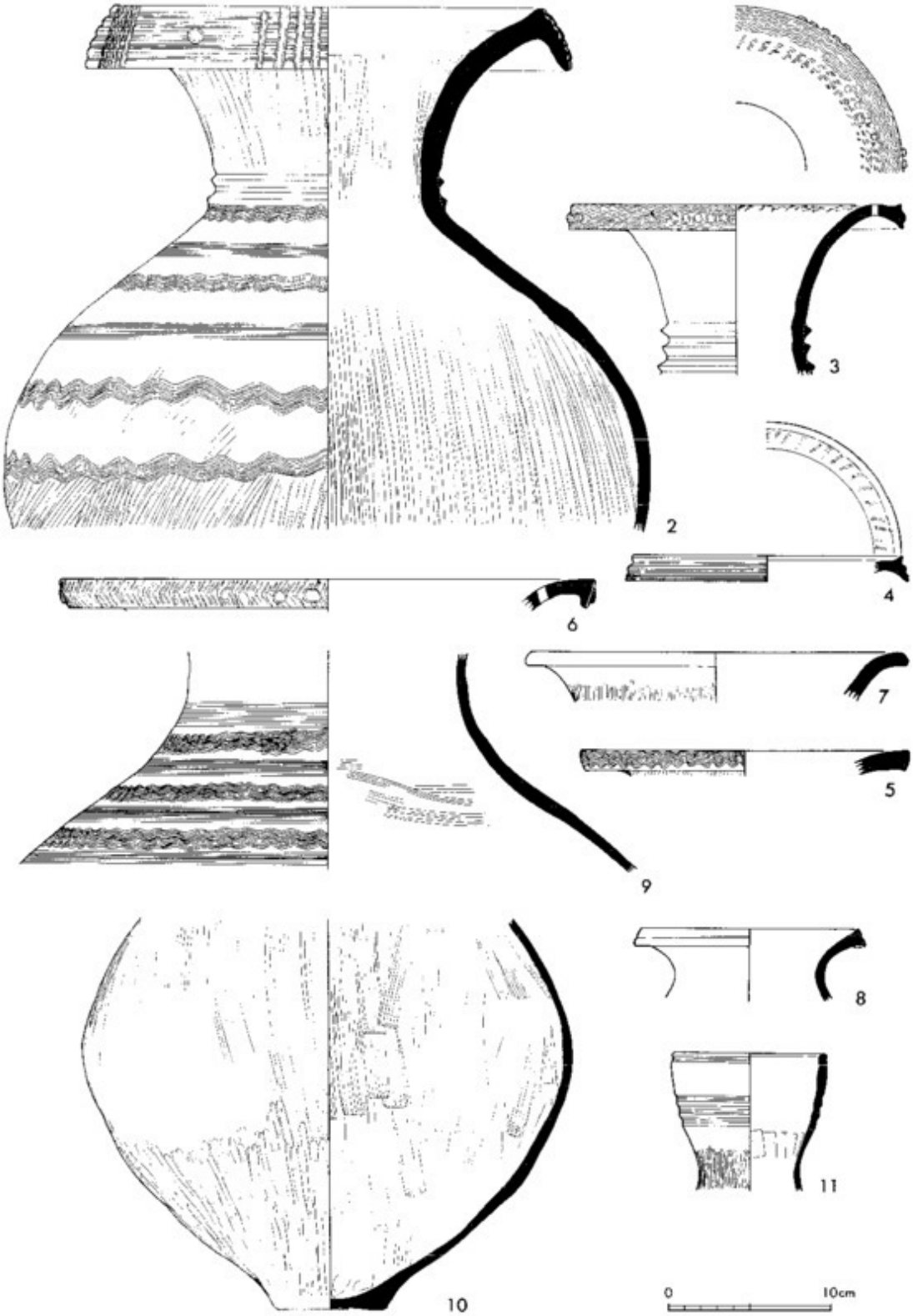


図19　SX01A出土壺形土器（2～11）

よび脚部外面は篦磨き調整を施すが，内面は剝離しており不明である。脚部内面中位は，横方向の篦削り調整で絞り目を消している。この土器もまた鉢部底面を欠くが，円板充塡法によるものであろう。

(17) は，脚部下半および鉢部上半を欠くが，台付鉢形土器と考えられる。脚部上半には5条の太い凹線紋を巡らす。播磨地方に多く見られる形態のものであろう，胎土中に，赤色酸化土粒が少し含まれる。

台付壺形土器　(18) は，壺部上半を欠くが，おそらく無頸壺形土器ではないかと考えられる。壺部および脚部外面は，丁寧な篦描き調整で，壺部内面は撫で調整を施している。脚部は，外見は中実であるが，壺部底面および脚部中位に円板充塡を施している。脚部裾の内面は，篦削り調整を施している。胎土中に多くの赤色酸化土粒を含む。

脚台部　(19・20・21・22) は，杯・鉢・壺形土器をのせるのであろうが，いずれかは確定できない。(19) にはラグビーボール形の透し孔が5方向に，(22) には円形の透し孔が4方向に設けられている。

胎土中に赤色酸化土粒を含むものがあり，(19) は少量，(21) は多量である。

鉢形土器　(23) は，小型の鉢形土器で，口縁部直下に2条凹線紋を巡らす。器壁の剝離が著しく，調整は不明であるが，内面の一部には粗い刷毛目調整が施されている。

甕形土器　(24) は，口縁端部を上方に拡張した甕形土器で，体部上半に横方向の

写真18　SX01A遺物出土状況

12

13

14

16

15

11

写真19　SX01 A出土壺・高杯・台付鉢形土器（11～16）

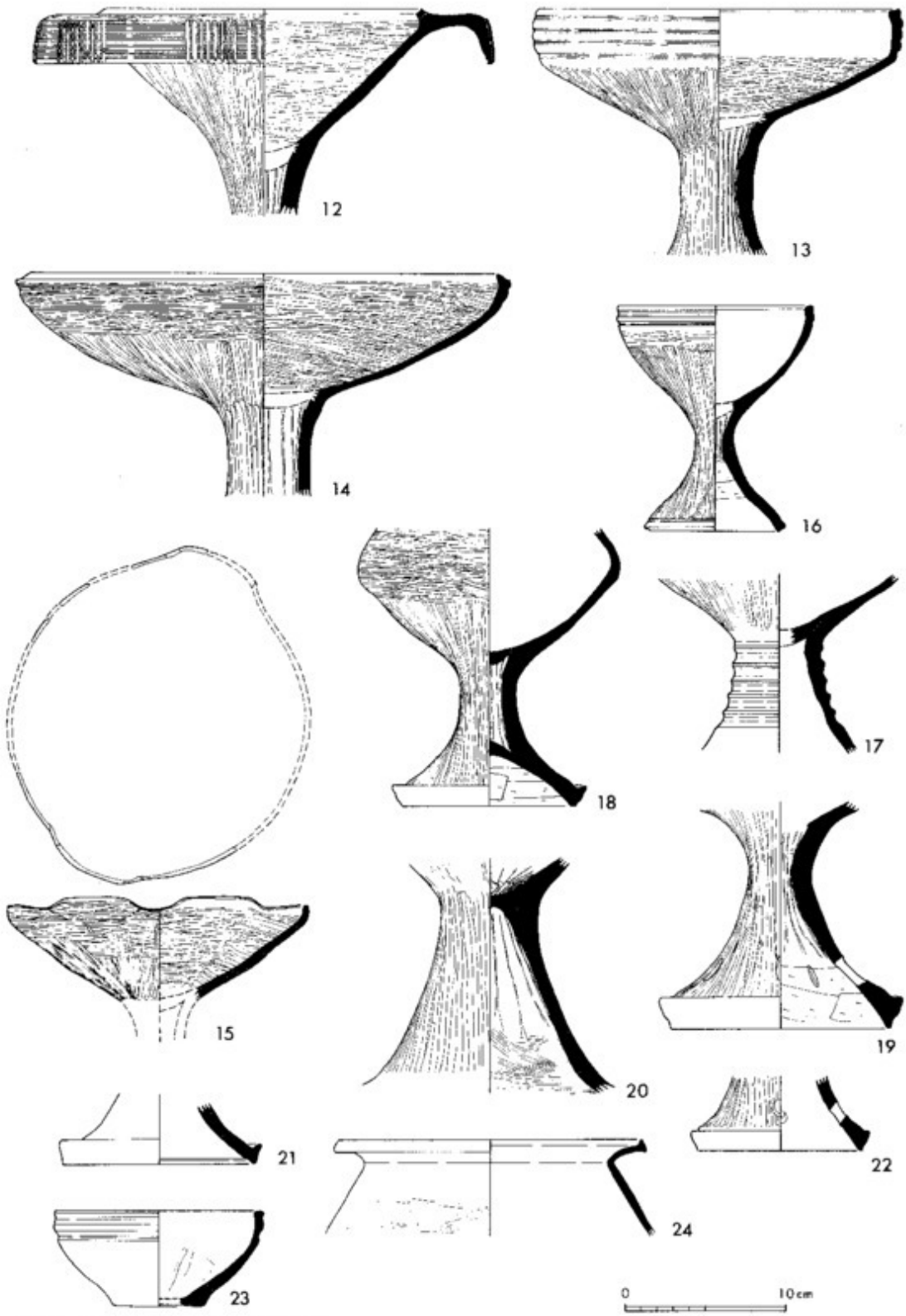


図20　SX01A出土土器（12～24）

篦磨き調整を施している。胎土中に少量の赤色酸化土粒を含む。

SX01B　A・B間の高まりで，検出面からの深さは，0.15m程度である。出土遺物は，小片がごく小量出土したにすぎない。

SX01C　北から南に徐々に深くなる落ち込みで，最も深い部分では，検出面から約0.8mである。埋土は周辺からの流入によるものであるが，前記の方形周溝墓（SD02・04・05）に見られた埋没後の再掘削と同様の層序がセクションベルトに見える。

方形周溝墓　このSX01CとSX01Aの主軸は，ほぼ直角であり，SX01Aに見られる穿孔された土器や，埋土の状況をも考慮すると，方形周溝墓のコーナー部分である可能性が高い。

SX01Cの出土遺物は，極めて少なく，それも周辺からの流入による小片ばかりである。

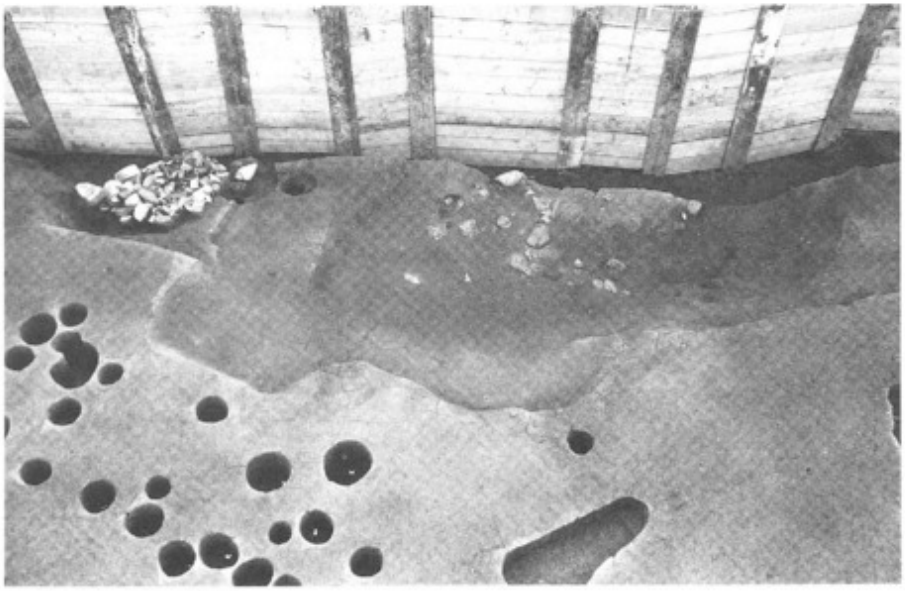


写真20　SX01全景

SX02　SD05に切られた遺構で，深さは0.2m前後であるが，その平面形は全く不明である。

出土遺物は，小片が若干存在するのみで，第Ⅱ様式に属すると考えられる口縁部内面に櫛描きの連続弧紋を施したもの（写真21）があるが，当遺構の時期を表わすものかどうか不明である。

写真21　SX02出土土器

SX 03　SD 02・03に切られた土坑状の遺構で，検出面からの深さは0.5m前後である。平面形は，全く不明である。底面には炭の集中する部分があり。その付近には多くの土器が見られた（図21）。

壺形土器　（1）は，口縁部端面を下方に拡張し，櫛描波状紋を施す。頸部には2帯以上の櫛描直線紋を施す。胎土中には多量の粗砂粒を含む。

（2）は，甕あるいは無頸壺形土器のどちらとも確定しがたいが，体部の張りや施紋がかなり下まで及ぶことから，無頸壺形土器と考えたい。頸部直下から5帯以上の櫛描直線紋を施す。

（3）は，頸部のみの破片である。長い頸部に櫛描直線紋を6帯以上巡らし，その紋様帯間を横方向に篦磨き調整する。この施紋・調整法は，当地域には全く見られないもので，河内地方からの搬入品と考えられるが，胎土は生駒西麓産のそれではない。

写真22　SX 03出土土器（3）

以上の壺形土器は，いずれも第Ⅱ様式に属するものであろう。

甕形土器　（4）は，口縁部に刻み目紋，頸部以下に11条の篦描き沈線紋を施す。体部外面は縦方向の刷毛目調整を，内面は全面撫で調整を施す。底部中央には，焼成後のものと考えられる穿孔がみられる。

第Ⅰ様式末に属するものである。

（5）は，口縁部に刻み目紋，頸部以下に3帯の櫛描直線紋を施す。体部外面は，粗雑な刷毛目調整，内面は板状工具による撫で調整を施す，いわゆる播磨型の甕で，第Ⅱ様式に属する。

蓋形土器　（6）は，甕形土器用の蓋形土器と考えられる。頂部周縁の相対する二方向に2孔一対の紐孔をあける。

高杯形土器　（7）は，上半部を欠くが，高杯形土器の脚部と考えられる。残存する部分は，すべて撫であるいは横撫で調整である。

ピット群　SD 01とSX 01の間に39個のピットが存在した。これらは，径0.2～0.35mで，深さ0.2～0.3mである。東西に一列に並ぶ部分もあるが，建築物に伴う柱穴かどうかは不明である。

ピット内には，ほとんど遺物は含まれず，土器の小片がわずかに出土したのみである。時期の判明する破片は，第Ⅰ様式後半に属するもので，周辺の遺構との切り合い関係からも，第Ⅰ様式としてもよいと考えられる。

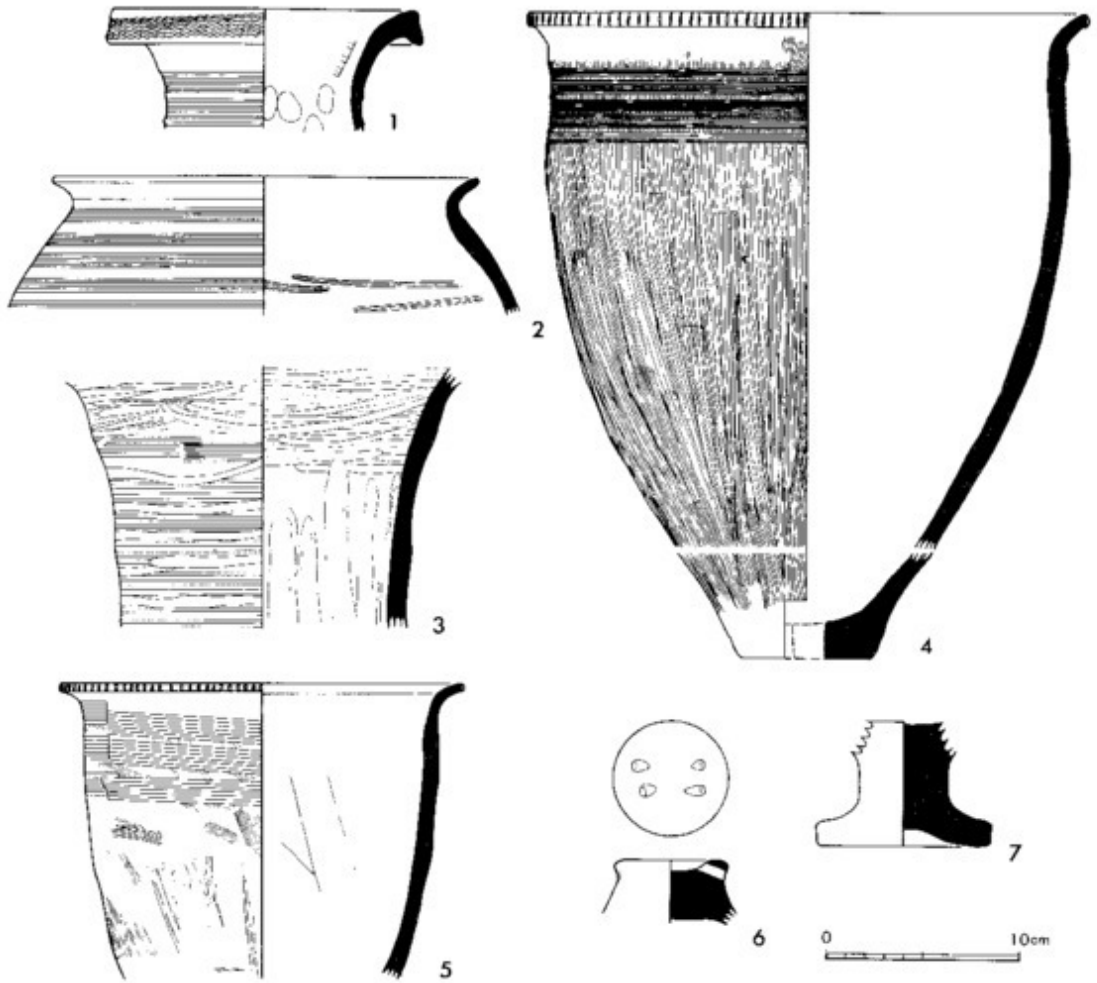


図21　SX03出土土器（1～7）

V.土製円板　（図22・23）

包含層および各遺構内から出土したもので，41点確認している。最も小さいもので（1）の径2.9cm，重さ6g，最も大きいもので（41）の径9.8cm，重さ153gまで様々であるが，集中するのは径5cm前後である。

すべて土器片を打ち欠いて製作されたもので，焼成段階に円板の形態をとっていたものはない。また，大部分の周縁は打ち欠かれたままであるが，（2・11・23・25）などは，擦られたように滑らかである。なお，（23）は，紀伊産の胎土である。

VI.土　錘　（図24）

2点が出土しており，いずれも下層包含層の出土である。径1.5cmの円柱の片方に穿孔したものであるが，半截しているため全長および重量は不明である。

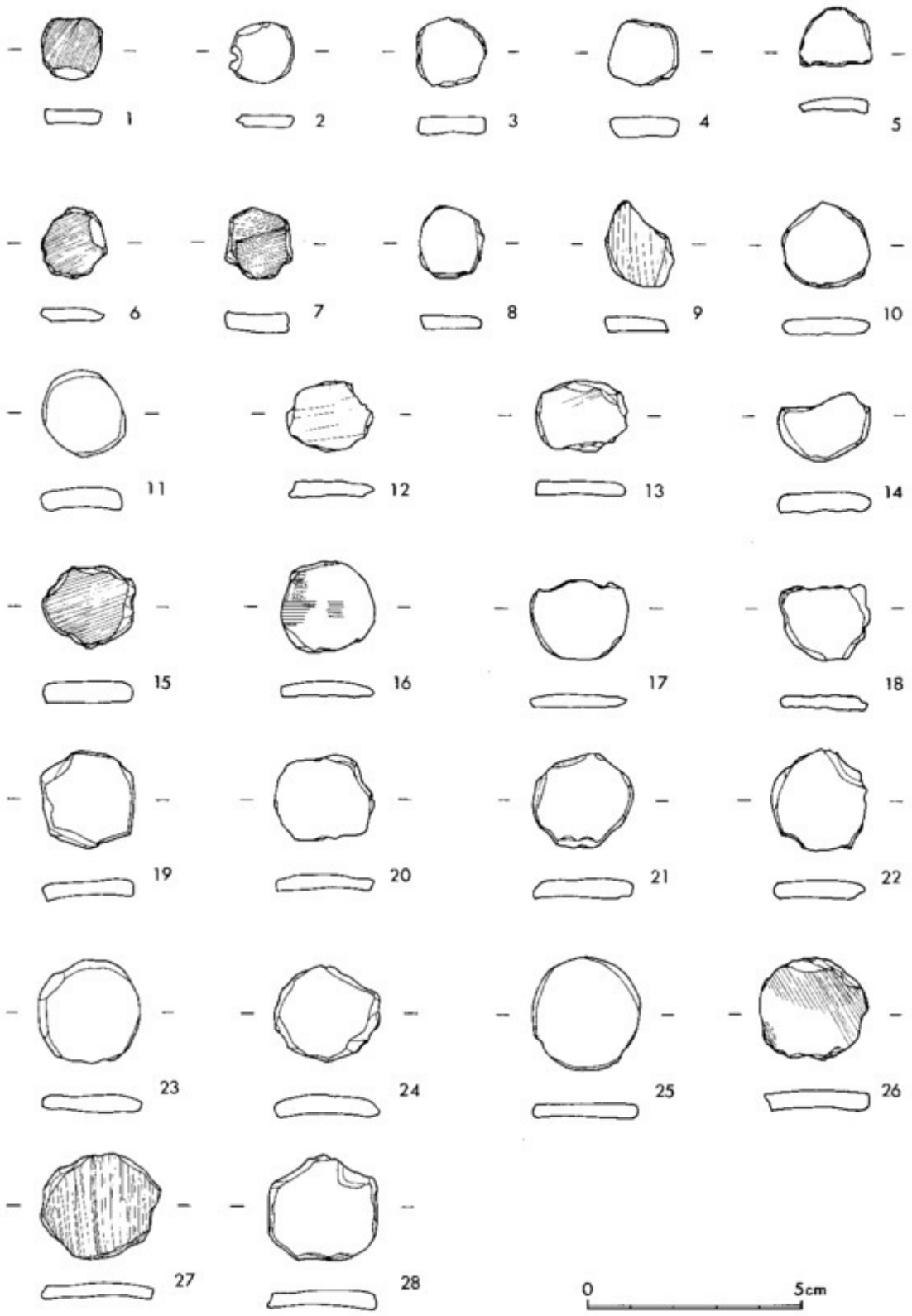

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5cm

図22　土製円板（1～28）

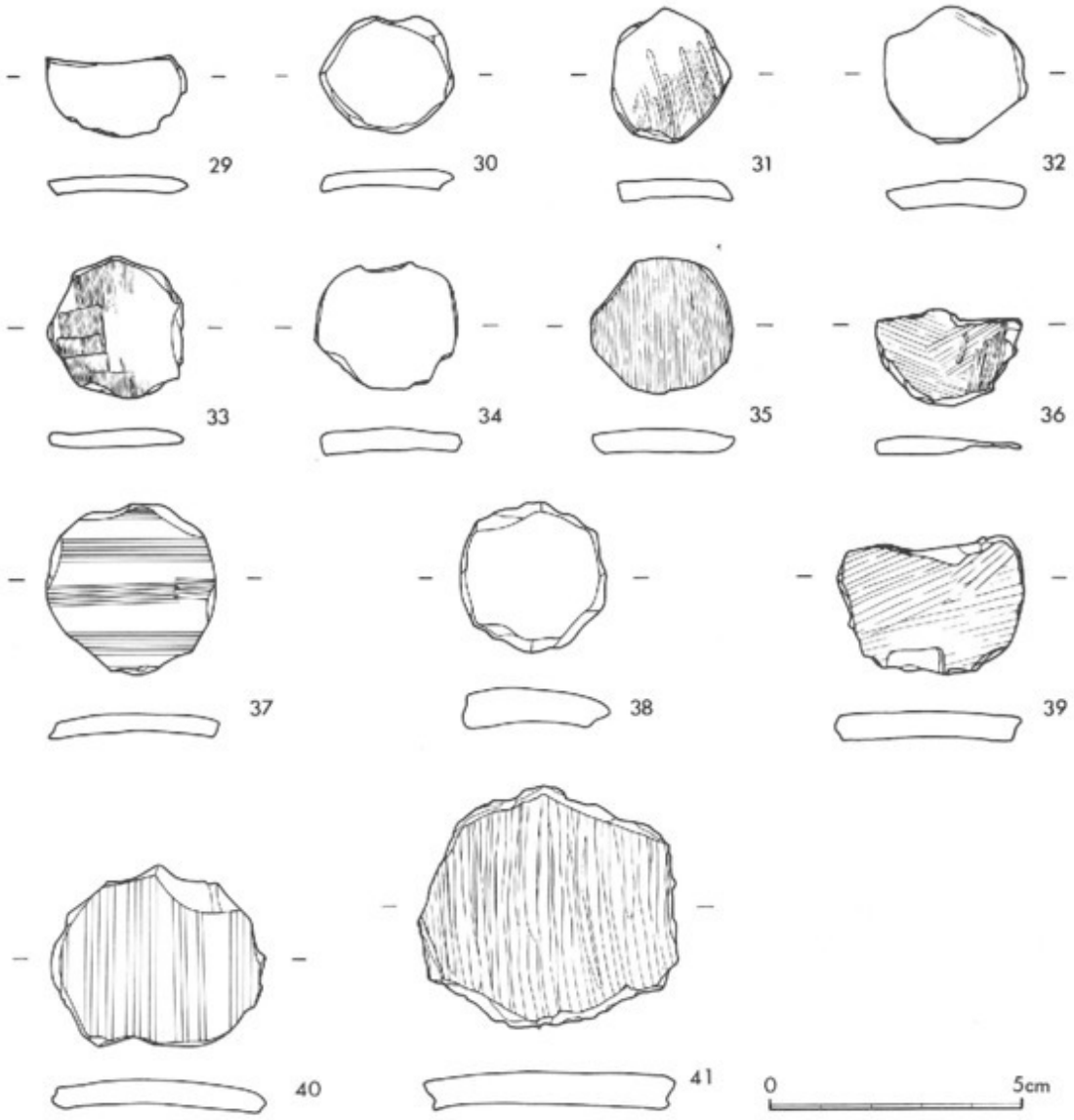


図23　土製円板（29～41）

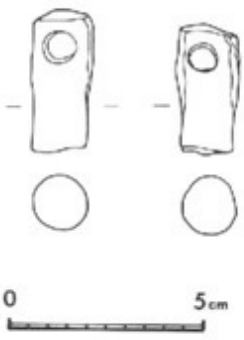


図24　土　錘

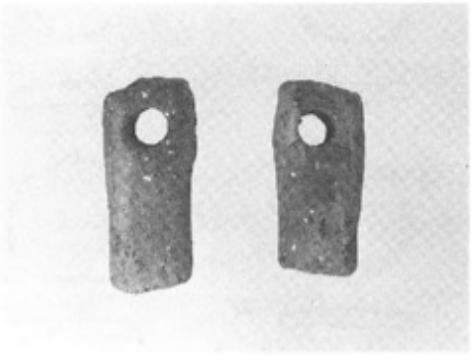


写真23　土　錘

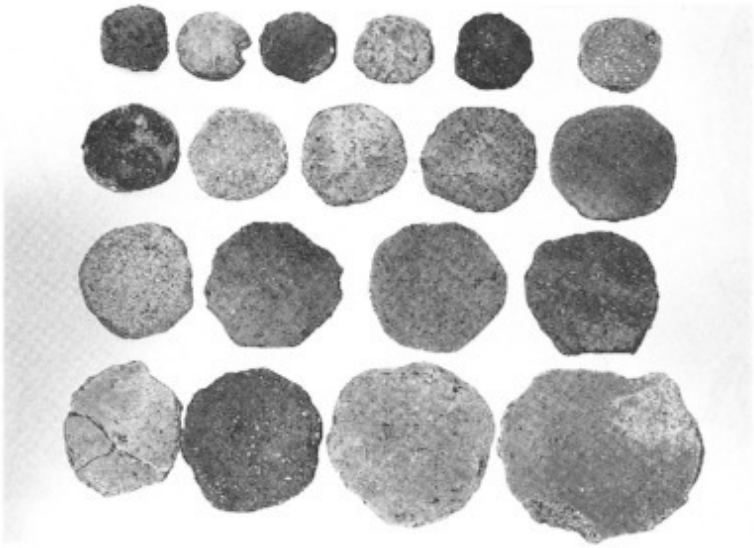


写真24　土製円板

Ⅶ石　器

石器は，発掘調査対象面積に比し多量である。これは，包含層発掘段階から，石製品については注意深く対処したのと，遺構内の埋土の大部分を水洗し，その検出に努めたことによる。これにより，一般的には見過し易い礫石器についても多く採集することができた。

文中に記した石種は，奥田尚氏の肉眼観察結果によるものである。

A石鏃

石鏃と認定できたものは計21点である。これらはすべてサヌカイの打製である。基辺の形状により分類すると，凸基有茎式２点（１・２），凸基無茎式２点（３は尖基式，４は円基式），平基式（５～８），凹基式９点（９～17），基辺の欠損による形式不明４点（18～21）である。

調整は，表裏両面とも全面を覆うものと，大剝離面を残すもの（４～９・12・13・20）がみられ，前者は断面形が厚く菱形に近く，後者のそれは扁平な六角形状である。

出土数の絶対量が少なく，しかも時期を限定し得るものが（６・10・11）のSK 02，（19）のSK 01のみで，他は方形周溝墓の溝や包含層出土で限定できない。したがって，形態，重量等による時期差を検討することは難かしい。ただ，（14・15）は，丁寧な調整とその形態から，縄紋時代に属する可能性は高く，（16・17）もその可能性がある。

B石錐

８点出土しており，すべてサヌカイト製である。頭部と錐部が明瞭に判別できるもの（１），判別はできるが，（１）ほど明瞭でないもの（２～４），錐部先端まで徐々に細くなるもの（５～８）に分類できる。大部分のものが大剝離面を残し，周縁部のみ調整を加えている。

頭部と錐部が明瞭に判別出来る（１）は，錐部が長く，他のそれは短いことから，穿孔対象物が異なると考えられる。

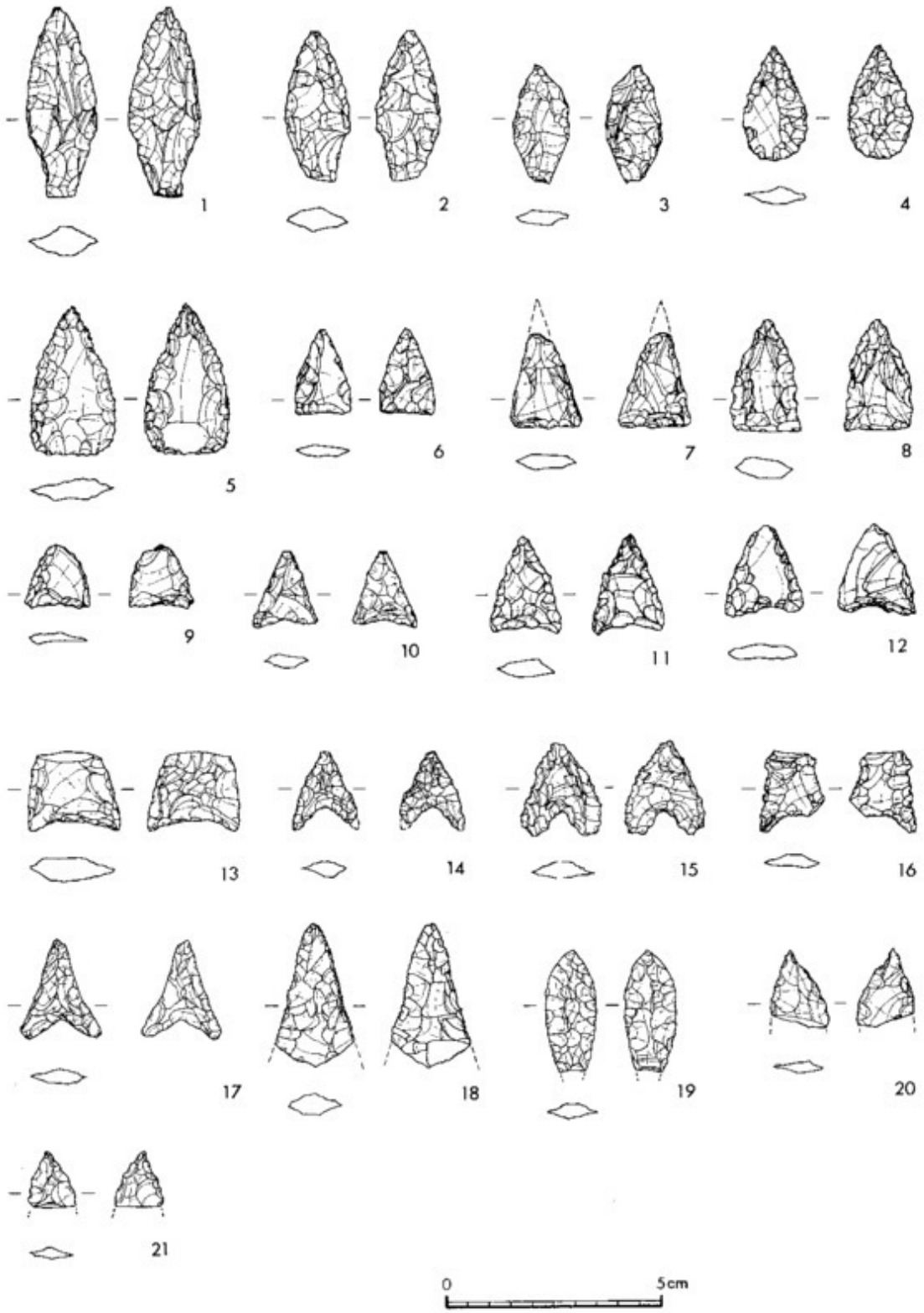


図25　石　鏃

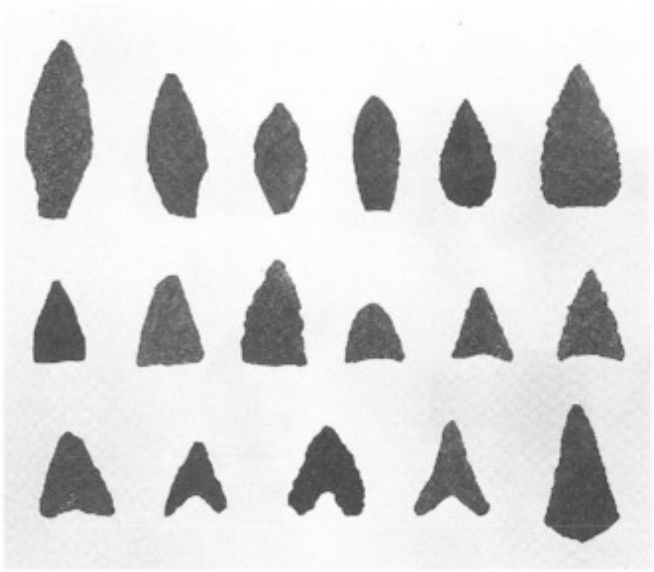


写真25　石　鏃

写真26　石　錐

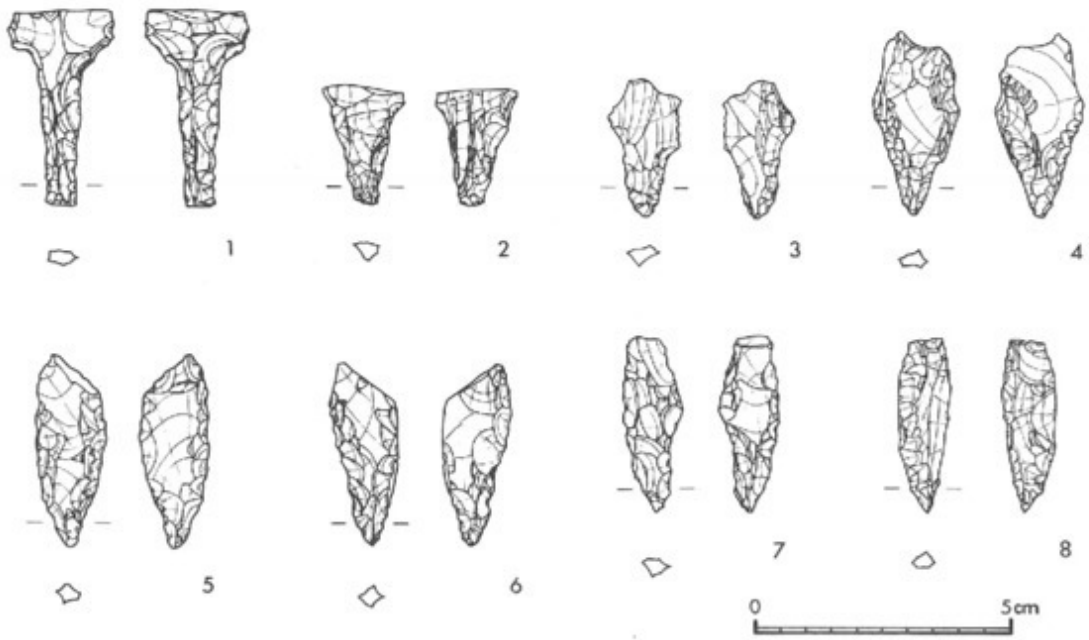


図26　石　錐

C楔形石器　相対する二側縁に密接した階段状剝離がみられ，断面形は凸レンズ状である。大部分は各面に調整が施されているが，（1）のように自然面を残すものもある。また，階段状剝離を有する辺を上下とすると，左右の辺は片方あるいは両方に截断面を有する。

図示した典型的な6点の他に，楔形石器と考えられるものは13点出土している。

写真27　楔形石器

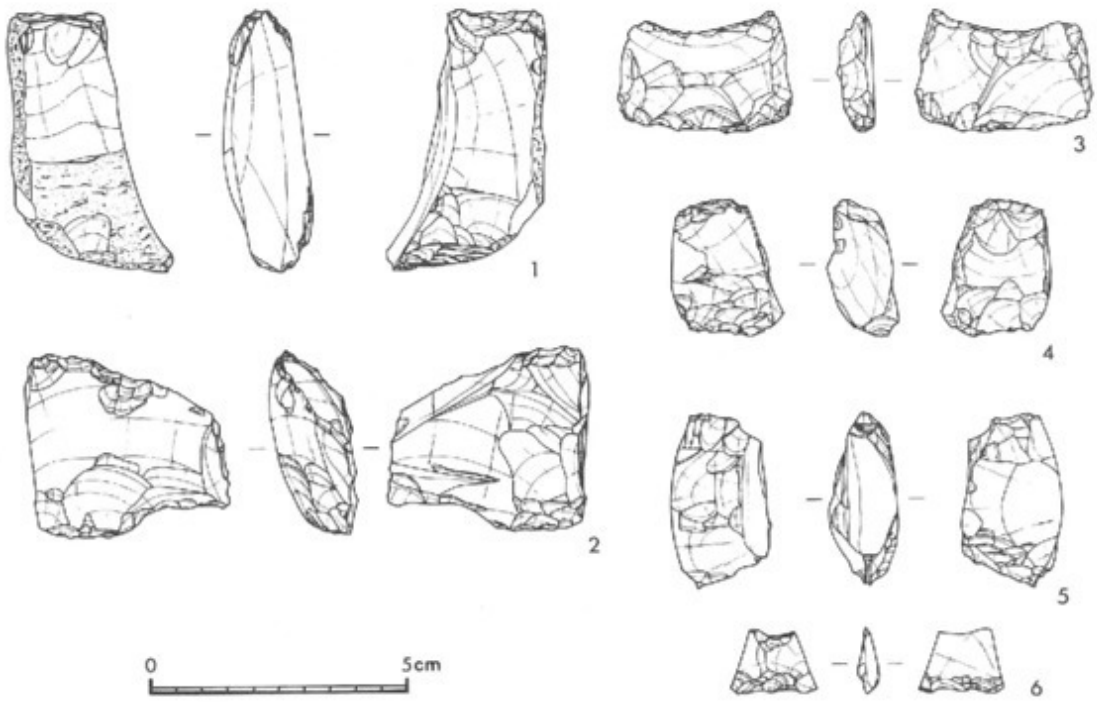


図27　楔形石器

D刃器　　大きさ，形態に統一性はなく，剥片の一辺あるいは二辺に調整を加え，刃部としている。

（1）は，刃部に相対する辺の一部に密接した階段状剥離がみられ，（2）は，湾曲する辺に調整を加え刃部としている。

写真28　刃　器

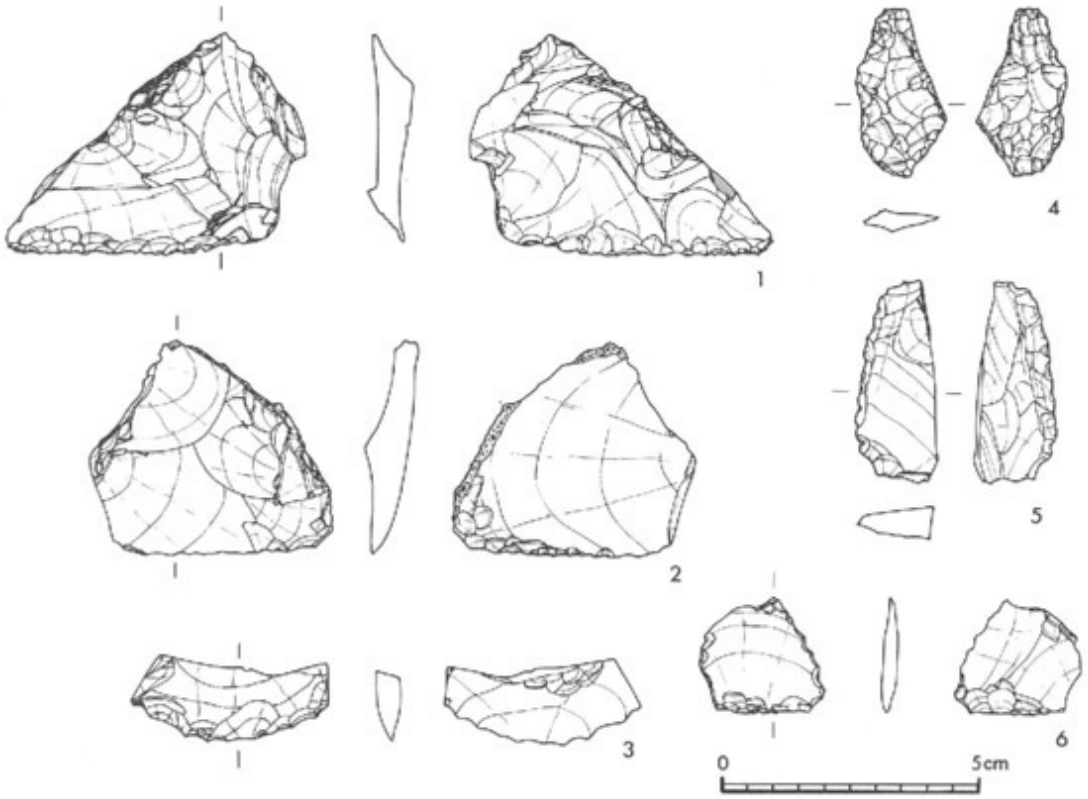


図28　刃　器

E石庖丁　　8点出土しているが，完形品は存在しない。いずれも背部が湾曲し刃部が直線的な直刃形の石庖丁である。また，刃部の研磨は，片側に大きくつけるもの（1・2・4・6・8）と，両側から同程度につけるもの（3・5）がある。後者は，SK01・02から出土したもので，第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式初頭に位置づけられ，前者はSD02・03あるいは包含層出土で時期

の限定はできない。

（3）は，背部に連続する剥離痕，側面に敲打痕が認められ，破損後の転用が推定される。

（4）は，幅5.9cm，厚さ1.1cmで大型の石庖丁であったと考えられる。

石種は1・6・7が流紋岩，3がホルンフェルス，4が流紋岩質溶結凝灰岩，5・8が砂岩である。

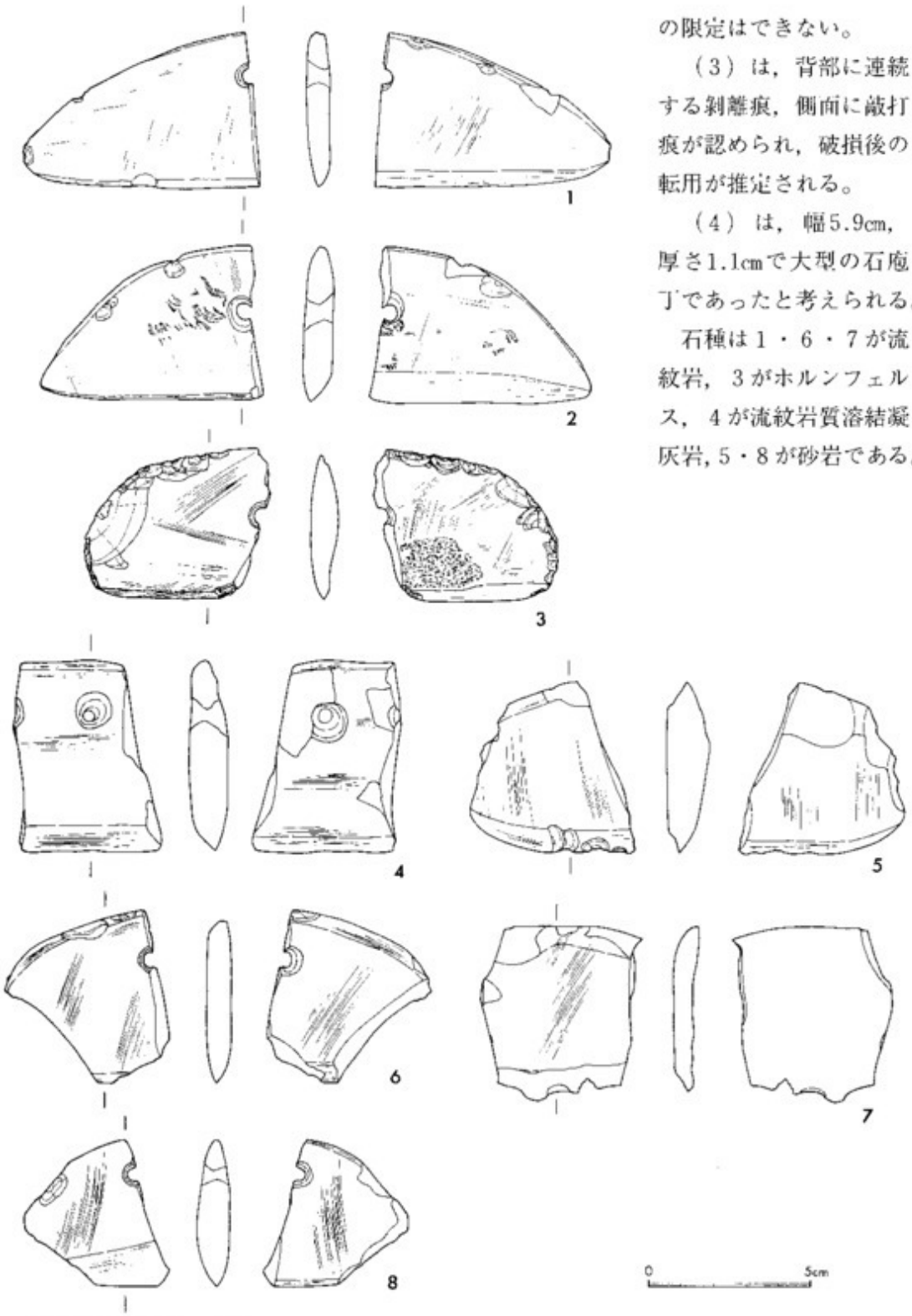


図29　石庖丁（1～8）

写真29　石庖丁

F石庖丁末製品　周縁部を余すところなく打ち欠き形態を整えている。両面は，細かい敲打によって凹凸を調整しているようで，中央付近には研磨痕がみられる。研磨が施され始めていることから，最終的な厚さは1.2～1.3cmと推定され，長さ15cm，最大幅7.5cmという大きさからも，大型の石庖丁と考えられる。SD 04上層からの出土であり，時期の限定はできない。

石種は流紋岩である。

写真30　石庖丁未製品

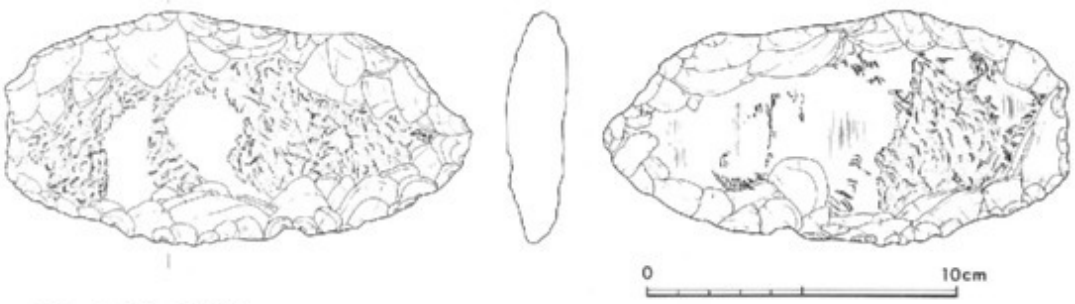


図30　石庖丁未製品

G石斧　石斧と考えられるものは3点のみの出土である。

（1）は，磨製石斧の頭頂部で，下部は欠損している。その形態から縄紋時代に属すると考えられるが，SD 04上層の出土で断定はできない。

（2）は，太形蛤刃石斧であるが，頭頂部および刃部は欠損している。各面に認められる敲打痕は，破損後に敲打石として転用された際のものと考えられる。SK 02出土で，第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式に属するものである。

（3）は，扁平片刃石斧と考えられるが断定はできない。側面と考えられる部分に連続する敲打痕が認められる。石種は流紋岩である。

図31　石　斧

H礫石器　その形態は様々であるが，ある部位に使用痕を有する礫をここでは礫石器として取り上げた。

（1）は両端を欠くが，本来は楕円柱状であったと推定される。大きな剝離が数ヶ所に認められるが，これは度重なる使用によって生じたものではなく，上下端を欠損した際に生じたものであろう。本来の使用痕は，各面の小さな窪みにみられる敲打痕と考えられる。

（2）は，扁平な棒状の礫の一端のみに剝離がみられるもので，片手で握り使用するのに都合のよい大きさである。

石種は，砂質片岩である。

（3）は，断面三角形の棒状の礫で，両端に剝離がみられる。その大きさ，形態から（2）と同様の使用方法が考えられる。

石種は，流紋岩である。

（4）は，断面方形に近く，その角あるいはそれに近い部位に度重なる敲打によって生じた細かい凹凸がみられる。その形態および使用痕は（2・3）とは全く異なることから，使用目的の違いが推定される。

（5）は，本来断面方形であったものが，片面剝離しているようである。両端には，密接した階段状剝離がみられる。

（6）は一見磨り石のようであるが，研磨された部位はなく，敲打による窪みが連続している。今回確認し得た礫石器中最大のものである。

（7）は小さな円礫で，その周縁に連続して顕著な敲打痕が認められる。

石種は，流紋岩である。

（8）は，大きさは異なるものの形態，使用痕とも（7）と全く同様である。

（1）はSK02出土で，第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式に属し，（2・6）はSD03出土で，第Ⅲ様式（古）の可能性が高く，（7）はピット出土で，第Ⅰ・Ⅱ様式のいずれかに属するが，他のものはSD02・04出土で，各時期の土器とともに流入したものと考えられるから，所属時期を限定することはできない。

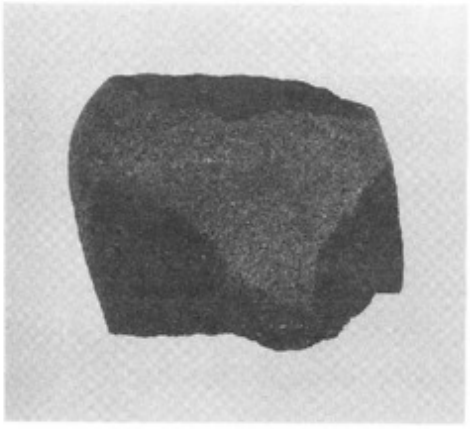


写真31　礫石器（1）

写真32　同（2）

写真33　同（3）

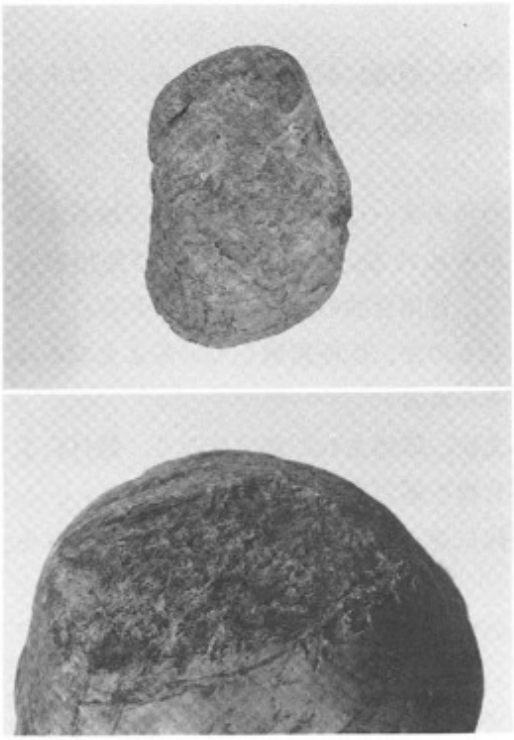


写真34　礫石器（4）

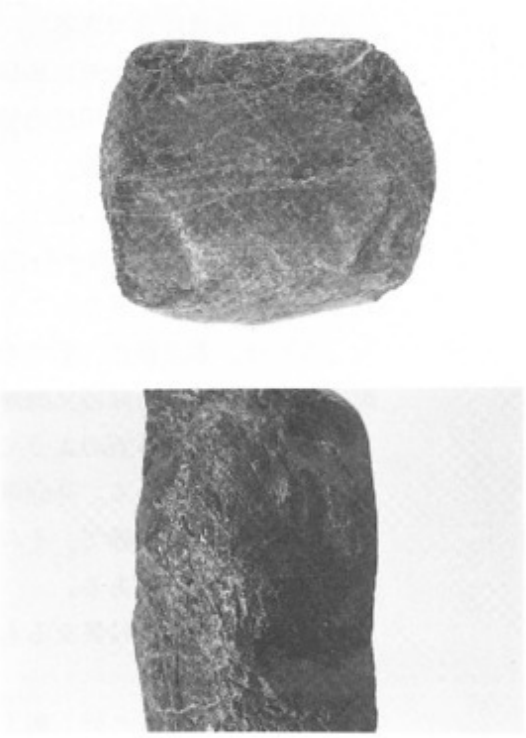


写真35　礫石器（5）

写真36　礫石器（7）

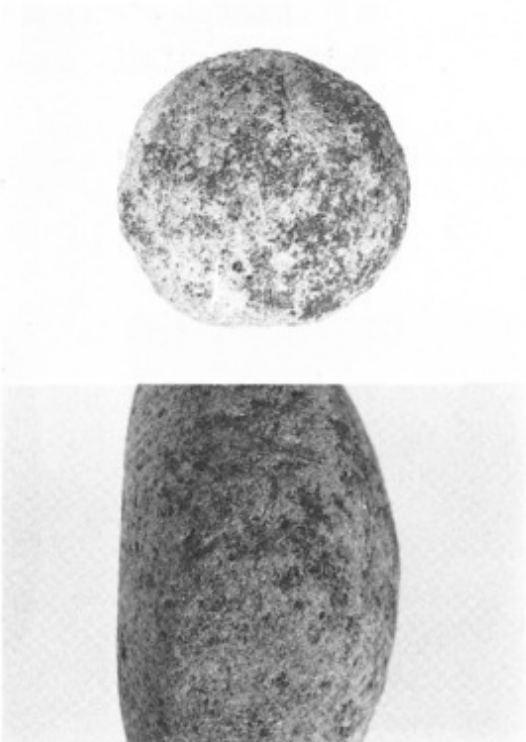


写真37　礫石器（8）

図32　礫石器（1～5）

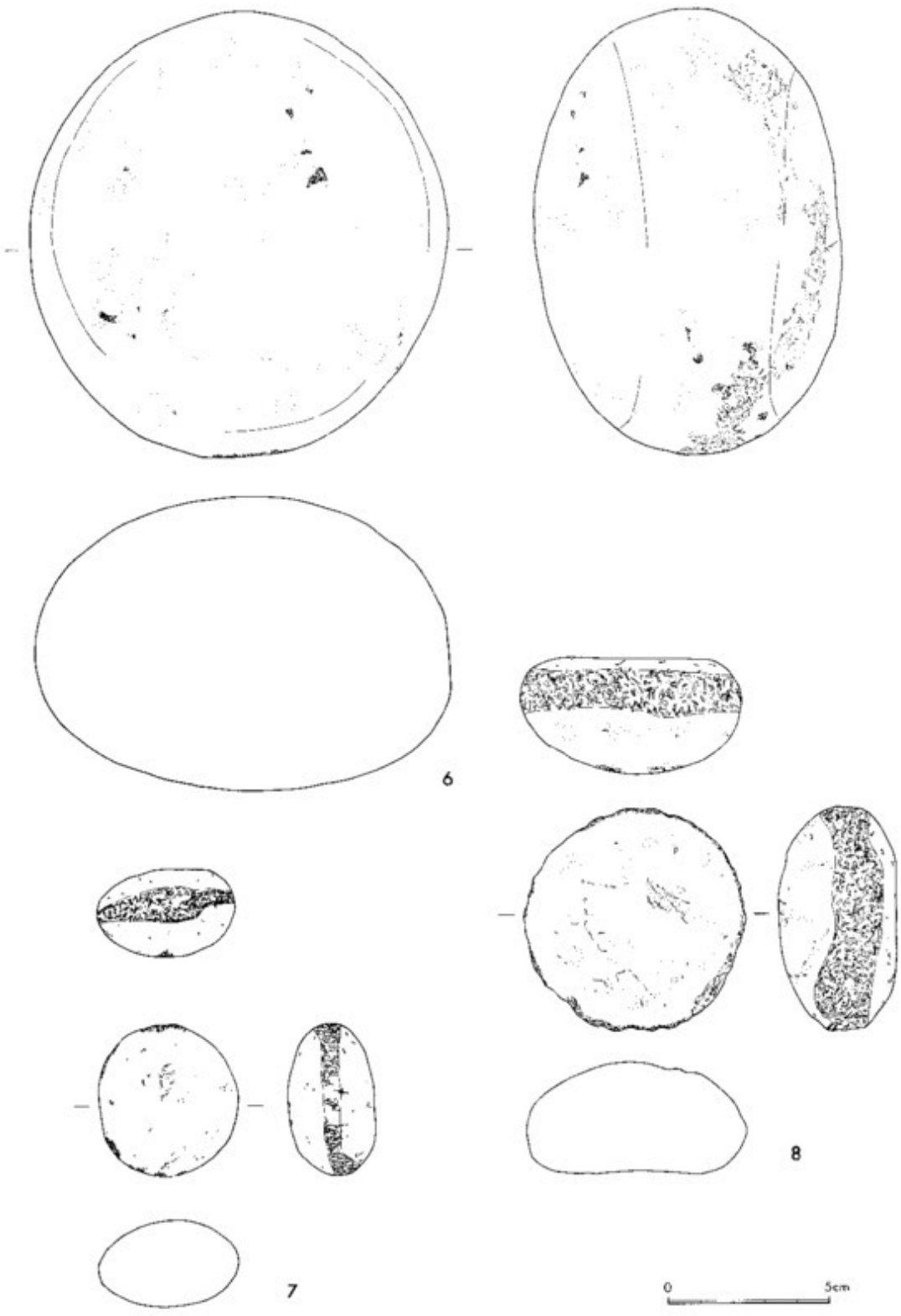


図33　礫石器（6～8）

I 砥石　砥石の出土は２点のみで，（１）は厚さ2.5cmと薄いが，幅が広く大型の荒砥である。使用痕を有する面は湾曲する。

（２）は，SX01Aの集石中に含まれていたもので，幅４～６mm，断面U字形の溝が認められる。この溝は平行するものと交わるものがみられ，金属製品の鋳型の一部とも考えたが，それに該当する製品はなく，玉磨きの砥石とした方がよいだろう。

石種は，（１・２）ともに砂岩である。

砥石（２）については，奈良国立文化財研究所　佐原真氏，岩永省三氏に御教示をいただいた。

写真38　砥石（２）

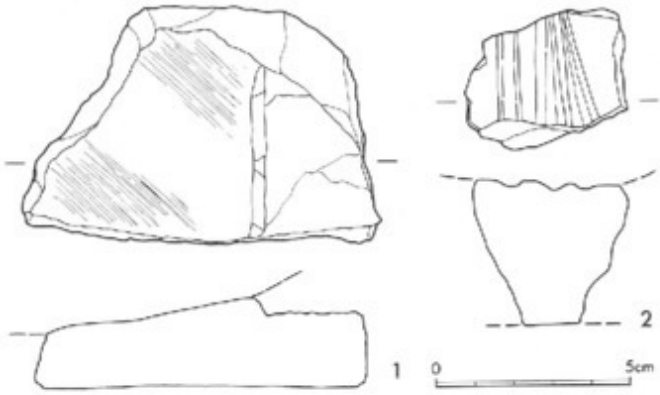


図34　砥石（１・２）

J 石錘　２点出土しており，いずれも両端を打ち欠き紐掛けの刳り込みを有する打ち欠き石錘と呼ばれるものである。

（１）は，紅簾片岩の扁平な礫を利用したもので，（２）は流紋岩質溶結凝灰岩の円礫の一部を利用したもので，片面は自然面である。

（１）はSK02，（２）はSX03出土で，時期は第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式にかけてのものである。一般的には，この形態の石錘は，縄紋時代に多いが，奈良時代に至るまで製作，使用されているようで，漁網錘ではなく薦編み用の錘と考えられている。

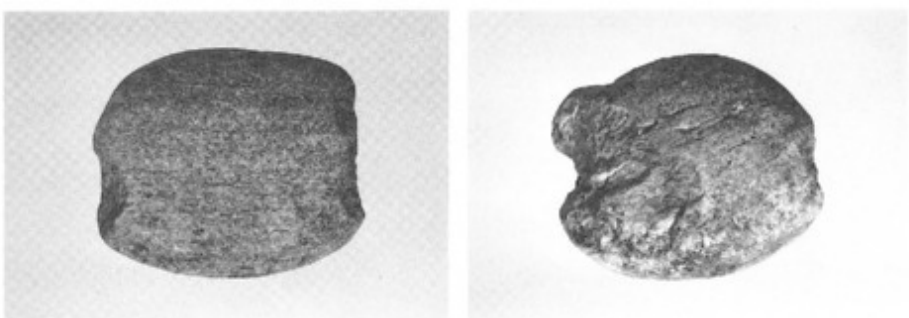


写真39
石錘（１・２）

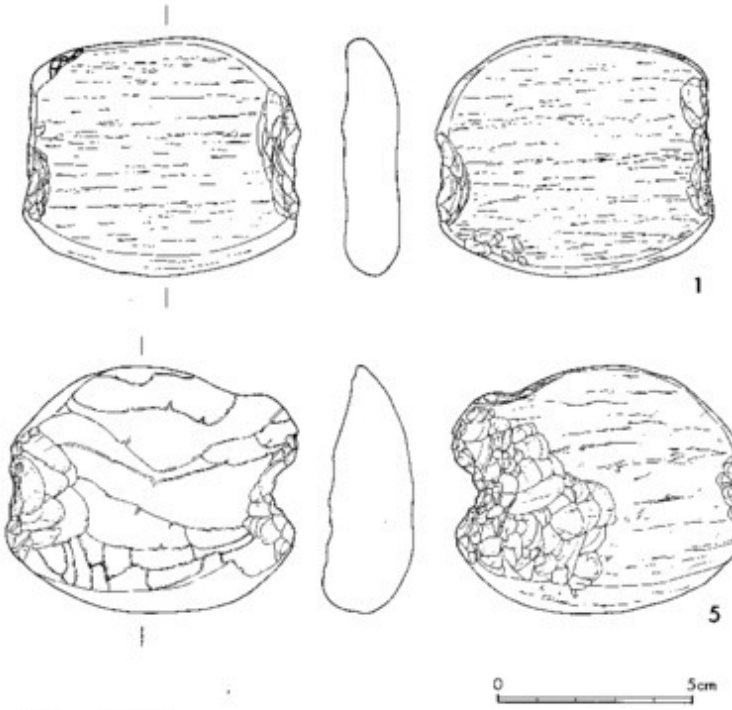


図35　石錘（1・2）

K管玉　　2点出土したが，いずれも破損している。1点は長さ13㎜，直径5㎜で，穿孔は両側からなされている。もう1点は，直径4～5㎜と推定できるが，長さは不明である。

2点ともSD03出土で，第Ⅲ様式(古)に属すると推定されるが，第Ⅰ・Ⅱ様式に属する可能性もある。

図36　管玉
（S＝⅔）

第Ⅳ章　出土石種について

八尾市立刑部小学校　奥田　尚

遺跡から出土した石材・礫の石種を肉眼で観察した。識別した石種は，黒雲母花崗岩，アプライト質黒雲母花崗岩，花崗閃緑岩，斑糲岩，花崗斑岩，玢岩，輝緑岩，流紋岩（石英斑岩），安山岩，玄武岩，流紋岩質溶結凝灰岩，砂岩，泥岩，チャート，頁岩，片岩，ホルンフェルス，正硅岩（？），碧玉，瑪瑙，石英，硅化木である。

石種の概要　　各石種について述べる。

黒雲母花崗岩　色は灰色，茶褐色である。角礫，亜角礫が多い。造岩鉱物は石英，長石，黒雲母である。石英は無色・褐色透明，粒径が２㎜～５㎜，量が多い。長石は灰白・灰色透明，粒径が２㎜～５㎜，量が多い。黒雲母は黒色板状，粒径が１㎜～25㎜，量がごくごく僅かである。

アプライト質黒雲母花崗岩　色は灰白色である。角礫，亜角礫が多い。造岩鉱物は石英，長石，黒雲母である。石英は無色・褐色透明，粒径が１㎜～５㎜，量が僅かである。長石は灰白，粒径が10㎜～25㎜，量が多い。黒雲母は黒色，褐色，粒径が１㎜～1.5㎜，量が僅かである。

花崗閃緑岩　色は灰色である。角礫，亜角礫が多い。造岩鉱物は石英，長石，黒雲母，角閃石である。石英は無色透明，粒径が１㎜～２㎜，量が僅かである。長石は白色，粒径が１㎜～３㎜，量が多い。黒雲母は褐色，粒径が１㎜～３㎜，量が僅かである。角閃石は黒色，短柱状，粒径が１㎜～８㎜，量がごくごく僅かである。

斑糲岩　色は暗緑灰色である。造岩鉱物は長石，角閃石，輝石である。長石は白色透明，粒径が0.5㎜～１㎜，量が中である。角閃石は黒色，粒径が0.5㎜～１㎜，量が多い。輝石は黒色・茶褐色透明，粒径が0.5㎜～0.7㎜，量が中である。

花崗斑岩　色は灰色である。造岩鉱物は石英，長石，黒雲母である。石英は無色透明，粒径が0.5㎜～１㎜，量が僅かである。長石は灰白色，粒径が10㎜以下，量が中である。黒雲母は黒色板状，粒径が0.5㎜～１㎜，量が僅かである。石基は灰色，やや粒状である。

玢　岩　色は淡灰緑色である。造岩鉱物は石英，長石，角閃石である。石英は無色透明，粒径が0.2㎜～0.5㎜，量がごくごく僅かである。長石は白色透明，粒径が0.2㎜～１㎜，量が中である。角閃石は黒色，粒径が0.2㎜～1.5㎜，

量が中である。石基は淡灰緑色，ガラス質である。

輝緑岩　色は淡緑色である。造岩鉱物は長石，輝石である。長石は無色透明，針状で，粒径が0.5㎜以下，量が中である。輝石は暗緑透明，粒径が１㎜以下，量が中である。石基は淡緑色，ややガラス質である。

流紋岩　石英の斑晶が顕著で，石基がガラス質である場合のものと，造岩鉱物が細粒で，石基がやや粒状な岩脈的な岩相を示す場合のものとがある。前者は亜円礫，円礫が多く，後者は角礫，亜角礫が多い。

前者の流紋岩には，石英，長石の斑晶がみられる。石英は無色透明，粒径が３㎜以下，量が中以下である。長石は白色，粒径が２㎜以下，量が僅かである。石基はガラス質で固い。

後者の流紋岩には，石英，長石，黒雲母の斑晶がみられる。石英は無色透明，粒径が１㎜以下，量が僅かである。長石は白色透明，粒径が0.2㎜～１㎜，量がごく僅かである。黒雲母は黒色・茶褐色板状，粒径が0.5㎜以下，量がごく僅かである。石基はややガラス質である。

安山岩　色は灰白色である。この色は風化したための色であろう。礫形は亜角である。造岩鉱物は長石，角閃石である。長石は白色，粒径が0.5㎜～1.5㎜，量がごく僅かである。角閃石は黒色柱状，粒径が３㎜～６㎜，量が中である。石基は白色，ややガラス質である。

玄武岩　色は暗い緑色である。造岩鉱物は長石，輝石である。長石は白色透明，粒径が0.5㎜～１㎜，量が僅かである。輝石は黒色・茶褐色，粒径が0.5㎜～２㎜，量が中である。石基は緑色，ガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩　色は淡青灰色である。溶結が顕著である。灰色のガラス流紋岩礫が含まれる場合，ガラス質である場合もある。造岩鉱物は石英，長石である。石英は無色透明，粒径が0.2㎜～１㎜，量がごく僅かである。長石は淡赤色，灰白色で，粒径が0.2㎜～1.5㎜，量が僅かである。基質は淡青灰色，ガラス質である。孔がある場合もある。孔径は10㎜に及ぶ場合もある。

砂　岩　色は灰色，灰白色である。構成粒はチャート，火山ガラス，石英，長石，黒雲母である。チャートは灰色，黒色，亜角礫で，粒径が0.5㎜～２㎜，量がごくごく僅かである。石英は無色透明，角礫で，粒径が0.5㎜～0.7㎜，量が中である。長石は白色，白色透明，角礫で，粒径が0.5㎜～0.7㎜，量が僅かである。黒雲母は黒色・金色で，粒径が0.5㎜～0.8㎜，量が僅かである。礫によっては火山ガラスや黒雲母が認められなく凝灰岩質になる場合もある。

泥　岩　色は赤色である。

チャート　色は灰色，暗灰色，黒色，淡赤色等様々である。礫形は亜角礫・亜円礫が多く，円礫は僅かである。

頁　岩　色は黒色である。礫形は亜角・亜円である。弱い剝離面がある。

片　岩　泥質片岩，石英片岩，紅簾石片岩等である。主として円礫である。いずれの片岩も片理が顕著である。泥質片岩は黒色，石英片岩は白色である。紅簾石片岩は淡紅色を示し，亜円礫も含まれる。紅簾石が僅かに含まれる。

ホルンフェルス　色は黒色である。細粒砂からなる。片理が僅かに認められる。

正斑岩(?)　色は灰色である。円礫である。

碧　玉　濃赤色の破片である。

瑪　瑙　赤色や透明である。加熱により発色したと考えられる。

石　英　白色透明の破片である。

硅化木　色は白色，灰白色の破片である。年輪が観察できる。広葉樹が多く，針葉樹が僅かである。

石種の産出地　石種の岩相を比較することにより，遺跡の近地点で，同質の岩石・石材を求めてみる。

遺跡が位置する付近には段丘が発達し，北側には花崗岩類を主とする六甲山系の山並が東西に続く。この花崗岩類中には斑岩や玢岩の岩脈がみられる。六甲山地の北側には新第三紀中新世の神戸層群が分布する。遺跡から出土している黒雲母花崗岩，花崗閃緑岩は六甲山地に分布する黒雲母花崗岩，花崗閃緑岩の岩相の一部に酷似する。礫形が角・亜角であり，表面が滑らかであることから，山地から流出した礫である。

流紋岩・玢岩は六甲山地に分布する花崗岩類を貫く斑岩や玢岩の岩脈の岩相の一部に酷似する。礫形が角・亜角が多いことから近距離からの流出礫である。

流紋岩質溶結凝灰岩は鉱物粒が細粒で，溶結が顕著であること等から，姫路から三田方面にかけて広く分布する姫路酸性岩の岩相の一部に酷似する。礫形が亜角・亜円を主とし，円も見られることから，長距離流出した礫であると考えられる。

砂岩は凝灰岩質砂岩が多い。神戸層群中の砂岩の岩相の一部に酷似する。

チャートは亜角礫・亜円礫であり，段丘礫層中にも含まれる。

片岩は片理が顕著で，紅簾石片岩等であることから，三波川帯の点紋片岩と無点紋片岩の境界域に分布する紅簾石片岩分布域の岩相に酷似する。紅簾石片岩は和歌山市東部や吉野川流域に点在することから和歌山市の紀ノ川か吉野川の川原石であると考えられる。

碧玉は豊岡市大師山遺跡等にも見られる碧玉に酷似し，養父郡の西部付近が採取地と推定される。

硅化木は神戸層群中に多く見られる。角が丸くなっていることから，川原石である。

岩相，礫形等をもとに採取地を求めれば，黒雲母花崗岩，花崗閃緑岩，花崗斑岩，玢岩，流紋岩，チャート等は遺跡の場所又はその付近の礫である。砂岩，硅化木は神戸層群分布地から流出する川の川原石であると考えられる。片岩，碧玉，瑪瑙は遠方から運ばれたものであろう。

石材の構成からみれば，焼成した瑪瑙，紅簾石片岩，筋砥石が出土していることから，玉造りをした遺跡の可能性が高い。

表3　遺構出土の礫種

遺構 / 石種	SX01A	SD02C 下層	SD02C 上層	SD03	SD03 最下層	SD03A 下層	SD03B 上層
黒雲母花崗岩	40	2	4	25	15	29	2
アプライト質黒雲母花崗岩	19	1		3	4		2
花崗閃緑岩	21	2	2	9	7	7	1
玢岩		1					
流紋岩	36	25	21	17	52	38	3
安山岩					1	1	
流紋岩質溶結凝灰岩	1	16	21	2	14	22	2
砂岩	2		1	1	7	6	
チャート	13	38	31	20	66	86	18
頁岩			2				
片岩	1	2	1	1	5	7	3
正硅岩(?)		1					
石英	1	1		2	8	1	
硅化木					1		
合計	134	89	83	80	180	187	31

第Ⅴ章　自然遺物

名古屋大学教授　渡辺　誠

（1）はじめに

このたび神戸市教育委員会より調査の機会を与えられた，同市楠・荒田町遺跡第3次調査（1986年度）出土の自然遺物は，弥生時代中期Ⅲ様式期の溝（SD 03）出土の動物遺体と，縄文時代後期後葉宮滝式期の貯蔵穴（SK 09）出土の植物遺体である。それらの検討結果は，以下のとおりである。

（2）動物遺体

これらは弥生時代中期Ⅲ様式期の溝（SD 03）の最下層より出土している。ごく少量のイノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck の，臼歯のほうろう質部分の破片である（写真40－1）。

すでに水稲栽培の発達している段階であり，食料としての価値のほかに，害獣として駆除されたり，または祭祀において犠牲にされた可能性も考えられる。市内桜ヶ丘遺跡出土銅鐸には，猪犬で猪を追い立てている狩猟の様子が描かれていて，有名である。

（3）植物遺体

これらは縄文時代後期後葉宮滝式期の土壙（SK 09）の底面に，土器片などとともに出土している。その内容は堅果類の種皮と子葉などであり，確認された種名は次のとおりであり，その部位・数量などは表4・5，および写真40に示すとおりである。

1．ぶな科イチイガシ　　*Quercus gilva* Blume

2．ぶな科コナラ属　　Quercus sp.

3．とちのき科トチノキ　*Aesclus trubinata* Blume

1と2はいわゆるドングリ類である。これらは子葉のみになると，特徴的な縦の溝のあるイチイガシを除いては識別が不可能である。しかしいずれも楕円形を呈しており，筆者の分類のB・C類，すなわちナラ類かカシ類と推定される。そしてそれらはイチイガシのみが例外でアク抜きをしないと食用化することはできない種類である（表6）。

なお11点のみ確認された花被は，すべてイチイガシのそれである（写真40－15）。

イチイガシを含むカシ類は，西南日本の照葉樹林帯の代表的な樹木である。これに対しナラ類は，東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。同じドングリ類の仲間であっても，その主要な分布域が異なるばかりでなく，その食用化のためのアク抜きの方法も異なっている。

アク抜きの方法は，粒のままか，製粉してから行うかによっても異なるが，カシ類はいず

れにしても水さらしのみでよい。しかしナラ類の場合は，製粉すれば水さらしのみでよいが，粒のままの場合には丹念な煮沸と水さらしの繰り返しが必要である。もっともイチイガシのみは先に記したように，カシ類中唯一アク抜きをしないで食用化できる（渡辺1987ｂ）。

アクの成分が水溶性のタンニンであるナラ類やカシ類に対し，トチのアクは非水溶性のサポニンやアロインであり，アルカリ（灰）で中和して除去しなければならない。そしてこのトチのアク抜きは別格に難しいと意識されている。このような技術上の問題があるためか，ドングリ類のアク抜きは縄文時代の開始期までさかのぼるのに対し（渡辺1987ａ），トチのアク抜きは縄文時代中期までしかさかのぼって考えることができない（渡辺1989）。

トチノキはナラ類とともに，東北日本の落葉樹林帯を代表する樹木である。そしてそのアク抜きも，東北地方北部において縄文中期初頭に習得され，同後期に西南日本へも南下してくるのである。この西南日本への縄文後期における東北日本からの文化的影響はきわめて大きく，抜歯の風習をはじめとして，磨消縄文土器，打製石斧，釣針，切目石錘，土偶，石棒，注口土器等々が，あたかもセットをなすがごとき状態で南下してきているのである（渡辺1968，同編1975）。このような東北日本の文化的高揚の背景として，トチの実の食用化による相対的な食料の安定は，もっと高く評価されるべきであろう。

本遺跡においてトチは，その種皮がごくわずかに検出されたにすぎないが，その意義はきわめて大きい。しかし現在トチノキは神戸市内にはほとんどみられず，まして食されてはいない。こうした分布上の問題について，項を改めて検討することにしよう。

なお堅果類の細片のなかから，トチの種皮を識別し得る根拠は発芽孔の確認であり，その部分の破片が6点検出されたのである（写真40－17）。

（4）兵庫県下のトチの実食の分布

現代まで伝わっているトチの実の食べ方は，ほとんどの場合がトチ餅である。しかしこれはモチゴメを必要とし，縄文時代にはあり得ない弥生時代以後の食べ方である。ドングリ類と同じような，粉だけをとる縄文的な技術と食べ方はトチのコザワシとよばれ，ほとんど消滅しかかった状態で中部地方の山村に残っているにすぎない（渡辺1989）。

兵庫県下のトチの実食も，トチ餅のみである。しかもその食習俗を伝えているのは，北部の但馬地方に限られている（図37）。トチノキの天然分布よりもその範囲はせまい。本遺跡の位置する摂津南部には，トチノキ自体の分布もほとんど認められない。トチノキはいったん伐採されると回復は困難であり，近・現代の分布から考察を加えることは，この木に関してはきわめて危険である。特に開発の進んでいる太平洋側に関しては，その感が強い。したがって縄文時代の食生活を検討する上で，兵庫県下の縄文遺跡としてはじめてトチの検出された本遺跡資料は，先に記した文化史的背景とともに，その果たす役割はきわめて大きいといえるのである。

類例として古くより有名な岡山県山陽町南方前池遺跡がある。この遺跡の縄文晩期の貯蔵

穴からもドングリ類とともにトチの実が出土している（南方前池遺跡調査団1956）。そして岡山県下ではすでにトチの実食は消滅している状態である。自然科学者との共同研究によって，トチノキの分布の変遷過程を木目細かに明らかにしていきたいものである。

（5）穴貯蔵の意義

最後に貯蔵穴に堅果類を貯蔵する意義について記すことにする。穴貯蔵の典型的な例は低湿地の貯蔵穴にみられるように，冬期の一時的な生貯蔵のためである。長期保存の場合は，天日でよく乾かした後屋根裏などに貯蔵するのであるが，それでは皮むきやアク抜きの作業が面倒になるため，秋に採集してその冬に食べる分だけは貯蔵穴で貯蔵するのである。

従来それがアク抜きのためとして，しばしば誤解されている。しかしその程度のことではアク抜きにならないし，推定の根拠となるような民俗学的事例も皆無である。まして低湿地ではない本遺跡例のような貯蔵穴をも含めた，統一的な理解は不可能である。

こうした誤解の背景には，肝心なドングリ類の種の同定が行われていないことが指摘される。そして調査結果の多くは，本遺跡でも検出されているアク抜きの不必要なイチイガシの貯蔵なのである（渡辺1988）。また水さらしではアク抜きできないトチの穴貯蔵の多いことも無視できないことである。

したがって本貯蔵穴も，冬期の一時的な生貯蔵のために利用されていたとみるべきである。それが何度も繰り返された結果，穴の底にわずかに取り残されたアク抜き不要のイチイガシ，水さらしのみかあるいは加熱処理を加えてアク抜きするコナラ属，さらにアク抜きの難しいトチなどが，混在して検出されることになったのであろう。そしてゴミ穴化した時点で土器片などが堆積したのであり，厳密には土器型式は貯蔵穴利用の最終時点のみを示していると理解すべきであろう。

参考文献

堀田　満，1975：野山の木．Ⅱ。保育社・大阪。

南方前池遺跡調査団，1956：岡山県山陽町南方前池遺跡－縄文式末期の貯蔵庫発見。私たちの考古学，7．2～7頁。岡山。

渡辺　誠，1968：九州地方における抜歯の風習。帝塚山考古学，1．1～7頁。奈良。

――，1987a：日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源。名古屋大学文学部研究論集，史学33．1～15頁。名古屋。

――，1987b：縄文時代の植物質食料―ドングリ類。考古学ジャーナル，279．270～272頁。東京。

――，1988：縄文時代食用植物研究上の意義。曽畑．270～272頁。熊本。

――，1989：トチのコザワシ。名古屋大学文学部研究論集，史学35。1～25頁。名古屋。

――編，1975：京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書。舞鶴。

謝　辞

最後に，調査の機会を与えられ種々ご教示下さった神戸市教育委員会の丸山　潔氏，資料整理に御協力下さった宮市博物館の田中禎子氏に対し，衷心より謝意を表する次第である。

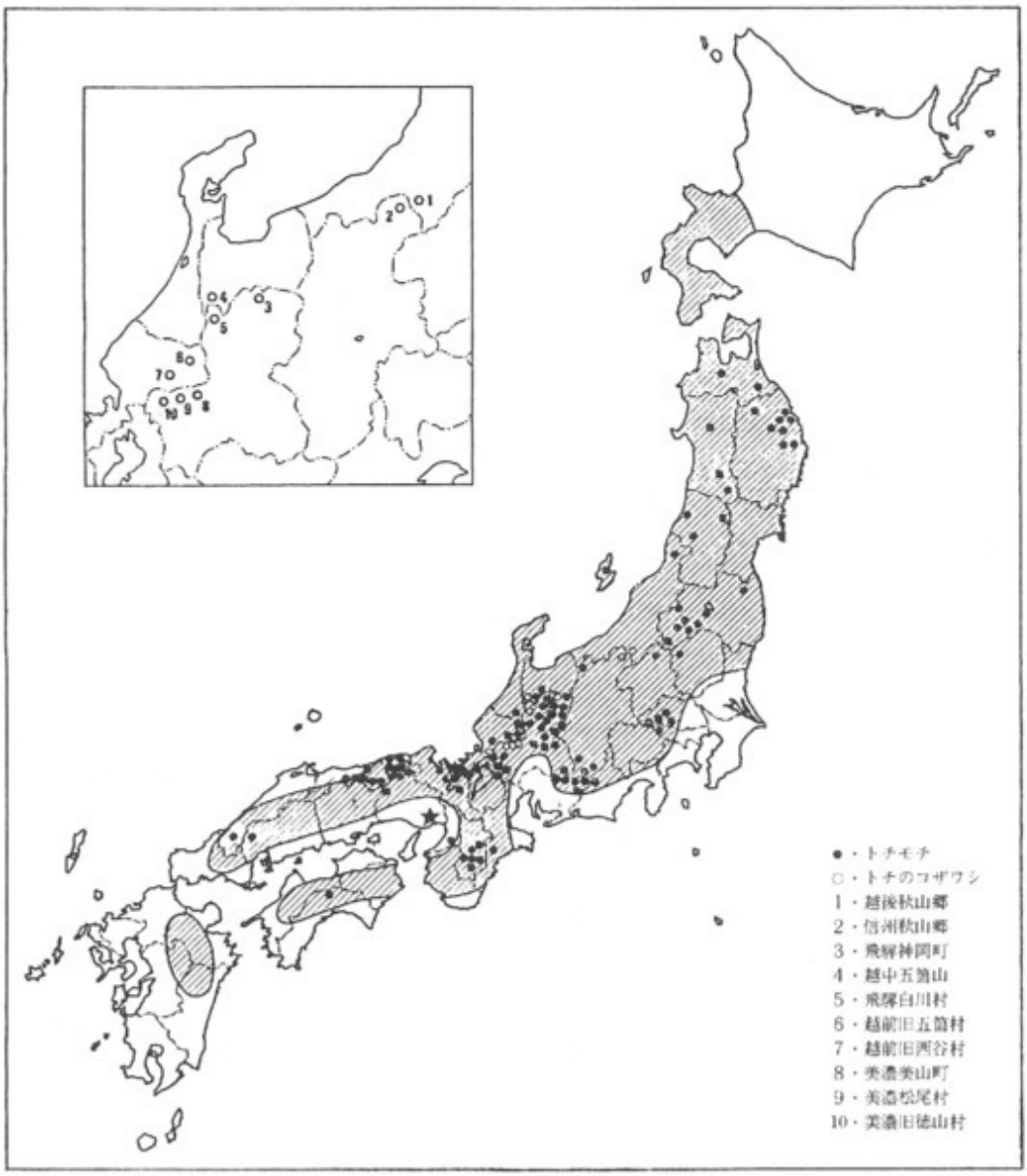


図37　トチの分布（堀田 1975）とその実を食した地域（19世紀～20世紀，１点１市町村）
（★は本遺跡）

表4　植物遺体の種・部位別数量表

種　　名	部　位	数　量	写真40
イチイガシ	子葉（半） 子葉（破片） 花被部破片	5 0.05 g 11（0.10 g）	2～6 15
コナラ属	子葉（双） 子葉（半） 子葉（破片） へそ へそ破片	3 5 0.44 g 56（0.41 g） 35（0.26 g）	7～9 10－14 16
トチノキ	種皮（破片）	6（0.28 g）	17
コナラ属またはトチノキ	種皮（破片）	45.20 g	18

表5　ドングリ類計測値一覧表

（単位：cm，g）

番号	種　名	残存状態	長　さ	幅	長さ／幅	重　量	写真40
1	イチイガシ	半	1.02	0.70	1.46	0.08	2
2	〃	〃	0.87	0.62	1.40	0.06	3
3	〃	〃	0.82	0.69	1.19	0.06	4
4	〃	〃	0.82	0.64	1.28	0.07	5
5	〃	〃	0.80	0.60	1.33	0.05	6
	半　均		0.86	0.65	1.33		
6	コナラ属	双	1.13	0.82	1.38	0.20	7
7	〃	〃	0.72	0.64	1.13	0.06	8
8	〃	〃	0.57	0.51	1.12	0.05	9
9	〃	半	1.12	0.74	1.53	0.10	10
10	〃	〃	1.07	0.73	1.30	0.06	11
11	〃	〃	1.05	0.82	1.28	0.10	12
12	〃	〃	0.96	0.73	1.32	0.07	13
13	〃	〃	0.92	0.73	1.26	0.08	14
	平　均		0.94	0.72	1.29		

表6　ドングリ類の分類

民族分類	属		種（出土例のみ）	森林帯
A．クヌギ類 製粉または加熱処理＋水さらし	コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 （東北日本） （韓　国）
B．ナラ類 製粉または加熱処理＋水さらし			ミズナラ コナラ	
C．カシ類 水さらしのみ		アカガシ亜属	アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 （西南日本） （韓国南海岸）
D．シイ類など			イチイガシ ツブラジイ・スタジイ・マテバシイ	
	シイノキ属			
	マテバシイ属			

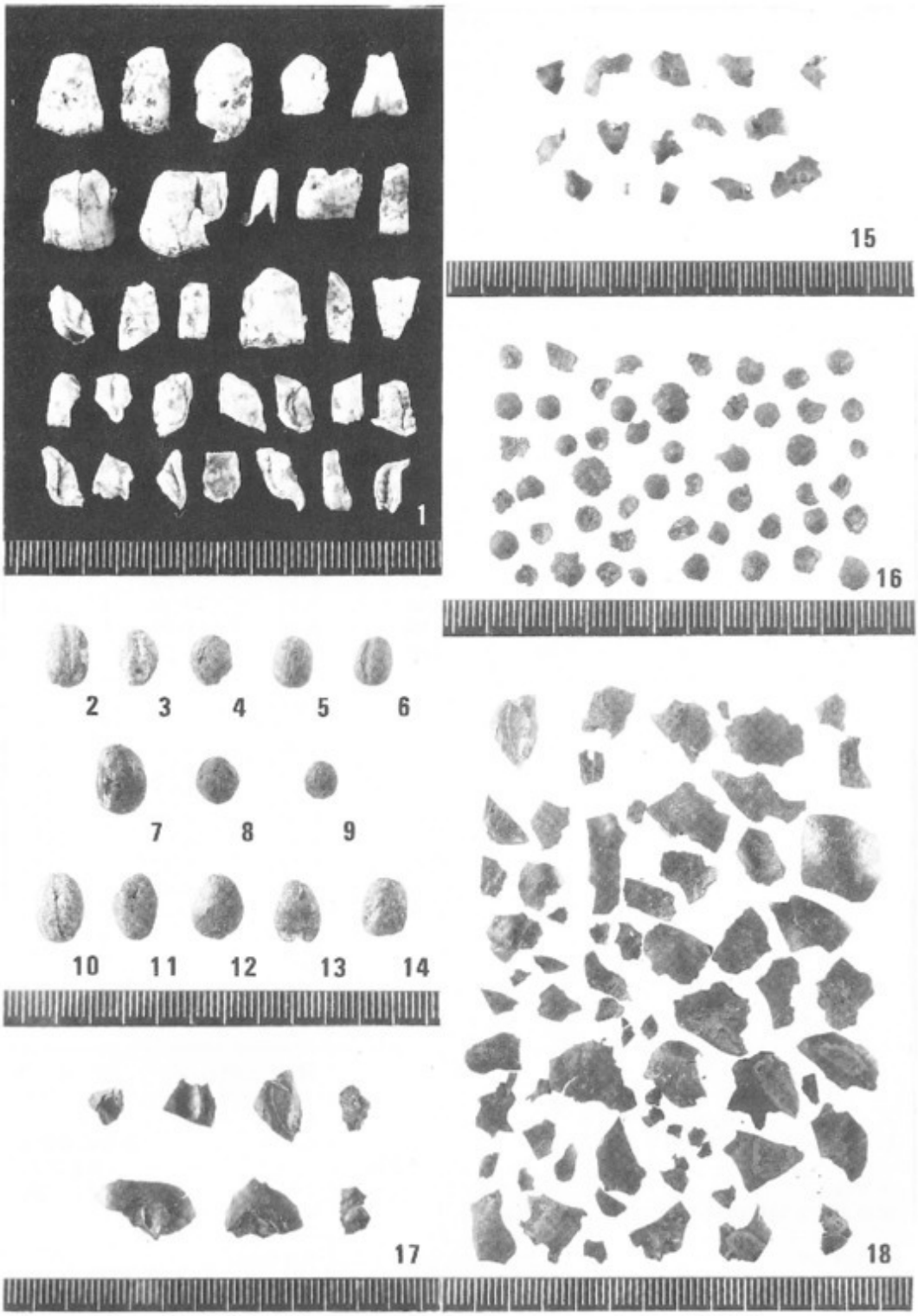


写真40　自然遺物(実大)　1：イノシシ臼歯，2～6：イチイガシ子葉，
7～14：コナラ属子葉，15：イチイガシ花被部破片，16：コナラ属へそ，
17：トチノキ種皮破片，18：コナラ属またはトチノキ種皮破片．

第Ⅵ章　ま　と　め

本章は，今回の調査および第１・２次調査[注1]の成果を合わせ考え，当遺跡の遺構，遺物の状況についてまとめるとともに，若干の考察を加えてみたい。

Ⅰ遺跡の変遷

今日までの調査で明らかになった各時代・時期の遺構から，当遺跡の変遷をある程度復元することが可能である。

縄文時代後期の遺構は，今回初めて確認したが，東500ｍの宇治川南遺跡[注2]や北300ｍの神戸大学附属病院内遺跡では多くの土器が出土している。この時期は，広範な遺跡の広がりが考えられるが，遺構は散漫だったようである。

弥生時代第Ⅰ様式新から第Ⅱ様式時は，貯蔵穴群の地域である。第１・２次調査を合わせると40数基確認している。他に同時期の顕著な遺構は存在しない。

第Ⅲ様式古段階には居住域になる。竪穴住居址３棟と幅広く深い溝が３条出土している。溝については，方形周溝墓の可能性が高いと考えたが，竪穴住居址と接近しすぎている点や，当該時期の周溝墓は連接することが常であるが，散漫であることから断定できない。

第Ⅳ様式段階になると，墓地域になる。第１次調査で検出した３基の木棺墓，そして今回の方形周溝墓である。遺構面上の厚い包含層中にも第Ⅳ様式の土器は少なく，居住域とは離れていたと考えられる。

第Ⅴ様式の遺物・遺構はない，第１次調査SB04を第Ⅴ様式としたが，庄内式併行期であろう。第Ⅴ様式の無人化は，北1300ｍに位置する祇園神社周辺の丘陵上に存在すると予想される後期の高地性集落と深い関わりが考えられる。

そして再び遺構が出現するのは，庄内式併行期であるが，その後は６世紀初頭の竪穴住居址，10世紀，12世紀の掘立柱建物が見られる程度である。12世紀の遺構については，神大附属病院内やその南約400ｍで二重の大溝が発見されていることから，平氏関連の遺構である可能性も考えられる。

第１～３次調査が接近した地点にあるため以上のような結果が導かれたと考えられる。したがって，一遺跡内のある部分の変遷である。しかし，このことは，居住域，墓域等が時期によりその場所を変えていることの表われであり，一つの遺跡というものの規模を考える上で重要なことであろ

う。

今後，調査によって，各時期の未確認の居住域，墓域そして水田域も明らかにされ，遺跡の規模が確定されるであろう。

Ⅱ方形周溝墓　調査時の誤認から埋葬施設の詳細を確認することができなかったが，方形周溝墓であることには間違いないであろう。その溝の形状は，コーナ部付近で浅く，狭くなり，盛土に合理的な周溝掘削方法のパターンである。[注3] 盛土部分の検出はできなかったが，SD 02・04と同規模に対辺が掘削されていたとし，かつ現検出面から，あるいはそれに近い高さから掘削がなされていたとすると，35㎥前後の土量が得られたと推定される。溝の掘削土量と盛土の間にはほとんど誤差がないとし，[注4] これを推定8×12mの周溝墓上に台形に盛り上げると，40cm前後の高さが得られる。周溝底からの高さは，1～1.2m程度である。

次に周溝内の土器であるが，これは各溝の両端，すなわちコーナー部分に各1点ずつ据え置かれていた。瓜生堂2号方形周溝墓などもコーナー部を意識しているようであるが，[注5] 一般的には溝底に点々と，あるいは密集して置かれるようである。

また，本来土器の置かれる位置に三角形の花崗岩が置かれていた。この花崗岩は，全く加工された痕跡はないが，整った三角形である。これは，穿孔し仮器化された土器の代替品と考えられる。したがって，周溝内で出土するものは，土器・石器・木製品のみならず，自然石の位置にも充分留意する必要があろう。

出土土器は，縄紋時代後期，弥生時代前期・中期に属するものである。各時期毎に若干の考察を加えてみたい。

Ⅲ縄紋土器　SK 09出土のものと方形周溝墓の溝に流入した2点のみである。

SK 09は，平面円形の土坑で，その底面に密着する状態で土器が出土している。浅鉢，深鉢，注口土器がみられ，また精製土器，粗製土器の二通りがみられる。精製土器には，主として凹線紋が施され，縄文は認められない。いわゆる凹線紋土器群に属するもので，凹み底，貝殻圧痕も特徴的である。近畿地方における凹線紋土器群は，元住吉山Ⅱ式および宮滝式に認められるが，当遺跡出土土器がいずれの時期に属するか，丹治康明氏の分類[注6]ににしたがい検討をしてみたい。

凹線紋　まず，凹線紋については三種に分類しているが，そのうちの幅広で，稜は明瞭に残り，断面形が「レ」の字状であるとするⅡ種にあたる。これは，元住吉山Ⅱ式に出現し，宮滝式に盛用するという。

貝殻圧痕紋　次に，貝殻による圧痕紋であるが，これはただ単に押しつけて施紋するものと，回転施紋する扇状圧痕に分類でき，前者は元住吉山Ⅱ式に，後者は宮滝式に盛用するという。ここでは，図７－１にのみ貝殻圧痕紋がみられ，これらはわずかに回転させており，４分の１周部分にわずかに残る１ヶ所では明確に回転させている。

口縁部　次に口縁端部の形態であるが，元住吉山Ⅱ式では平坦で，宮滝式では丸みを帯びるという。ここでみられる口縁端部は，平坦なものと，なでにより面取りされて丸みを帯びるものがある。

以上から，SK 09出土土器は，宮滝式に属すると考えてよいであろう。

次に図７－１の鉢であるが，これは図７－２の注口部と出土状況および双方の胎土からみて，同一個体である可能性が高い。この土器に特徴的なのは，凹線紋，貝殻圧痕紋に加え，口縁部が波状をなす点である。この波状口縁は，最も高い部分から４分の１周で最も低い部分に至り，それから同様の形態で２分の１周すると推定される。したがって，最も高い部分が相対する２ヶ所にあり，最も低い部分も相対する２ヶ所に存在する。また，その間に，小さい「山」と「谷」が５ヶ所存在する。こういった波状口縁は，近畿地方の凹線紋土器群中には認められず，西日本地域においてもその例はないようである。[注7] そこで，その祖形を東および北方地域に求めたが見い出し得なかった。

方形周溝墓SD 02出土の２点についてであるが，写真12－左は鉢の口縁部で，断面形「レ」の字状の凹線紋が２条施され，口縁部端面が丸く調整されているところから，宮滝式と考えられる。

写真12－右は，縄紋の地紋を施し，縦横の沈線で方形の区画を設ける。破片の下端は，縄紋を磨り消している。横方向の沈線のうち，１本には末端刺突紋が認められる。これらの特徴から，一乗寺Ｋ Ⅰ式に平行する時期のものと考えられるが，沈線を縦横に配し方形の区画を設ける例はないようである。これもまた，その類例を見い出し得ない資料である。

末端刺突紋

Ⅳ弥生土器　今回の調査で出土した弥生土器のうち，第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式に属するものは，破片数にすれば多いが，遺構自体に伴うと考えられる状況で比較的多く出土したものは，SK 01・02のみである。当該時期については，第１次調査の報告で，当時判明したことについて記述しており，[注8] 今回出土の遺物についても大差なく，再述する必要はないので，ここでは今回新たに検討したことのみについて記してみたい。

篦描と櫛描　今回遺構中より出土した篦描沈線紋で飾られる土器は，櫛描紋で飾られる土器と共に出土している。

SK01でみると，篦描沈線紋９点（25.7％），櫛描紋25点（71.4％），突帯紋１点（2.9％）で，櫛描紋が圧倒的に多くを占める。

SK02でみると，その上層では篦描沈線紋23点（82.1％），櫛描紋４点（14.3％），突帯紋１点（3.6％）である。下層では，篦描沈線紋88点（88.0％），櫛描紋０点（０％），突帯紋12点（12.0％）である。

以上の例を櫛描紋の出土率で見ると，SK02下層は０％で，上層は14.3％，SK02を切るSK01は71.4％というように，遺構が埋没してゆく過程と遺構の切り合いを，櫛描紋の量の増加でたどれる。したがって，篦描沈線紋から櫛描紋へは，漸次変化したことが読みとれる。

突帯紋　次に突帯紋について見ると，SK02下層で12.0％，上層で3.6％，SK01で2.9％である。これによると，時期が下がるほど減少する傾向にあるといえる。戎町遺跡では，前期終末に壺形土器の紋様中に占める突帯紋の割合がピークに達することが明らかにされており，[注9] 先の結果も妥当といえるであろう。また，播磨地域においては，第Ⅱ様式にも継続的に使用されることが指摘されており，[注10] その影響下にある当地域でも細々と使用され続けたのであろう。

第Ⅰ様式に見る突帯紋と第Ⅲ様式に見るそれとは，断面形態が異なる。第Ⅲ様式のものは，「断面三角形」であるが，第Ⅰ様式のものは，粘土紐の上下を強くなでないため，「断面カマボコ形」である。今回出土の第Ⅱ様式のものは「断面カマボコ形」で，第１次調査出土のものの中には「断面三角形」があり，[注11] 第Ⅱ様式の中で貼付け技法に変化があったと考えられる。

瀬戸内型甕　次に口縁部の形態が逆Ｌ字型の瀬戸内型の甕形土器（以下逆Ｌ形と略）についてであるが，当遺跡における如意形の口縁部の甕形土器（以下如意形と略）との比率について，第１次調査報告書では，[注12] およそ25％としたが，今回調査分の分析では，SK01で逆Ｌ形12.5％，SK02上層で逆Ｌ形25.0％，SK02下層で逆Ｌ形15.4％，その他の遺構分も含め総体で17.6％という比率になった。前回調査分との差が10％前後と大きく，それが何に起因するのか明確な答えを見い出せない。時期的にその比率が変遷することは充分考えられるが，前回調査分も今回調査分も大方は篦描沈線紋・櫛描紋が混在する状況であり，同時期と考えて差しつかえないので，それに起因するとは考えられない。[注13] ただ出土土器量に差があり，それが原因していることは充分に考えられる。

搬入土器　搬入土器と特定できるものは，胎土・施紋法・調整から生駒西麓産18点

河内地方産　と紀伊産65点である。図21－3は，壺形土器頸部に櫛描直線紋帯を施し，紋様間を横方向に篦磨き調整する独特の手法からみて河内地方産と考えられる。また，その他の破片で器種を特定し得るものは数少ないが，甕・高杯形土器と推定できるものは認められない。

紀伊産　紀伊産は，すべて紀伊型の甕形土器と考えられる。この甕形土器は，明石川流域の新方遺跡，[註14]玉津田中遺跡や[註15]西摂地域の本山遺跡，[註16]山能遺跡[註17]でも出土している。その移動ルートについては井藤暁子氏によって説明されている。[註18]淡路島経由で明石川流域にもたらされたものが，更に西摂地域に運ばれたと考えられているが，摂播国境に近い戎町遺跡では，多量の土器が出土したにもかかわらず，紀伊産のものは1点も含まれていなかった。[註19]このことから，明石川流域については，淡路島経由というルートで異存ないが，西摂地域は陸づたいに和泉，河内，西摂地域というように運ばれたと考えた方がよいのではないか。戎町遺跡は，両ルートの狭間にあって搬入されることがなかったのではないか。

和泉産　いま1点搬入品と考えられるものにSK02出土の太細併用沈線紋（拓本4－1）がある。この施紋法が当地域に存在しないことと，他の多くの土器の胎土とは異なる点から，和泉地方からの搬入品と考えられる。なお，この施紋法は，池上遺跡分類のⅠ－Bに当る。[註20]

播磨産　胎土からの認定はできないが，包含層出土の壺形土器（図5－4）は，斜下外反させる口縁部の内面に刻み目を有する突帯を二重に巡らし，頸部には断面三角形突帯を巡らす。第1次調査では，この形態の壺形土器は出土せず，今回もこの1点のみであるから，当遺跡では極めて稀である。断定はできないが，播磨地方からの搬入品である可能性は高い。

中期の土器　今回の調査で最も多く出土した土器は，弥生時代中期の土器で，中でも凹線紋出現以後のものが大部分を占める。一括性を論じられるのは，方形周溝墓の溝である。SD04・05にすえ置かれた壺形土器3点と，SX01Aの集石中に破砕された状態で出土した一連の土器である。

SD04・05出土の壺形土器（図15－1・2，図16－1）は，森岡秀人氏のいう摂津地域の優性壺（摂津型の壺）ないしは摂津系の壺で，[註21]播磨的色彩は認められない。しかし，この時期当遺跡の壺形土器から播磨地方の影響が払拭されていたわけではなく，第1次調査ST03出土の壺形土器には，紋様最下帯をはさんで列点紋を施す点は，報分でも記したように播磨的といえよう。これらの土器の時期は，第Ⅲ様式後半あるいは第Ⅳ様式に属するのであるが，後述のSX01A出土土器と共に検討したい。

SX01A出土土器　SX01A出土土器は，集石中に含まれるため，廃棄時期は同時であるこ

とを前提に考察を加える。

広口壺形土器の施紋についてみると，口縁部端面では凹線紋が最も多く7点，波状紋3点（うち1点は円形浮紋を配す），綾杉紋2点（うち1点は円形浮紋を配す），斜線紋1点，無紋2点と加飾率は高い（有紋13点で86.7%，無紋2点で13.3%）。また，口縁部内面では扇形紋5点（うち2点は波状紋および円形浮紋とそれぞれ複帯構成で施紋する），無紋12点で加飾率は低い（有紋29.4%，無紋70.6%）。

次に頸部紋様であるが，断面三角形突帯2点，指頭圧痕紋突帯4点（うち1点は凹線紋帯下に貼付する）である。凹線紋が頸部に採用され，断面三角形突帯が減少しているといえよう。

体部紋様は，櫛描直線紋・波状紋が最も多く，斜格子紋がそれに次ぐ。これら以外では，斜格子紋に円形浮紋が伴っている程度で，列点紋・簾状紋などはみられない。

広口壺形土器以外では，高杯形土器・台付鉢形土器が多く，これらは口縁部付近を凹線紋で飾る。また，脚台部内面は箆削り調整を施している。

甕形土器は少なく，口頸部が知られているのは，図20－24のみである。口縁部端面は，上方に大きくつまみ上げている。

時　期　土器量が少なく，以上のまとめが当遺跡の当該時期の特徴を代表し得るかまことに心もとないが，これらをもとに所属時期を考えてみたい。

壺形土器の口縁部端面の施紋率は，播磨・摂津の接点である明石川流域における分析値[122]の凹線紋出現後のそれと類似する。しかし，口縁部内面の施紋率は，凹線紋出現前の値に近く，時期が下がるにしたがい施紋率が明確に増加する傾向とは異なる。田能遺跡においても同様の傾向は確認されており，[123]口縁部内面紋様については，複帯紋様構成の漸増から定着へ，あるいは波状紋の消滅なども看取されている。しかし，複帯紋様構成や波状紋については，出土土器量が少なく，その率について比較することはできない。

次に頸部紋様についてであるが，指頭圧痕紋突帯が主体となり，凹線紋が出現し，断面三角形突帯が残存するという状況である。

第Ⅳ様式における頸部紋様については，凹線紋が出現し，断面三角形突帯は消滅する。そして圧痕紋突帯は残存するという状況が，山本三郎氏によって播磨において認識され，[124]明石川流域においても追認している。[125]

以上の観察・分析のみでは，今日の代表的編年である第Ⅲ様式新段階に属するのか，第Ⅳ様式に属するのか明らかではない。施紋方法についてもう少し詳細に見ると，明石川流域では，口縁部内面に施される櫛歯状工具

による扇形紋は，時期を経るにしたがいその施紋原体の中心からの回転率を減じていくことが確認でき，第Ⅳ様式ではその多くが列点紋になっている。そして，頸部の圧痕紋突帯は，第Ⅳ様式では指頭によるものが消え，ヘラ状工具による圧痕が多数を占める。

SX01A出土土器では，口縁部内面の扇形紋は回転率を減じているし，列点紋も出現している。頸部紋様では，圧痕紋突帯は指頭のみでヘラ状工具によるものは認められない。また，断面三角形突帯と凹線紋が併存する。

長々と記述したが，これらの土器群は，第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式にかけての時期に属するものであり，図19－3などは，形態・頸部紋様からみて，その存在に納得できないが，事実は存在するという消極的な結論しか得られない。また，SD04・05出土の壺形土器3点をみれば，頸部に凹線紋を施し，口縁部内面に加飾することから，第Ⅳ様式に相違ないと結論付けられるが，土器量の多い遺跡・遺構で行われる細かな属性分析とそのデータから導き出される時期変遷から考えた場合，確定的な結論とは言い難い。今後，当地域の凹線紋出現以後の土器を総体的に検討することによって，いずれ明らかになるであろう。

Ⅴ土製円板

土器片の周縁を打ち欠いて，円板状にしたものをいう。周縁を打ち欠いたままのものと，研磨したものがある。一般的には中央に穿孔し，土製紡錘車としたものの未製品と考えられることが多いが，当調査地区内で出土したものはすべて穿孔がない。

今回出土の41点のうち，欠損により重量の判明しない7点を除いた平均値は，径4.93cm，重さ25.38gであるが，分布傾向では表8のように2群の集中が見られる。Ⅰ群は，径2.9～4.7cm，重さ6.0～14.4gの範囲の中に，Ⅱ群は径4.0～5.6cm，重さ18.3～24.8gの範囲の中に納まる。畿内，中部瀬戸内の中期の紡錘車B種の重量は15g以下で，10g以下も存在し，石製品B種の場合は20g前後であるという[126]。これは，表8に見るⅠ群・Ⅱ群にそれぞれ当てはまり，傾向としては紡錘車の未製品と考えられなくもないが，穿孔例が全く存在しないことからにわかには首肯しがたい。

次にこれらの出土遺構を見ると，41点のうち26点がSD03出土で，そのうち23点は下層・最下層の出土であるから，SD03に伴うと考えられる。これに次ぐものは，方形周溝墓の溝SD02・04・05からの出土で，7点であるが周辺からの流入と考えられ，出土遺構に本来伴っていたとは考え難い。その他は，各遺構から2～3点の出土である。

では，SD03の性格であるが，第Ⅲ章で詳述したように明らかではない

番号	径(cm)	重さ(g)	番号	径(cm)	重さ(g)	番号	径(cm)	重さ(g)	番号	径(cm)	重さ(g)
1	2.9	6.0	12	4.1	9.5	23	4.9	19.0	34	5.6	30.0
2	2.9	6.1	13	4.3	12.7	24	4.9	20.0	35	5.6	33.0
3	3.2	6.4	14	4.3	——	25	4.9	21.8	36	5.8	——
4	3.2	11.4	15	4.3	19.4	26	4.9	22.4	37	6.8	44.2
5	3.3	——	16	4.4	13.8	27	5.1	19.9	38	7.0	57.3
6	3.4	7.0	17	4.6	——	28	5.1	24.8	39	7.3	55.2
7	3.5	7.8	18	4.6	——	29	5.3	46.5	40	8.5	76.4
8	3.8	——	19	4.6	20.7	30	5.3	21.4	41	9.8	153.0
9	3.9	10.8	20	4.7	13.8	31	5.5	——			
10	4.0	14.4	21	4.7	21.7	32	5.5	34.6	平均	4.9	27.1
11	4.0	18.9	22	4.8	18.3	33	5.6	23.2			

表7　土製円板計測値

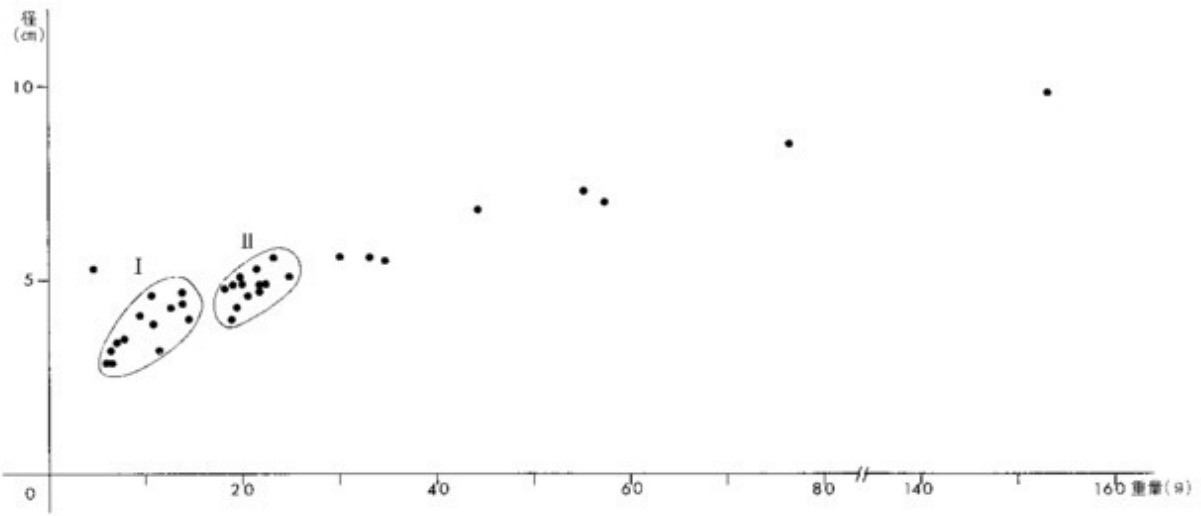


表8　土製円板法量表

が，出土土器は底部片が多く，管玉2点，イノシシの臼歯が出土している。管玉2点の出土からみれば，墓址的性格も考えられようが，遺構の形態，埋土の状況からは考え難く，破損した土器の多さと動物遺体がみられることから廃棄物の投棄場所と考えるのが妥当であろう。

他遺跡の例を見ると，池上遺跡では，包含層・主要遺構分のみからの抽出で417点を数えるという。[22] 中には穿孔途中のものもみられ，紡錘車未製品と考えられるものも存在する。しかし，紡錘車Bタイプに分類され，穿孔されたものは2点，穿孔途中のものが5点と土製円板の全体量に比し極めて少ない。

田能遺跡では，53点中10点は穿孔され，4点は穿孔途中で，紡錘車あるいはそれの未製品とし，残りは土製円板としている。[注28]

両遺跡の報告では，いずれも土製円板を紡錘車の未製品とは考えていないが，否定もしていない。

このような土製円板の出現は，縄紋時代に見られ，中世にも土師器・陶器片を利用したものが存在する。

縄紋時代の土製円板については，有孔円板の未製品，土器の補修具，祭祀具，計量具，換算具，蓋，土錘など様々な想定がなされているが，[注29]いずれも確定的ではない。縄紋時代の土器片利用の有孔円板と言われるものは，弥生時代の土器片利用の紡錘車とされるものと酷似する。紡錘車は縄紋時代には存在しないものであるから，穿孔されていても紡錘車とは誰も言わない。では，弥生時代の土器片利用の紡錘車といわれるものもまた，紡錘車ではないかもしれない。

いずれの遺跡においても，紡錘車の未製品と考えられる土製円板が，その穿孔されたものより圧倒的に多く，未製品でないと考えた方がよさそうである。当遺跡出土数の半数以上が投棄場所と考えられるSD03から出土していることは，穿孔せずにその用を果たしたと考えられ，紡錘車未製品と考えない点をより補強している。

Ⅵ玉造り

第Ⅳ章において奥田尚氏は，出土石種分析の結果から，当遺跡が玉造りをしていた可能性が高いとの結論を導かれた。その根拠は，筋砥石（SX01A集石中出土），瑪瑙（SD04出土），碧玉（SD02・03出土）が存在することからである。

まず，これらの所属時期についてであるが，筋砥石以外は周辺からの流入と考えられ時期の限定はできない。筋砥石は礫群中の1点であるから，最終的に礫の一つとして使用されたのは第Ⅲ～Ⅳ様式時であるが，砥石として使用されていた時期は限定できない。したがって，これらが同時期に存在したものかどうかは不明である。

次に，瑪瑙，碧玉が玉材として使用された痕跡を有するかどうかであるが，いずれも人為的な打撃による剥片ではあるものの，すり切り施溝や研磨は認められない。

以上から，玉造り遺跡とするには消極的にならざるを得ない。量的にも石材が3点のみというのは，遺構中の埋土を水洗選別したにしては，いかにも少なすぎる。

ただ，当該調査区が居住域ではなく，そのことによって玉造り関連遺物が少ないことも充分予想されるので，可能性は残る。

註1　丸山潔，丹治康明　『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980
「楠・荒田町遺跡」　『昭和60年度埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1988

註2　「宇治川南遺跡」　『昭和58年度埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1986

註3　一瀬和夫　「方形周溝墓・方形台状墓・そして古墳」　『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985

註4　註3に同じ

註5　今村遺雄他　「瓜生堂遺跡Ⅲ」　瓜生堂遺跡調査会　1981

註6　丹治康明　「宮滝式再考」　『藤井祐介君追悼記念　考古学論叢』　1980

註7　泉拓良氏の御教示による。

註8　註1に同じ

註9　山本雅和　「戎町遺跡第1次発掘調査概要」　神戸市教育委員会　1989

註10　今里幾次　「播磨弥生式土器の動態（上）」　『考古学研究』　第15巻4号

註11　註1に同じ

註12　註1に同じ

註13　註9文献によると，戎町遺跡の前期新段階では，その内でも時期が下がるにしたがい，逆L形の占める率が増加することが判明している。

註14　丸山潔　『新方遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1984

註15　山本三郎氏の御教示による。

註16　南博　『本山遺跡発掘調査報告書』　財団法人古代学協会　1984

註17　福井英治他　『出能遺跡発掘調査報告書』　尼崎市教育委員会　1982

註18　井藤暁子　「入門講座弥生土器　近畿」　『考古学ジャーナル』　202号　1982

註19　戎町遺跡第3次調査で，第Ⅱ様式に伴い紀伊型の甕が1点のみ出土したことを，山本雅和氏より御教示いただいた。

註20　井藤暁子他　『池上遺跡　第2分冊　土器編』　財団法人大阪文化財センター　1979

註21　森岡秀人　「突帯文土器地域色に関する若干の検討」　『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985

註22　丸山潔　「明石川流域の中期弥生土器」　『神戸の歴史』　第11号　神戸市史編集室　1985

註23　註17に同じ。

註24　山本三郎他　『川島・立岡遺跡』　太子町教育委員会　1971

註25　註22に同じ

註26　小林行雄・佐原真　『紫雲出』　詫間町文化財保護委員会　1964

註27　註20に同じ

註28　註17に同じ

註29　町田信　「土器利用の土板」　『考古学ジャーナル』78号　1973
上野佳他　「縄文時代の土製円板について」　『角田文衛博士古稀記念　古代学叢論』　1983

楠・荒田町遺跡 Ⅲ
1990

発行　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷　水山産業株式会社
神戸市長田区二番町3丁目4－1

広報印刷物登録・平成元年度　第212号A－6類